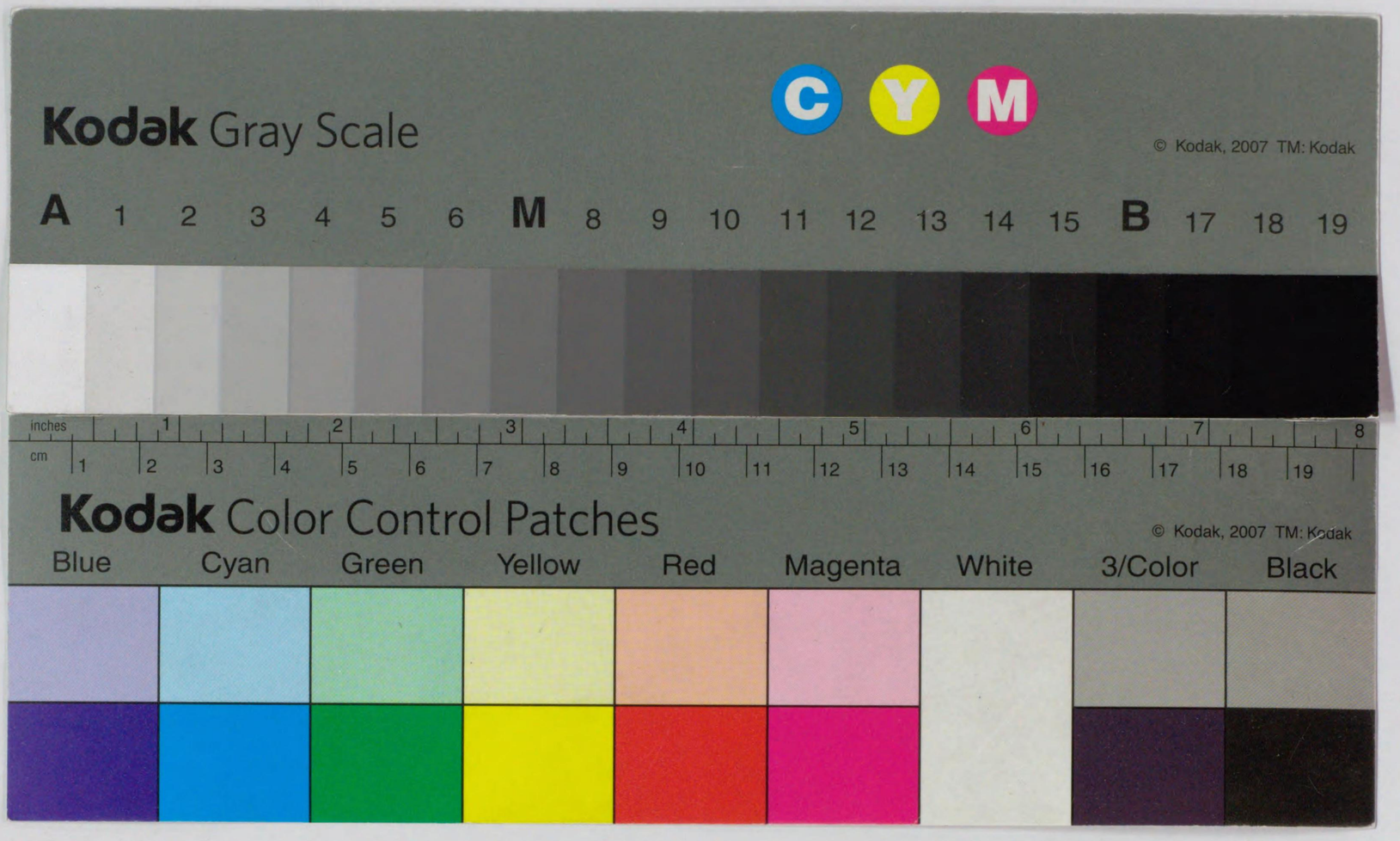


大阪市産業叢書第四輯

大阪の物價

大阪市役所産業部

發行所寄贈本

588-78

緒言

世界を擧げての歐洲大戰は、世界の物價を擧げて昂騰に導き、大正九年に至りて遂に其の頂點に逢着せしめたのである。而して爾後物價水準は低下して、英米の如き、昭和二年物價は戰前の十五割內外なるに、我國は未だ十八割に近いのである。其の原因としては通貨流通高の膨脹、金輸出の未解禁等を擧ぐ可きである。本書は其の名の如く、物價の大阪に於ける變動と、其の特殊關係を記述するに在るが故に、一般的理論を避け、主として貨物の需要供給の關係に目標を置いたのである。物價の內容をなす貨物の選定に就ては、日本銀行、商工省等の採用せるものを標準として、經濟指數たらしむるに努めたが、指數缺陷の爲收載し得ざるもの多く、遂に纏りたるもの二十八種となつたのである。

然れ共本書の特徵は、重要貨物を選出して、其の變動の經過と原因とを明にするに努めた點にあるので、物價の研究と共に價格研究の重要なるは、既に識者の認むる所である。而して之が貨物の選定は、物價二十八種の各分類中重要貨物一種又は二種を採つたのである。

昭和四年七月

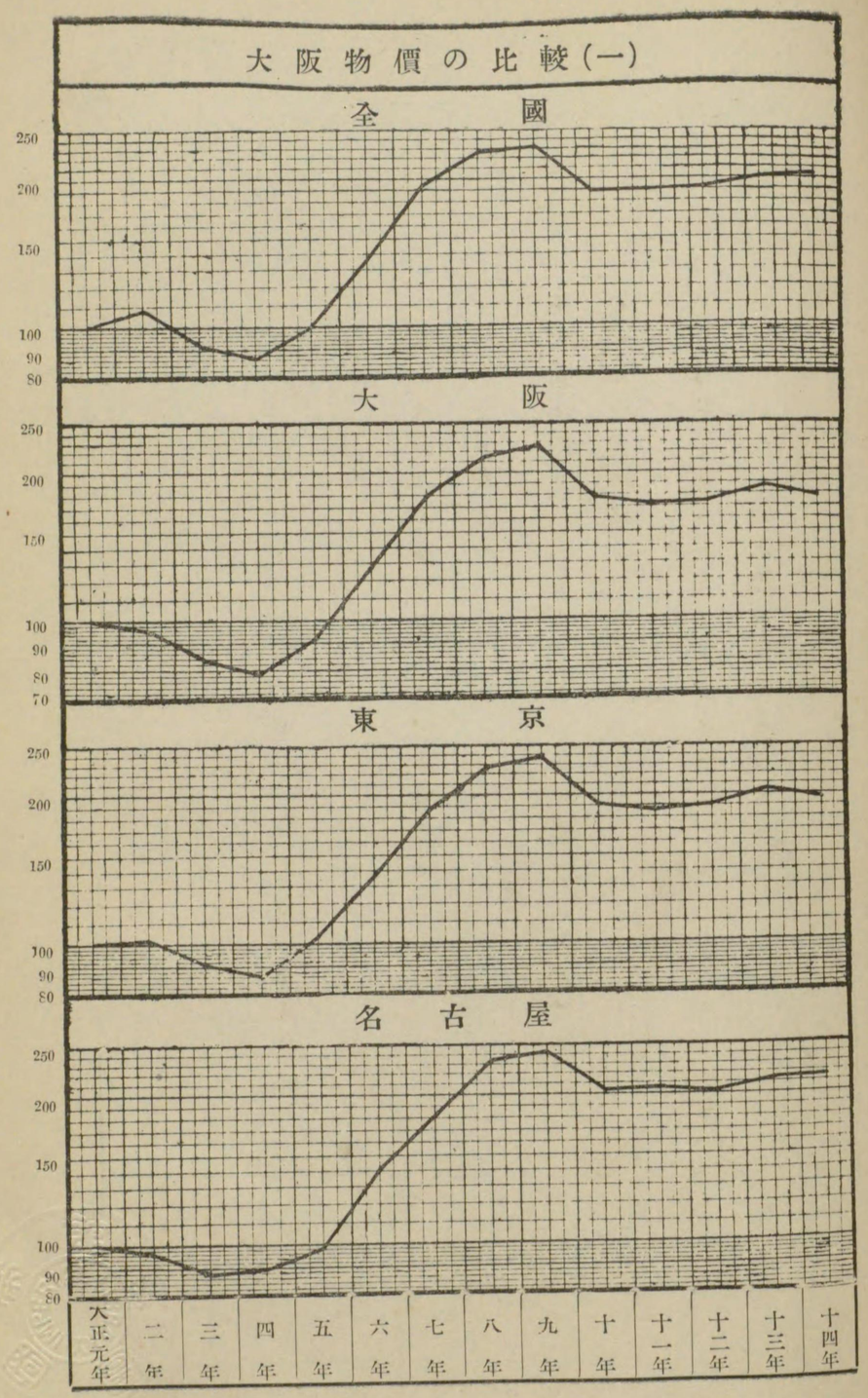
例言

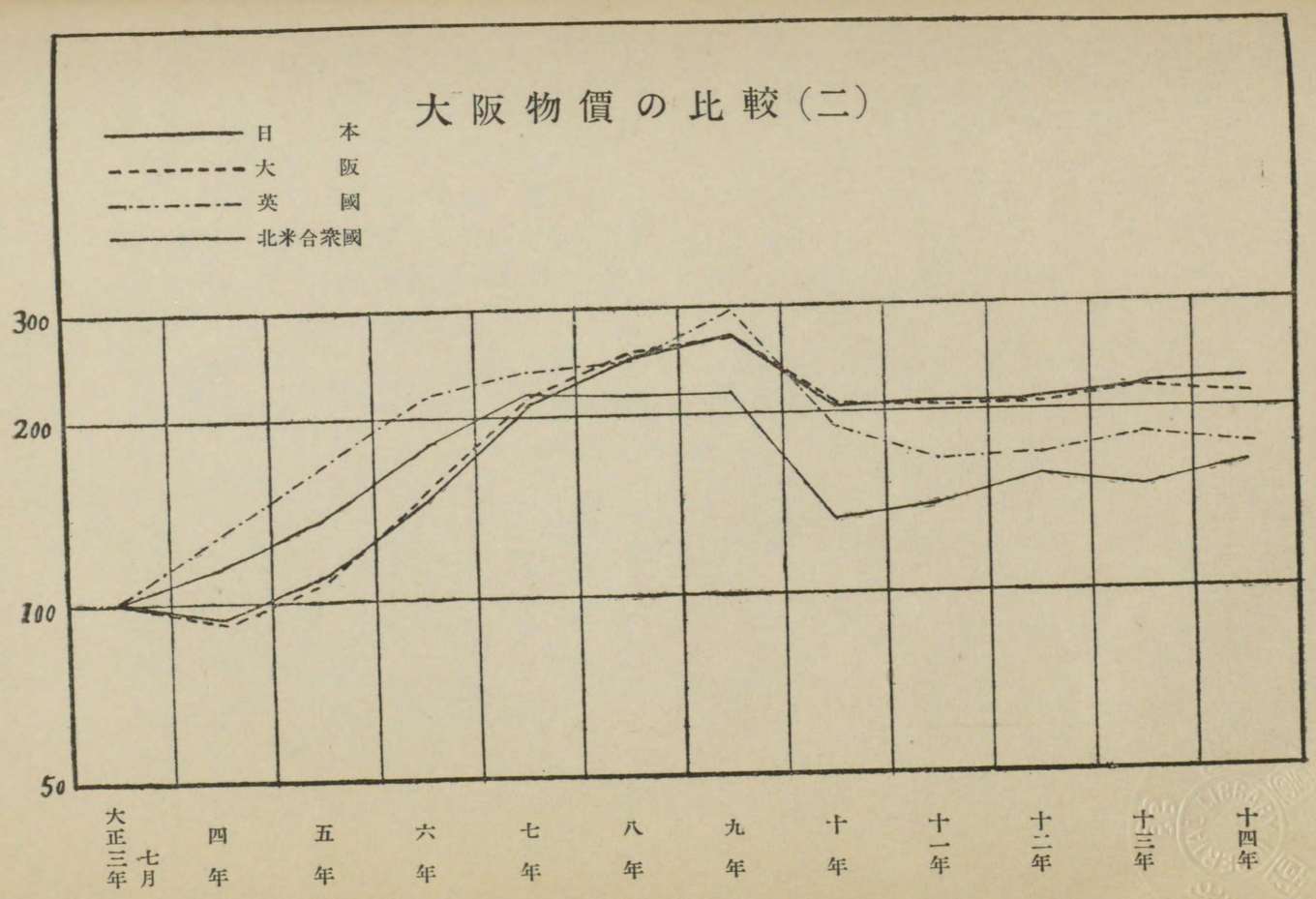
一、本書は大正元年より昭和二年に至る物價及重要商品の價格指數其の他を纏めたり

一、本書の指數は全部卸賣價格を單純算術平均法により大正元年を基準とせり

一、生活費指數として重要なる小賣物價指數及勞銀等は印刷の都合上本書より省略せり

一、指數資料は主として大阪市統計書に據り大都市の比較に就ては商工省の調査に據ることゝせり





大阪物價の比較（二）
日本
大阪
英國
北米合衆國
300
200
100
50
大正三年
七月
四年
五年
六年
七年
八年
九年
十年
十一年
十二年
十三年
十四年

目次

第一章　物價概說……一
第一節　大阪の物價……一
第二節　大阪物價の內地に於ける地位……五
第三節　英米物價指數と我國及大阪……八
第二章　價格概說……一二
第一節　米……一二
生產高—消費高—輸移出入高—米價決定上の要素
米價の史的考察—米價の季節的變動
第二節　砂糖……四〇
生產高—輸移出入高—關稅及消費稅—消費高
糖價の史的考察—大阪市場の需要と價格
大阪市場の供給と價格
第三節　綿糸……六三
綿糸價格騰落の環境—綿糸價格の史的考察
綿糸價格騰落の計數的考察
第四節　絹織物……一一〇
價格を左右するもの—絹織物の價格

第五節　石炭……一三六
大阪の石炭價格―石炭價格の季節的變動
大阪の石炭事情―工業の發達狀態―我國
石炭の需給關係―石炭の生産費―石炭價
格騰落の原因
第六節　石油……一四三
第七節　鐵……一五四
鐵鑛石、銑鐵の需給狀態―鐵價の史的考察
鑛石價格の變動
第八節　セメント……一八〇
セメントの需要―セメントの供給―セメント生産費
セメント價格及其の騰落
第九節　洋紙……一九二
附　錄
價格及價格指數……一
食料品―衣料品―燃料及燈火用品
金屬品―建築用品―雜品
價格及價格指數月別……一三
米―和白砂糖―綿糸―甲斐絹―石炭
石油―鐵―セメント―洋紙

大阪の物價

第一章　物價概說

第一節　大阪の物價

大阪の物價に就き大正元年より最近に至る騰落を見るに波瀾曲折に富んでゐる。此の近々十餘年間に於ける經濟現象の世界的の動きは、非常に大きく、歐洲戰亂は世界の物價に大きなエポックを作り出したといふても差支がない、唯單に物價の大暴騰を來したのみでなく、全世界の物價の水準に一大轉換を與へてゐる。以下簡單にこの消長を明にして見よう。

物價中重要品目（重要品目であつて元年より最近に至る迄引續き價格を取り得ざるものは捨つ）二十八種を撰擇して、之を單純算術平均の方法にて指數を算出して見ると、

大阪の物價表（資料大阪市統計書）

年次	食糧品（九種）	衣料品（五種）	燃料及燈火用品（三種）	金屬品（二種）	建築用品（四種）	雜品（五種）	平均（二十八種）
大正元年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

第一節　大

二年	一〇〇	九七	一〇六	九七	九五	九三	九八	
三年	九八	八四	一二八	八九	八四	八三	九二	
四年	九五	八六	一二五	一三二	八四	九五	九八	
五年	九八	八六	一六九	二一七	一一三	一一六	一二〇	
六年	一一六	一五三	二二八	二九六	一五四	一四一	一五七	
七年	一五六	二三五	三二二	三四六	一七四	一八八	二〇八	
八年	一九九	二八五	三六九	二二五	二六九	二四八	二五三	
九年	二三七	二四八	三八四	二一八	三三九	二六九	二七四	
十年	一九九	一九二	二九三	一四四	二五八	二〇九	二一四	
十一年	二〇四	一七七	二六七	一三六	二六九	二〇六	二一一	
十二年	二〇一	二〇二	二三九	一四三	二四六	一八六	二〇五	
十三年	二〇六	二三六	二四一	一三九	二一八	一七六	二〇七	
十四年	二一六	二一三	二三八	一三六	二一三	一九五	二〇八	
昭和元年	二〇〇	一六三	二三二	一二八	二一三	二〇八	一九五	
二年	一九五	一五五	二三一	一二六	一九六	二三八	一九二	

即ち大正元年より三年迄は下落を示してゐるが、三年を底として四年以降九年迄は、大暴騰に轉換してゐる。大正三年七月の歐洲大戰亂勃發と共に、經濟界に大變調を生じて、參戰國は、戰時必需品工場はもとより、是れ以外の生產品工場

も、戰時品の製造に主力を注ぎ、他の商品の輸出餘力は殆どなく、爲に從來參戰國からの輸入を俟て、消費に供せられてゐた國は、輸入杜絶して、商品は暴騰し、各國國內產業の發達を刺戟するに至つたのである。

我國は大正三年八月戰爭に參加したのであるが、地理的關係上大平洋、印度洋等東亞の平和を確保すれば足りたので、殆ど中立國と同樣の地位に置かれてゐたのである。而しながら國內工業は、其の當時今日の如く隆盛でなく、大戰勃發時は未だ化學工業、機械器具工業、其の他鉛筆ペン等の製造工業の如きは幼稚の域を脫しなかつた、而も之等商品の輸入は杜絶し、需要供給の不均衡を生じて、市價の騰貴が甚だしかつたのみでなく、之等の商品を手にする事さへも難事とされてゐたのである。而して輸出能力ある商品でも、海外からの需要喚起と共に、在貨の逼迫甚だしくなつて、商品の價格も愈〻急なるのを覺えたのである。かゝる狀況は製產手段の如何に拘らず、製產は利益を生じて事業界は頓に活況を呈して來たのである。

斯の如く物價は對內外の關係で異常な騰貴を示し、從て生活費も昂らざるを得なかつたが爲に、生活の不安は日に加はつて、大正七年の米騷動の如き事件が起きたので、其の當時の一端を知る事が出來る。

かゝる間に、一般收入も增加して購買力は旺盛となり、通貨は膨脹して加速度的に物價は昂騰し、七年の媾和條約締結當時は、元年の指數に較べて約二倍を示してゐる。媾和條約締結の結果戰時必需品は大慘落があつて、一時的の恐慌に襲はれたけれ共、間もなく戰後の景氣は全世界を風靡して、物價は天井知らずの騰貴ではないかと、巷間に唱へらるる樣になつたのである。

而しながらかゝる好況は續くべき筈なく、偶〻本市某銀行の、手形交換尻の決濟不能が傳へられて、財界は不安狀態に導かれ、所謂大正九年の財界の大恐慌となつて現れたのであるが、物價はなほ最高記錄二百七十四の指數を示してゐる。

以後物價は低落歩調に轉換して、十年は財界混亂の後を受けて、九年に比し二割二分の大崩落となつてゐる。十一年以降は財界の整理の歩を進めて、將來の活況に備へるべく努力したけれ共、十二年九月の關東地方の大震火災で、商品の燒失は莫大であつたので、需給の關係は不圓滑となつて、關西地方の商品の動きは旺盛となり、物價の引締を見たけれ共、何分國內の經濟原則として百億の國富を燒失したのであるから財界の好況を望む事は無理で却て財界の整理は、益〻緊急時たる事が切であつたのである。

而しながら七八年の好況の醉は醒ずに、中間景氣の出現を夢見る一派の策動は、物價低落を阻止して、不自然なる投機に、物價の騰貴を助長する有樣となつて、十三四年の兩年は、物價昂騰を見るに至つたのである。（十三四年の騰貴は、海外の事情に支配されてゐた原因もあるけれ共）。けれ共大勢は動す事が出來ず、昭和改元と共に低落に改り、二年四月には銀行の取付が全國に蔓延し、次でモラトリアムの實施となり、財界の整理は餘儀なきに至つたのであるが、物價は前年より下り百九十二を示し、戰前に比し未だ九割二分の騰貴となつてゐる。

之を各部門別に見ると、指數最高記錄は大正九年に多く、衣料品は八年、金屬品のみは大正七年である、其の最高騰貴率は食糧品十三割七分、衣料品十八割五分、燃料及燈火用品二十六割九分、金屬品二十四割六分、建築用品二十三割九分、雜品十六　九分であつて、騰貴率最も少いのは食糧品である。之は彈力性に乏しい貨物であるからであらう　燃料及燈火用品、金屬品は戰時必需品で、騰貴率が非常に急速であつた事は、輸入杜絕、或は海外の需要が非常に旺盛であつた關係にあるのである。

昭和二年に於ては燃料及燈火用品の十三割一分が首位で、雜品の十二割八分、建築用品の九割六分、食糧品の九割五分衣料品の五割五分で、金屬品は僅に一割六分の騰貴に過ぎないのである。

第二節　大阪物價の內地に於ける地位

東京、名古屋、大阪及全國の物價指數を、大正元年を基準として算出すると次ぎの如くである。

全國及三大都市物價表

（資料商工省統計書）

年次	全國	大阪	東京	名古屋
大正元年	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇
二年	一〇〇・八	九六・七	一〇一・五	九六・四
三年	九二・三	八四・三	九一・〇	八八・三
四年	八六・五	七八・七	八六・三	八九・三
五年	一〇〇・〇	九〇・八	一〇三・〇	九九・六
六年	一三六・六	一二八・〇	一三六・五	一四一・六
七年	一九三・九	一八〇・三	一八八・四	一八二・四
八年	二二九・〇	二一二・一	二二六・四	二三一・五

第二節　大阪物價の内地に於ける地位

九年	二三一・七	二三五・八	二三九・八	二四二・五
十年	一九〇・六	一七七・一	一九二・一	二〇三・一
十一年	一八九・九	一七二・八	一八五・五	二〇六・六
十二年	一九一・六	一七四・二	一九一・五	二〇三・二
十三年	二〇一・〇	一八六・一	二〇四・三	二一三・〇
十四年	二〇三・六	一七八・六	一九七・〇	二一一・七

右指數を全國及東京に就て見るに、騰落程度は兩者共に近似數を現し、而も指數は類似してゐるが、大正十四年に於て反對現象を示してゐるのみで、概して他都市に見るように、差異を認めない。名古屋は大正二年に大阪と同一歩調にして低落し、以後五六年迄は、東京と騰落の度合は略同一であるといふて、差支がないけれ共、七年後は名古屋獨自の立場で動き、大阪東京の高位に指數は置かれてゐる、即ち戰後に於ける物價の低落程度は、他の都市及全國に比して少きを知るのである。大阪は東京、名古屋及全國の指數よりも、低位にある、即ち大正元年の其れに比して、騰貴率を各都市及全國に比較すると、

	大正九年	大正十四年
全國	十三割一分七厘	十割三分六厘
大阪	十二割五分八厘	七割八分六厘
東京	十三割九分八厘	九割七分
名古屋	十四割二分五厘	十一割一分七厘

右の如く、大阪は騰貴率に於て低位である。

各年に於ける各都市の物價指數は、全國の指數に比して、如何なる地位に置れてゐるかといふに、各年の全國物價指數を百として、大阪、東京、名古屋を見ると、次表の如き結果を得らるる。

全國物價百とした三大都市物價表

年次	全國	大阪	東京	名古屋
大正元年	一〇〇・〇	一〇八・一	一〇三・八	九七・六
二年	一〇〇・〇	一〇三・八	一〇四・五	九三・三
三年	一〇〇・〇	九八・六	一〇二・三	九三・四
四年	一〇〇・〇	九八・三	一〇三・六	一〇〇・五
五年	一〇〇・〇	九七・七	一〇六・四	九六・七
六年	一〇〇・〇	一〇一・三	一〇三・七	一〇一・二
七年	一〇〇・〇	一〇〇・五	一〇〇・八	九一・八
八年	一〇〇・〇	一〇〇・一	一〇二・五	九八・六
九年	一〇〇・〇	一〇五・三	一〇七・三	一〇二・一
十年	一〇〇・〇	一〇〇・四	一〇四・六	一〇四・〇
十一年	一〇〇・〇	九八・三	一〇一・三	一〇六・一
十二年	一〇〇・〇	九八・二	一〇三・七	一〇三・五

十三年	一〇〇・〇	一〇五・五	一〇三・四
十四年	一〇〇・〇	九四・八	一〇〇・三	一〇一・四

即ち大正元年は大阪を最高として東京、名古屋の順位であつたのであるが、九年には東京、大阪、名古屋に變り、十四年には名古屋、東京、大阪と全く順位を轉倒してゐる。

かゝる大阪の狀況は、年と共に貨物の豐富になるを意味し、而も需給關係の圓滿なる發達を現してゐるものと、見らるゝのである。

第三節　英米の物價指數と我國及大阪

世界の物價は、大戰開始と共に劃一せられ、各國の物價基準を、戰爭直前大正三年七月に置いてゐる、此の七月を基準として英國、米國の物價を考察すると、英國はセルビヤに戰雲急なるに及びて、對獨宣戰を布告するや、戰時品はもとより、他の物價の昂騰著しく、早くも四年の平均物價は三割高を示して、五年六割八分、七年十三割六分といふ狀態に、鰻上りの上騰を現し、七年末の媾和條約締結の結果、戰勝氣分濃厚であつて、貨物の欲求は一入旺となり、大正九年には實に十九割七分四厘の暴騰を、見るに至つたのである。而しながら物價昂騰は、產業界への惡影響甚だしきを知ると共に、極力低落へと導き、財界の整理を斷行した結果、物價は九年に比し約十割強の、暴落と變り、其の後彌騰貴に傾いたけれ共、十四年に落調を入れて、戰前に比して七割五分の騰貴に止めてゐる。而して米國の狀勢は、英國に比して、騰貴率は僅少である、勿論米國の參戰は、餘程後れてゐた丈に、戰時必需品等の騰貴力の差異を、生じたのであらう。而して七割は十一割六分强の騰貴で、英國より二割少く、我國より高位にあつたのである。然るに戰後の景氣が、世界を風靡してゐた八九年は、七年と保合狀態にあつて、他の國が、戰後の景氣に醉ふてゐる間に、早くも米國は財界の整理に着手して、物價の昂騰を阻止して、九年には七年と大差なく、十一割七分强の騰貴である。之を英國に比すると八割、我國に較べて五割の低位にあつたのである。九年の世界財界の崩潰は、物價の大慘落を示し、十年は英國十割、米國八割六分、我國は六割の崩落である。之の崩落によつて、米國は戰前の物價より僅に三割一分强の騰貴となり、產業界を非常に有利の地位にあらしめた結果、反動後列國が財界の整理に四苦八苦の時に、景氣回復の徵があつたのである。而して十一年以降物價は、累年上騰したけれ共、十四年にはなほ列國より戰前との騰貴率は、僅少であつたのである、かくして、米國は財界の整理全くなり、從來の金融市場中心地は、ロンドンよりニューヨークに移動せしめ、近時景氣は全く回復して、ウオール街の會社は何十割の配當を續けてゐるとのニュースに接してゐる。

我國の指數を英米兩國に較べると、大正四年には戰前より下落にあつたが、五年より八年の間に大暴騰を示して、英米國の指數を凌駕して、十年後も兩國に見る樣な低落を示さず、戰前の十割以上に、各年共騰貴を現はしてゐる。十四年は我國十二割二分、英國七割五分、米國六割二分であつて、大阪の物價は我國の物價と大同小異で、英米に比して下落の餘裕は、未だ充分あると認められる。

以上を指數に示すと次表の通りである。

各國物價表

年次	大阪	日本	英國	北米合衆國
大正三年（七月）	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇
四年	九二・七	九四・二	一二九・二	一一三・八
五年	一〇七・〇	一〇九・八	一六八・三	一三六・六
六年	一五〇・九	一四六・五	二一四・四	一八〇・五
七年	二一二・五	二〇九・三	二三六・〇	二一六・七
八年	二五〇・一	二四七・一	二四六・八	二一五・七
九年	二六六・一	二六七・九	二九七・四	二一七・三
十年	二〇八・七	二〇七・七	一九〇・一	一三二・三
十一年	二〇三・七	二〇七・七	一六七・三	一三九・九
十二年	二〇五・三	二〇八・八	一六九・九	一五四・八
十三年	二一九・三	二二〇・〇	一八二・六	一四八・五
十四年	二一〇・五	二二二・〇	一七五・〇	一六一・一

（伊東）

第二章　價格概說

第一節　米

古來我國は、豐葦原の瑞穗の國と稱せられて、米は明治の中頃迄需給は保たれてゐたが、人口の急激の增加に脅されて漸次不足の度を加へて、臺灣、朝鮮の增產計畫ありて、異狀な發展を示してゐるに拘らず、年々多額の外國米の輸入を仰いでゐる。而して米は小麥のやうに、世界を市場に仰ぐのと異り、或地方に局限せられてゐるから、需給の關係は非常に縮少され、天候の如何に支配され易く、且一日も缺かす事の出來ない主要食糧品であるが、永年の保存に適せない關係から、過分の蓄藏は不可能である爲、商人をして他の貨物より、より多くの思惑を助け、些細の需給の變動も、米價騰落の原因を與へられ、所謂『彈力性に乏しい貨物』とされてゐる。

而して米價の變動は、社會現象に重大なる影響を及す故に、米價調節は爲政者の苦心の種となり、過去に於て、幾多の施設が試みられてゐる。

以下米價に就て、大正元年より昭和二年に至る史的考察を試み、併て統計的に其の變動の因果關係を探究して見やう。而しながら米價の變動を知るには、先づ生產、消費及輸出入高を必要とするが、朝鮮、臺灣は近年自給自足の域に達し、內地に移出するの狀況にあるから、直接大阪市場の米價に及す內地生產、消費及輸移出入高を主題として、概要を述べ

やう。

第一項　生産高

内地の生産高を年別に列記せば、

米生産高表

（内地）

年次	作付段別	總收穫高	一段歩當り平均收穫高
	町	石	石
大正元年	三、〇〇三、〇五二・九	五〇、二二二、三九四	一・六七二
二年	三、〇二九、七〇五・二	五〇、二五九、三七九	一・六五九
三年	三、〇三三、三六八・五	五七、〇〇七、五一〇	一・八七九
四年	三、〇五六、五六七・一	五五、九二四、〇七九	一・八三〇
五年	三、〇七一、一六五・〇	五八、四五二、三八六	一・九〇三
六年	三、〇八三、四四七・〇	五四、五六七、九二七	一・七七〇
七年	三、〇九二、七九三・三	五四、七〇〇、一六一	一・七六九
八年	三、一〇四、六三四・二	六〇、八一八、六八八	一・九五九
九年	三、一二六、五三五・四	六三、二〇八、五四〇	二・〇二二
十年	三、一三四、八九四・九	五五、一八〇、四六八	一・七六〇
十一年	三、一四〇、七六六・九	六〇、六九三、八五一	一・九三二
十二年	三、一四七、五六一・四	五五、四四四、〇八九	一・七六一

十三年	三、一四二、五一四・四	五七、一七〇、四一三	一・八一九
十四年	三、一五三、八三七・七	五九、七〇三、七八四	一・八九三
昭和元年	三、一五八、二七一・二	五五、五八二、六三二	一・七六〇
二年	三、一七三、八七九・七	六二、一〇四、五〇三	一・九五七
平均		五六、九四〇、〇五〇	一・八三四

右表の總收穫高は、年と共に增加してゐる、之は作付段別の增加による自然の增收であつて、之を一段歩當り平均收穫を見るも各年增收の跡を示してゐる。

明治十一年より五年毎に、平均一段歩當り收穫高を示せば、

年次	平均反當り收穫高	增減
	石	石
明治　十一年より十五年迄	一・一六八	—
十六年ク　二十年ク	一・二九〇	〇・一二二
二十一年ク二十五年ク	一・四二〇	〇・一三〇
二十六年ク三十年ク	一・三五八	（一）〇・〇六二
三十一年ク三十六年ク	一・四九八	〇・一四〇
三十六年ク四十年ク	一・六〇四	〇・一〇六
四十一年ク大正元年ク	一・七一一	〇・一〇七
大正　二年ク　六年ク	一・八〇八	〇・〇九七
七年ク　十一年ク	一・八八八	〇・〇八〇

十二年ヶ昭和二年ヶ　一・八三八　（一）〇・〇五〇

（一）印は減少を示す

即ち一段歩當り平均收穫高は、五年毎に約一斗宛の增加となつてゐるが、大正年間に入つて其の增進率は低下し、最近に至つて遂に、減少を示してゐるは注目に値する。

而して增收の原因と看做さるゝもの、詳細の說明は要しないから大略を記せば、

一、行政及研究機關の施設
二、耕地整理の進捗
三、品種の改良
四、肥料の改良及經濟的使用方法の發達
五、產米檢查の施設
六、耕種技術の進步
七、病菌害虫有害動植物の驅除方法の改善

など主なるものであらう。

第二項　消費高

內地米の收穫時期は九、十、十一月の年末近くにして、而も產米檢查は十一月、十二月、一月に最も多く、即ち出廻期は年末年始にある關係上、其の年の生產米は大部分翌年の消費に充てらるゝものと看做さるゝから、其の越年米の量と其の年の輸移出入の量とを加減した差が、消費高である。

之を大正元年より同十四年迄を記せば、（輸移出入は別項にて詳解す、持越米は數量不明に付加減せず）

米消費高表

年次	消費高 石	人口一人當り消費高 石
大正元年	五四、三二三、五二一	一・〇六八
二年	五四、五〇三、四九六	一・〇五六
三年	五四、一八四、〇九九	一・〇三六
四年	五九、三一〇、五〇六	一・一一八
五年	五七、四六二、三七九	一・〇七〇
六年	五九、八八三、八〇七	一・一〇二
七年	六〇、六二七、二六一	一・一〇五
八年	六三、八八〇、三五九	一・一五七
九年	六二、六六二、二九三	一・一四三
十年	六七、六八二、二三九	一・二〇一
十一年	六二、〇〇〇、九四八	一・〇八七
十二年	六六、二〇七、六四〇	一・一四七

十三年	六四、二〇四、六四六	一・〇九九
十四年	六七、三四五、七六九	一・一三八

である。

此の數字を見ると、大正元年から消費高が年々增加してゐる、之は人口增加による自然の趨勢であつて、又一面には文明の進歩につれて、生活の向上を促し、米の一人當り使用量を高めつゝある傾向がある。

此の傾向の數字的實證を示せば、

年次	人口一人當り平均消費高（石）	增減（石）
明治十一年より十五年迄	○・七九四	—
十六年ク二十年ク	○・八三○	○・三六
二十一年ク二十五年ク	○・九四○	・一一○
二十六年ク三十年ク	○・九五六	○・一六
三十一年ク三十五年ク	○・九八一	○・二五
三十六年ク四十年ク	一・○三八	○・五七
四十一年ク四十五年ク	一・○六三	○・二五
大正二年ク六年ク	一・○七六	○・一三
七年ク十一年ク	一・一三七	○・六一

即ち明治十一年より十五年の間の平均消費量は、僅に七斗九升四合であるが、之を大正七年より大正十一年の平均一石一斗三升九合に比較すると、三斗四升五合の差を現してゐる、其れだけ生活向上の影響を、五十年の間に受けてゐると見られる。

而して米は内地に於ては何れの方面に消費せらるかといふに、

一、飯米用
二、清酒、燒酎、麥酒、濁酒、味淋、甘酒、白酒、酢、醬油等の醸造原料
三、麴及味噌の原料
四、菓子原料（上新粉、飴、煎餅、餅菓子）
五、餅及團子
六、糊用
七、麵麭

などであつて、消費の割合は、農商務省に於て大正九年十一月一日より、同十年十月末日迄を調査せられた所によると、

米消費種類別表

	内地米	朝鮮米	臺灣米	外國米	計
	八四・七%	九六・○%	八三・六%	七八・六%	八五・一%
飯米		○	○	○	・二
種子	一・三				
酒類	七・○	○・七	—	八・四	六・八

内 清酒	六・七	〇・七	—	—	六・四
内 其の他の酒	〇・三	—	—	八・四	〇・四
菓子、飴	〇・六	一・五	八・三	七・五	〇・七
餅	五・一	〇・四	五・三	一・三	四・八
麹	〇・五	〇・一	—	〇・一	〇・四
酢、味噌、醤油	〇・六	〇・六	一・二	〇・三	〇・六
内 酢	〇・一	〇・三	〇・五	—	〇・一
内 味噌	〇・四	〇・三	〇・六	—	〇・四
内 醤油	〇・一	〇	〇	—	〇・一
内 區分不明	—	〇	〇	—	—
糊	—	〇・三	〇・三	〇・五	〇・一
其の他	〇・二	〇・五	一・三	三・三	〇・三
計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

となつてゐる。

第三項　輸移出入高

前記に、内地生産高及消費高に就て述べたから、其の消長を大體知る事が出來る。而しながら年々生産高は消費高より少く、此の不足高は如何にして補ふてゐるか、殖民地及外國との米の輸移出入統計を調べよう。

米輸移入表

	輸入高	移入高 臺灣より	移入高 朝鮮より	再輸移入高	合計
	石	石	石	石	石
大正元年	二、〇一一、二六八	六五二、五七七	二四六、九五四	—	二、九一〇、七九九
二年	三、三二九、三六〇	九八〇、八五二	二九四、六六一	一五〇	四、六〇五、〇二三
三年	二、四七一、二五一	八一二、四四七	一、〇二五、三七一	八三一	四、三〇九、九〇〇
四年	五一七、三五九	六九四、五四一	一、八七二、六五〇	五〇	三、〇八四、六〇〇
五年	二八六、九四四	八〇〇、七六七	一、三三二、七九三	四、八一八	二、四二五、三二二
六年	五二三、八九六	七八六、〇八二	一、一九五、四一二	六八	二、五〇五、四五八
七年	三、六六二、一一八	一、一三九、〇五五	一、七三三、八八八	一、一六二	六、五三六、二二三
八年	五、四二八、二五四	一、二六二、五七一	二、八〇六、四三七	三、九八一	九、五〇一、二四三
九年	七四九、九八二	六六三、一二〇	一、六五二、九五八	七二〇	三、〇六六、七八〇
十年	八一六、七〇八	一、〇二四、二四八	二、九〇四、七八〇	三六	四、七四五、七七二
十一年	三、七九一、一〇七	七四〇、六一六	三、一三八、四二四	九二八	七、六七一、〇七五
十二年	一、六二〇、三〇九	一、一三一、九〇五	三、四五三、〇一八	八七四	六、二〇六、一〇六
十三年	三、三二七、五〇五	一、六五八、二〇七	四、五四七、五七〇	一、九三六	九、五三五、二一八
十四年	五、一三六、三九七	二、五二二、一三五	四、四三一、五九九	一、五〇一	一二、〇九一、六三二

米輸移出表

	輸出高	移出高 臺灣へ	移出高 朝鮮へ	移出高 樺太へ	再輸移出高	合計
	石	石	石	石	石	石
大正元年	二〇〇、九八七	四三、六五五	七、八八五	四六、四一七	八四七	二九九、七二一
二年	二〇七、七八九	四〇、九六〇	三、〇〇三	七二、〇六六	一〇三	三二三、九二一
三年	二五〇、〇〇七	四四、九九八	二、九九五	八七、一四八	三二	三八五、一八〇
四年	六二一、五三六	五九、〇〇五	二、四九六	九八、一八一	三八七	七八一、六〇五
五年	六七七、一五三	七四、九九〇	一五、四一四	一一八、〇九三	一、三七一	八八七、〇二一
六年	八三六、八四八	八七、六八一	一二、七九八	一三四、〇八四	二、六七五	一、〇七四、〇八六
七年	二六六、三二五	七八、一九七	一三、九五六	一一四、一四五	二、五六六	四七五、一八九
八年	一二五、四六八	二七、四八九	二一、三七八	一四四、五七一	四、〇八〇	三二二、九八六
九年	九五、八八九	二六、一四八	一二、二三六	八四、二三七	四、六六五	二二三、一七五
十年	一〇四、八八六	四三、五五六	一三、六〇二	八六、二七五	二三、七五六	二七二、〇七五
十一年	四七、八六八	二六〇、三四七	一五九、四〇二	一四一、一〇四	二四一、九四五	八五〇、六六六
十二年	三五、二七七	六〇、二二七	八七、七八三	二二四、一三二	二八四、八九七	六九二、三一六
十三年	二五、〇六一	一〇四、八八二	三八五、五九二	二二四、八二七	三四、二九九	七七四、六六一
十四年	八八、七六二	六四九、七四五	七六四、九八四	二八〇、二〇三	一三二、五八二	一、九一六、二七六

米輸移入超過高表

年次	輸移入超過高	年次	輸移入超過高
	石		石
大正元年	二、六一一、〇八八	大正九年	二、八四三、六〇五
二年	四、二八一、一〇二	十年	四、四七三、六九七
三年	三、九二四、七二〇	十一年	六、八二〇、四〇九
四年	二、三〇二、九九五	十二年	五、五一三、七九〇
五年	二、五三八、三〇一	十三年	八、七六〇、五五七
六年	一、四三一、三七二	十四年	一〇、一七五、三五六
七年	六、〇六一、〇三四		
八年	九、一七八、二五七		

第四項　米價決定上の要素

米價の決定は中〻困難な問題であるが、其の要素は生産費である、即ち生産物の價格の限界の決定にあるのである。而しながら需要供給の量的作用は必ずしも生産費を支持するものでなく、殊に米の如き彈力性に乏しい貨物は尙更其の觀を深くする。

而して生産費の決定は困難であるけれ共、其の高低は米價に非常に影響を及し、統計的研究には、是非なくてはならないものであるが、其の調査の材料がないから、今此に示す事が出來ない。然し年々生産費を增加せしむる傾向にある事は

疑の餘地のないところであるから、單に增加の傾向にあるといふ事を事實として、需給關係の變動のみを記述しやう。

今需給上に何等の變化がないと假定すると、米價は生產費の高低に支配されて動き、必ず米價と生產費とは平行狀態を脫しないであらう。而して需要上に一定の變化を生ずる場合、例へば內地の人口は年々七八十萬人を增加し、或は生活の向上に伴ふて、一人平均米の使用量を增すとすると、供給上に變動のない限りは、米は自然に不足を生じて、前途は不安狀態に置れるから、米價は上騰を示し、米の使用量を抑制して、代用米の需要を多からしむるのが、常態であらねばならない。けれ共人口の增加、或は人口一人當の使用量の增進は、年々一定の增加率を示してゐるから、大勢としては米價昂騰の材料に供せらるも、新聞紙上に散見するやうに、波瀾を來たさないのが通則と考へらるゝ。此に假需要といふ現象を示す場合がある、此の現象が需要上に於ける最大の米價變動の原因を誘引するのである。

次に供給上の變動であるが、原始產物たる米は、天然に支配され、植付時の雨量が少なければ作付段別は減少し、從て收穫高は減り、いかに播種期に好順打續いても、植付後の天候を見ねば其の豫測は許されず、植付後に順調に行ても、收穫時期の天候不良なれば、鎌入不足などゝいふ結果となり、思はぬ減收を示す場合がある、或は二百十日、二百二十日、八朔、白露といふような厄日があつて、突發的災害を被る事があつて、生產高に非常に影響を及さるゝ、即ち生產高の不足は、供給力が薄弱となり、米價は昂騰し、豐作は供給過剩となつて、低落に資せられるのである。

之等は生產上に於ける原因であるが、人意的には先高見越に伴ふて賣惜しみとなり、先安目宛に投賣といふような現象も現れる場合もある。

以上述べたような事柄が、複雜な作用のもとに、米價の決定を見るのである。

以下史的考察に之を求めよう。

第五項　米價の史的考察

大正元年　明治四十三年の不作尻を受けて四十四年は品薄の商狀にあつて、米作豫想時期に於ける夏季に暴風雨あり、東京灣海嘯等の强材料の刺戟を受けて　頓に上騰せしも、政府の米價對策に會ひ下落の趨勢にて大正元年一月に入る、初頭二十三圓六十三錢なりしも、持越米の缺乏、新米早喰懸念、通貨の膨脹等にて、七月には未曾有の新高値の二十七圓四十二錢を出現し、其の後漸落步調を辿りしも、米の生產は豫想外の減收のため、年末には二十七圓三十錢と反撥す。

大正二年　一月に入りて、例年の如く出廻期の最盛時にて、米價は下押し、三月より臺灣、朝鮮米の、市場に常時代用の實施、七月に入りて、朝鮮米の移入稅を廢止して、移入促進に資して米價の昂騰を防ぐ。

大正三年　前年度の漸落步調は本年も受けて、初頭二十三圓六十錢の米價は、貿易入超のため正貨の流出、通貨の縮少而も天候順調にて米作豫想良好なりしために、歐洲戰亂の開始、臺灣米代用廢止等の强材料を得たるも、大勢を挽回するの力なく、遂に年末十五圓五十六錢に崩れ、明治四十三年以來の安値に入る。

大正四年　大正二年度の生產高より七百萬石の大增收の餘波を受け、益〻軟弱にて、依然低落を辿り、一月勅令第二號を以て米價調節令の發布を見、即日實施となり、二三年度の古米は三十萬石の買上を行ひ、一時下落を阻止したけれ共、本年の米作は、植付時より七八九月の好順に惠まれて、豐作を豫想され、十月の交には十五圓四十錢に崩れたが、秋日和

思はしくなく、陰鬱低溫施肥不足等の原因にて、鎌入不足の狀態となり、年末强調を保ち、本年中の最高十七圓三十七錢にて暮る。

大正五年　前後二年間の豊作は、軟弱歩調をゆるめず、政府は買上米の處分の必要に迫られたが、未だ內地市場に賣却の時機にあらざるを知り、輸出條件にて約九萬石の拂下を決行して、低落の防止を助け、米價調節調査會を設置して諸物價との調和を計り、且上半期は金融緩慢、株式市場の好勢、企業熱の勃興等歐洲戰亂の影響を受け、事業界の活躍と相俟て七月の十五圓九十四錢を底として愈〻昂騰歩調に轉換して、年末獨逸の媾和提唱にて一時亂調を示せしも、よく十七圓三十七錢を保て越年す。

大正六年　戰爭開始以來經濟界頓に活況を呈したが、三年間の豊作續きにて、諸物價は騰貴せしに拘らず、獨り米價は之に伴はず、けれ共諸物價の騰貴は勞働賃銀の昂騰を促し、前年末の獨逸媾和提唱は聯合國の拒絶にあひ、加ふるに米國は聯合國に參加し、二三年來の米價の低調は農家に及す影響に顧みるところあり、寺內內閣成立と共に仲小路氏農相の地位にありて、米價調節に大に努め、而も米作前年度より減收豫想等の强材料頻々たるより、米價の底意極めて强く、騰貴に騰貴を以てし、八月には遂に二十五圓十六錢となる、然るに九月一日は暴利取締令を農商務省令第二十號を以て發布し急激なる市價變動を誘起し、因て暴利の手段として米穀、鐵類、石炭、綿糸及綿布、紙類、染料、藥品を賣惜み或は買占の行爲をなさゞるように努む。

而しながら大勢は如何ともする能はず、十月關東地方の暴風雨ありて益〻昂騰し、年末には二十八圓六十七錢といふ未曾有の相場を演ずるに至る。

大正七年　米の生産高は五年度より四百萬石の減收を現し、其れ丈七年度の供給力を減ず、然るに一般の生活程度は頓に向上し、麥食者は米食へと轉換し、米を原料とする嗜好品は彌上にも消費率を增加して、需給關係の不安を高め、加之に農家は養蠶等副產物の好況の爲、漸く生活の安定を得、餘裕綽々たるより、米を賣急がずして市場は品薄の商狀にあり、且商品界の活況は商品の動を旺盛ならしめ、昨年末より海陸運輸機關の、輸送力の不備のため滯貨夥しく、政府は急を要する貨物に對して倍賃制をとる、即ち米穀運賃は倍額を要求し、而も高級品なるものを優待して、大嵩大量物たる穀類を後廻にした等の關係から、出廻は頗る圓滑を缺き、金融市場は、貿易の出超著しきに及び正貨の流入甚しく、五年末七億なりし正貨は、僅か一年の日數にて四億增加の十一億を算するに至り、通貨の流通は膨脹して不健全なる投機思惑を旺盛ならしめ、米價は天井知らずの躍動を示して、七月三十三圓二十錢の高値を呼ぶ。此の間に政府は、昨年七月一日に發布せられた暴利取締令を適用し、諭告、警戒告等を受けたる者東西其の他の市場を通じて、十數名の多數に上る。

而して米國の戰爭參加後は、戰時必要品を我國に求むる事多きを加ふるに從て、麥米の輸出も相當多からんとし、殊に小麥粉の如きは輸出せんがための買占旺盛にして、唯さへ品薄の小麥粉は暴騰に暴騰を加へ、米價への影響も少からざる模樣なるを以て、政府は三月八日より米、麥、小麥粉の輸出制限令を實施し、朝鮮、臺灣にも施行す、次で外米管理に關する勅令省令を布き、官營の方法をとり三百三十萬石を輸入販賣し米價の安定を計る。

米穀市場に對しては、小口落の方法は仲買人に投機資金の豊富ならしむる結果となり、米價奔騰の原因は小口落にあり

となし、六月十五日勅令を以て九月限より禁止し、米價調節に資したが、之等の政策は餘り其の効果も認められず、更に七月に入りて、シベリヤ出兵の强材料現れ、米價いよ〳〵高く、八月富山縣下の一漁村民が諸物價の騰貴は米の暴騰にありとなして、所謂米騒動の端を起し、大阪に飛火し、更に東漸し東京に入り、其の餘波全國二十七府縣に及ぶ。斯くして米價は暗中模索の狀態となり、八月十六日穀類收用令は、緊急勅令として公布せられ、同日臨時米穀管理部官制を布き、約三十四萬石の古米買付を行ひ、之が販賣によつて米價の牽制に努力したるも、寺內內閣は米騒動の責を負ひて退き、原內閣成立と共に山本農相は、米價調節策に多少の變更を加へ、十一月外米の管理令を廢止し、米及籾の輸入稅の低減又は免除する事となり、十一月一日より實施せらる。

斯くして波瀾重疊なりし本年の米價は、八月以降の記錄の材料を得ずして大阪の米界は暮る。

大正八年　昨年末に於ける休戰條約成立は、銅鐵其の他の金物市場並に海運界は、本年三月迄は慘澹たる悲況に沈淪せしも、此の反動は長く續かず、所謂戰後の景氣が現れ、米價又昨年の米騒動の後を受けて、一時其の影響を及されて低落歩調を辿りしも、財界の立直りに刺戟されて又昂騰に改る。

而して戰時中は各國共に食糧品の消費を嚴にし、抑へに抑へた各國民の消費の欲望は、休戰と共に一時に世界の市場に注れ、其の餘波我國に及ぶに及びて食糧品價格の昂騰いよ〳〵急となり、米又之に從ひ年末六十一圓九十三錢とはね、大正元年平均米價を百とする年末の米價指數は實に二百四十となり、約二倍半の暴騰を見る。

本年の米作豫想は天候好順に惠れて、豊作の聲高かりしも、何等の反響とてなく、政府は米價昂騰の刺戟材料たる大麥小麥、小麥粉の輸入稅を三月二十七日より十月末日迄低減、或は免除し、四月五日に法律第四十二號を以て開墾助成法を制定し、なほ省令にて主要食糧農產物即ち米、麥、大豆雜穀、甘藷、馬鈴薯等の改良增殖奬勵規則を公布し、更に米の運賃は、七年の一般運賃變更に際して從來の運賃を襲用し、最下級運賃より一割七分引の特定運賃なりしを、更に本年六月一日より三割引となし、七月二十四日より八月二十五日迄は無賃輸送を開始す、其の後一割六分引の特定運賃に復歸を見、米穀製粉の輸入稅減免は、更に翌年九月末日までに延期す、米穀取引所に對しては、四月限より九月限迄、臺灣及外國米の受渡代用制を實施して、米價騰貴の防止に資せしも、根本原因は數量の不足にありとなし、極力外米の買入を行ひ、約百六十萬石の買入を斷行せしも、なほ大勢は阻止するを得ずに本年を送る。

大正九年　大正五年七月十五圓九十四錢を底として、昂騰の歩調を辿りし米價は、本年二月の六十三圓十九錢を絶頂とし、此の間實に一石に付四十七圓二十五錢の騰貴を示す、三月に入るや、大阪某銀行手形交換尻決濟不能に端を發して、財界は大激震に會ひ、米價又其の厄にあひて釣瓶落の大慘落を演じ、更に後半期に至り、豊作豫想、財界の不安に基因して農家の賣急ぎ等加はりて、加速度的に急落し、年末は本年初頭の約半値、三十一圓八十四錢といふ驚異的安値に崩る。

右の如く米價の暴落を見るに及びて、政府は大正七年禁止した小口落の解禁を斷行し、大正三年來の米麥製粉の輸出を解除し、なほ減免中の米粃麥等の輸入稅も復活するに至る。

大正十年　前年度の米作實收は稀有の增收にて米價振はず、前半期は保合狀態に終始せしも、六月農商務省の米穀法による百萬石買上の發表あり、而も本年度の作柄悲觀等の强材料ありて四十圓を突破し、此に於て農商務省は小賣商人の暴

利取締を訓令し、十月期米格付の改正、外米の賣却、十一月に米穀の輸入稅を翌年十月末日迄免除し、運賃二割引等の方策を講じて、年末二圓方の下落を示し、四十二圓十六錢にて越年す。

大正十一年　前半期四十二三圓に保合なりしも、後半期の初期に於て強調を辿りて天候順調、豊作氣前、且株式安等の弱材料ありて、年末三十一圓三十九錢と崩る。

大正十二年　一月三十二圓四錢の米は、政府の新米買上、生糸、綿糸高に刺戟されて漸騰、天災期を控て八月には三十九圓七十七錢と騰り、九月一日の關東地方の大震災は、一時不安狀態に陷り、九、十兩月は二三圓方下押しせしも、政府は米穀類を關西市場に仰ぎ、且其の後交通機關の整備と共に、不安狀態を除去されて反撥歩調なりしも、十二月三十六圓三十錢と下落る。

大正十三年　震災後の年なれ共米價案外平穩にて、夏期に入り、未曾有の大旱魃のため被害甚しく、且秋季冷氣懸念等にて、十月四十七圓臺に突進す、政府は九、十の兩月に持米三十七萬石餘を賣却して、騰貴の阻止に努む。

大正十四年　戰後の不景氣續きにて、人氣消沈し、消費力の低下を豫想されしも、昨年の不作の後を受けて米價强調を辿り、一月より八月迄米穀關稅を撤廢して、外國米の輸入を促進す、七八月の端境期に入ると共に米價頓に昂騰し、四十八圓三十三錢の高値を演出し、內地の米價高の影響を受けて、朝鮮、臺灣米の移入甚しく、六百九十萬石を算し、又八月末日迄の米穀關稅の免除期間を更に十月末に延期して、外米の輸入に資し、五百萬石を計上するに至る。以上の如く輸移入米の多額を加ふに、米作豫想良好につれて九月の候より漸落して、年末四十圓六十八錢にて越年す。

昭和元年　外國貿易の輸入は年々多額に昇り、本年に入り幾分好轉する氣配ありて、人氣回復に資せしも、未だ財界の創痍醫へず、米價又高弱共材料なく、一高一低年末　先帝陛下の崩御に會ひ、諒闇相場にて暮る。

昭和二年　改元と共に米價平價に復せし感あり、思惑往年の如くならず、僅に供給力の如何に支配され勝となり、豊作豫想にて人氣稍消沈して、先安見込にて出廻期に入りて相場崩れ、年末三十二圓五十一錢、近年になき安値を見る。

（附錄參照）

右史的考察に於て、米價の變動は如何なる原因によるかを、明にする事を得たであらうが、左に簡單に列記せば、

（一）昂騰を阻止し又は低落に資したるものと認められたるもの

1　內地米の增收

イ　生產高の項に列記せる增收の諸事情

ロ　天候の好順

2　米價の調節

イ　關稅の減免

ロ　移入稅の撤廢

ハ　運賃の減免

ニ　外米管理

第三節　米

ホ　政府持米の拂下
ヘ　市場受渡米の擴張
ト　小口落しの禁止
チ　暴利取締令
3　通貨の縮少
4　貿易の入超增加
5　思惑賣
6　農家持米の賣急ぎ
7　商品界の不況
8　消費の減少
9　米麥輸出禁止
10　戰爭終結
11　朝鮮臺灣米の增產
12　關東震災に於ける不安

（二）　低落を阻止し又は昂騰に資したるものと認められたるもの

1　內地產米の減收
イ　天候の不順
ロ　暴風雨の襲來
2　米價の調節
イ　關稅の復活
ロ　運賃の復活
ハ　外米管理の廢止
ニ　市場受渡米の縮少
ホ　小口落しの解禁
ヘ　米の買上
3　交通の不圓滑
4　運賃の値上
5　通貨の膨脹
6　貿易の出超增加
7　農家持米の賣惜しみ

8　商品界の活躍
9　思惑買
10　消費の増大
　イ　人口の増加
　ロ　生活の向上
11　朝鮮臺灣米の減産
12　戰爭參加による出兵
13　米麥の輸出促進
14　關東震災に於ける關東地方の需要喚起

第六項　米價の季節的變動

米の生産高を累年別に分け、之を各年の一段歩平均收穫高を平年作とし、之に準じて豊年、凶年、平年作の三種の作柄に區分するのである。如何にして、此の分類を採用するかに就いては、米價の高低は其の年の生産高に支配され易いから、豊年、凶年、平年作により、異つた特長を月々米價の變化に見出す事が、出來るからである。

して之を或る年に見ると、特種の因果關係に支配されて、實際の特長即ち常例が消されてしまうから、成るべく多くの同種類の年を集めて、その平均を求める必要がある。此の場合は特種原因は消されて、特長は特長として現はれるから統計研究には必要な事柄である。而して指數の作成方法であるが之は累年の高低を明にするために、大正元年を百として算出されてあるので、或種の年の平均を以て、月別の統計研究の材料に用ゆるは、不適當であるから、各年の平均價格を百として、各月の指數を算出すると、各月は如何なる狀態で、年平均價格に働いてゐるかを、知る事が出來る。即ち百を中心として、如何に上下してゐるかと云ふ事が、指數上に簡單に現れるのである。

此の方法にて、各年の指數を算出すると、次の如くである。

各年平均米價に對する月別異動指數表

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均
大正元年	九一	九五	九七	九七	九八	一〇一	一〇五	一〇三	九七	九五	九七	一〇五	一〇〇
二年	一〇七	一〇四	一〇三	九九	一〇〇	一〇一	一〇一	九八	九八	九九	九四	一〇一	一〇〇
三年	一〇八	一〇三	一〇三	一〇九	一〇三	一〇三	九七	一〇一	九五	八八	八四	九八	一〇〇
四年	九九	一〇四	一〇三	一〇三	九八	九六	九六	一〇〇	九八	九六	九九	一〇八	一〇〇
五年	一〇七	九八	九六	九六	九八	九八	九六	一〇〇	九八	一〇〇	一〇六	一〇九	一〇〇
六年	八四	八三	八一	八三	八九	一〇〇	一〇七	一〇七	一〇六	一一七	一一〇	一一三	一〇〇
七年	九三	九五	一〇〇	九八	一〇〇	一〇七	一〇八	—	—	—	—	—	一〇〇
八年	九〇	九三	八七	八八	八九	九五	九九	一〇六	一〇九	一二五	一二五	一二七	一〇〇

九年	一二二	一二三	一二二	一二三	一〇七	九三	一〇二	一〇三	九四	八七	九一	六二	一〇〇
十年	九七	九〇	八四	八六	八五	八四	九二	一〇一	一一三	一二五	一二五	一一八	一〇〇
十一年	一〇七	一〇五	一〇三	一〇四	一〇四	一〇九	一一四	一〇九	九八	八九	八二	七七	一〇〇
十二年	八七	九〇	九二	九五	九九	一〇五	一〇八	一〇八	一〇六	一〇二	一〇五	九八	一〇〇
十三年	九四	九四	九四	九五	九四	九四	九七	一〇三	一〇五	一一四	一一〇	一〇六	一〇〇
十四年	九七	九六	九六	九七	九七	一〇一	一〇四	一〇九	一〇七	一〇七	九八	九二	一〇〇
昭和元年	一〇二	一〇一	一〇〇	九八	九八	一〇一	一〇四	一〇三	一〇一	一〇二	九八	九四	一〇〇
二年	九九	一〇一	一〇〇	一〇一	一〇三	一〇四	一〇三	一〇二	一〇二	一〇一	九七	八七	一〇〇
平均	一〇〇	九九	九八	九八	九八	九九	一〇二	一〇四	一〇二	一〇二	一〇二	九八	一〇〇

右指數を前述の、凶年、豊年、平年作に區別し、其の各分類の平均指數を割出すと次の如くなる。

凶年米價指數月別表

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正元年	九一	九五	九七	九七	九八	一〇一	一〇六	一〇三	九七	九五	九七	一〇六
二年	一〇七	一〇四	一〇三	九九	一〇〇	一〇一	一〇一	九八	九八	九九	九七	九四
六年	八四	八二	八一	八二	八九	一〇〇	一〇七	一〇八	一〇八	一一七	一二〇	一二一
七年	九二	九五	一〇〇	九八	一〇〇	一〇七	一〇八	—	—	—	—	—
十年	九七	九〇	八四	八六	八五	八四	九二	一〇一	一一三	一二五	一二五	一一八
十二年	八七	九〇	九二	九五	九九	一〇五	一〇八	一〇八	一〇六	一〇二	一〇五	九八
昭和元年	一〇二	一〇一	一〇〇	九八	九八	一〇一	一〇四	一〇三	一〇一	一〇二	九八	九四
平均	九四	九四	九四	九四	九六	一〇〇	一〇四	一〇四	一〇四	一〇七	一〇七	一〇五

豊年米價指數月別表

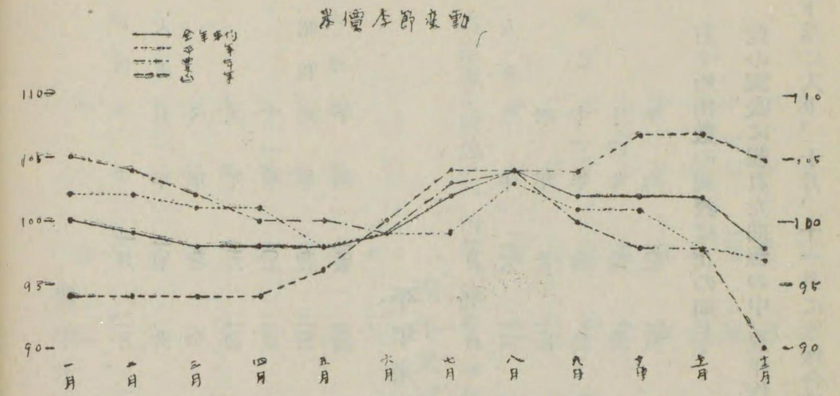
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正五年	一〇七	九八	九六	九六	九八	九六	九六	一〇〇	九八	一〇〇	一〇六	一〇九
八年	九〇	九二	八七	八八	八九	九五	九九	一〇六	一〇九	一一五	一一五	一一七
九年	一二二	一二三	一二二	一一三	一〇七	九三	一〇二	一〇三	九四	八七	九一	六二
十一年	一〇七	一〇五	一〇三	一〇四	一〇四	一〇九	一一四	一〇九	九八	八九	八二	七七
昭和元年	九九	一〇一	一〇〇	一〇一	一〇三	一〇四	一〇三	一〇二	一〇二	一〇一	九七	八七
平均	一〇五	一〇四	一〇二	一〇〇	一〇〇	九九	一〇三	一〇四	一〇〇	九八	九八	九〇

平年米價指數月別表

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正三年	一一八	一一二	一一二	一〇九	一〇三	一〇三	九七	一〇一	九五	八八	八四	七八
四年	九九	一〇四	一〇三	一〇二	九八	九六	九六	一〇〇	九八	九六	九九	一〇八
十三年	九四	九四	九四	九五	九四	九四	九七	一〇三	一〇五	一一四	一一〇	一〇六
十四年	九七	九六	九六	九七	九七	一〇一	一〇四	一〇九	一〇七	一〇七	九八	九四
平均	一〇二	一〇二	一〇一	一〇一	九八	九九	九九	一〇三	一〇一	一〇一	九八	九七

右平均指數の圖表は左の如し。

此の圖表に現れた曲線の中、豊年作の年には一月より月を經ると共に低下し、六月を底として急騰し、八月を最高として下落に入り、十月、十一月には保合狀態にて、十二月には急落を示してゐる。此の曲線を觀察すると、一月に指數の高き



は何故であるか、といふ疑問が生ずるのである。

此の一月の指數に就ては、前年十二月の指數が、如何なる年にあるかを、知る必要がある。

一、五年の前年は四年で	平年	十二月指數	一〇八
二、八年の前年は七年で	凶年	七月指數	一〇八
三、九年の前年は八年で	豊年	十二月指數	一一七
四、十一年の前年は十年で	凶年	十二月指數	一一八
五、昭和二年の前年は元年で	凶年	十二月指數	九四

右を作柄別に分けると、凶年三回、豊年一回、平年一回である。即ち大體に於て、凶年の後を受けてゐると云ひ得る、假令豊年、平年のあとであつても、指數上より見れば、供給不足を意味せらるる年であるから、一月に指數の高き原因であると斷定し得らるる。

二、三、四、五月に漸落を示してゐるのは、出廻の旺盛、或は軟質米の處分に就て、季節的に供給過剩の結果で、六月の急落は天候順調で、植付時である關係上其の年の收穫豫想に、一大の光明を發見し得ての、現であらうと考へらるる。

七、八月は前年度の米の端境期で、出廻も少く在庫米により、需要に應ぜなければならないから、供給上に不安を生じ、自然價格は強調を辿り、米價騰貴を示すのであらう。

九月に入ると下落してゐるが、之は臺灣米の出廻期であつて、且此の時期は內地の出穗の季節で、相當に豊作を豫想し得らるる材料の強きに起因し、十二月は急角度に、低下を示してゐるのは、米の出廻期の最盛時に入つたのであつて、即ち農家は年末に資金決濟とか、納稅期を控へてゐるので、米の賣急ぎのためであるが、豊年の年に限り、他の年に見ざる急低下は、豊年のため豫想外に、出廻が多きに過ぎる關係であらう。

凶年の曲線は、大體豊年の曲線と反對を現してゐる。一月の指數の低位にあるは、豊年の一月の指數と同樣に、前年の十二月の年が、如何なる年に當るかを見れば、了解されるのである。

一、大正元年の前年は明治四十四年で	平年	十二月指數	一
二、二年の前年は元年で	凶年	十二月指數	一〇六
三、六年の前年は五年で	豊年	十二月指數	一〇九
四、七年の前年は六年で	凶年	十二月指數	一一一
五、十年の前年は九年で	豊年	十二月指數	六二
六、十二年の前年は十一年で	豊年	十二月指數	七七
七、昭和元年の前年は十四年で	平年	十二月指數	九四

即ち大體豊年の後を受けてゐるといふ事が出來る。

一、二、三、四月共に保合狀態にあつて、五月、六月に至り昂騰に轉じてゐるのは、天候其の他値付時の事情良好なら

さる結果と察せらるる。七、八月の指數は、他の分類年との差異なきは、豐年、凶年、平年の如何に拘らず、現在日本內地の米の消費は、生產より多き爲に、必らず多少の輸移入によりて、不足を補ふてゐる關係上、此の端境期には米の數量は一定せられ、從て價格は何れの年にても、一年間の中で七、八月に働く高低率は、差はなきものでないかと考へらるる九月は保合狀態にて、十月より急騰してゐるのは、供給不足懸念による、人氣高にあらざるか。十二月は例年に洩れず出廻の旺盛のために、下落を辿るを通例とする、但し平均指數以上にある事は注目に値ひする。

平年時の曲線は、大體豐年、凶年の曲線の中央に置かれてゐる。

以上の曲線は、三種類に分類した結果であるが、之を全年平均指數を算出すると、豐年、凶年、平年の事情による、騰落の特種原因は訂正されて、一年間を通じて、米の價格の騰落を、月別に常例として現れて來る。之は前記の圖表中實線に示してゐるが、之は季節的變動の常例である。

此の季節的變動に就ては、昔より概念的に說明されてゐるから、之を以て平均指數の說明としやう。

此の說によると、一年を三期に區分して、

一、新穀期

二、減穀期

三、天災期

としてゐるが、なほ之を細分すれば、

十月	結實期		
十一月	收穫期	新穀期	
十二月	餠搗相場		
一月	米山時代		
二月	減始期	減穀期	
三月	春眠期		
四月	花見期		
五月	播種期		
六月	梅雨期	天災期	
七月	前天期		
八月	本天期		
九月	後天期		

此に解說を加へる迄もなく、新穀期は米價の下落期で、減穀期は保合狀態にある時期で、天災期は昂騰期である。

（伊東）

第二節　砂糖

第一項　生産高

内地の砂糖生産高

内地の製糖高は、近年増加の趨勢にあるも、まだ消費高の消長に比すれば、殆ど問題とする程の、増加率を示してゐない。之は砂糖の原料とする甘蔗、甜菜の生産上氣候の關係があるであらうが、他の原始産物との採算上の問題が、考慮されてゐる結果であらう。而しながら甜菜を原料とする生産は、近年北海道地方に於て有望視せられ、相當な増加率を見てゐるが、まだ内地の消費高に比して微々たるものである。

内地砂糖の生産地は、主として沖縄及大島、北海道が大部を占め、其の生産高は次表の如くである。

粗糖生産高表

（糖蜜は含ず）

年次		甘蔗貫	甜菜貫	計斤
大正元年		一〇四、一三、八一二		
二年		一〇九、七八六、二七四		
三年		一三七、〇九七、四〇九		
四年		一二五、九一一、九六三		
五年		一五二、八九〇、六四三		
六年		二一六、二三八、六六五		
七年		一五八、五九七、六五五		
八年		一五二、一四四、四五六		
九年		一二八、八七〇、一五六		
十年		一六七、六七九、五八〇		
十一年		一三七、六〇九、二五六		
十二年		一三〇、二二二、九〇五		
十三年		一六九、三六七、〇一三		
十四年		一五二、五二一、九五一		
昭和元年		一六四、九九三、一一二		
二年		一五八、一〇五、一三〇		
三年		一六一、一三六、一五九		
四年		一六三、八六五、八二七		
五年		一六三、七四五、五九六		
六年		一六〇、九二九、四〇九		
七年		一六三、九七五、五六五		
八年		一六八、〇五三、一三〇		

右の砂糖は第一次の製糖であつて、精製糖の原料となる粗糖である。

粗糖の原料は、大島及沖縄に於ては甘蔗、北海道では甜菜であるが、其の産出高は、

砂糖原料生産高表

年次		甘蔗貫	甜菜貫
大正元年		二三二、七九五、五〇九	
二年		二三〇、九七二、一九七	
三年		二六六、九五四、五〇四	
四年		二六三、八六五、八二七	
五年		二八一、一三六、一五九	
六年		四〇七、九二九、四〇九	
七年		三二六、七四五、五九六	
八年		二六七、〇五三、一三〇	
九年		二三四、〇九八、四八六	
十年		二九五、七一八、一七八	
十一年		二二六、六六三、七八二	
十二年		一九三、九九九、二四一	
十三年		二五五、七〇五、四八六	
十四年		二三三、九七五、五六五	
昭和元年		二四二、七八〇、六九九	？
二年		二三四、一二一、二五八	？
三年		二六一、一三六、一五九	？
四年		二六三、八六五、八二七	？
五年		二六三、七四五、五九六	？
六年		二六〇、九二九、四〇九	？
七年		二六三、九七五、五六五	？
八年		二六八、〇五三、一三〇	？

であつて、此の生産高の如何は、製糖に非常に變動を與へるのであるが、農産物であるために、天然に支配され易く、天候の良否は直接糖價の高低を甚しくする、けれ共内地の生産高は非常に少く、從て糖價に及ぼす變動も極めて稀である

右の粗糖はやがて精製されるのであるが、內地の再製糖は外國及臺灣の原料を仰いで、左表の如き生產數字を示してゐる。

再製糖高表

年次	第四種迄	第五種以上	合計
	萬斤	萬斤	萬斤
大正元年	一、八五七	一九、一八〇	二一、〇三七
二年	二、五九一	三〇、三〇四	三二、八九五
三年	一、七〇〇	二一、〇八五	二二、七八五
四年	二、四八一	二三、五三〇	二五、〇一一
五年	二、一五五	二四、四三八	二六、五九三
六年	三、四六五	三五、六〇五	三九、〇七〇
七年	三、五八九	三八、八一三	四二、四〇二
八年	二、七〇八	三二、四六〇	三五、一六八
九年	二、八二五	三〇、七〇六	三三、五三一
十年	三、六五五	三一、九三七	三五、五九二
十一年	七、四七七	五六、三二二	六三、七九九
十二年	六、四〇七	五二、〇二五	五八、四三一
十三年	七、六七四	六〇、二七二	六七、九四六
十四年	？	？	八一、四九五

臺灣及朝鮮の砂糖生產高

本邦に於ける大正十三年度の生產高は、九億二千三百七十五萬斤であるが、其の中臺灣の生產高は、七億五千三百六十八萬斤で、全體の八割二分弱を占めてゐる。

而して其の原料たる甘蔗は、臺灣の主要農產物で、年々多額の增收を示してゐる。之を累年に見るに、

甘蔗生產高表

	萬斤
大正元年	三一五、九〇三
二年	一五三、〇五二
三年	二六四、二六二
四年	三九三、三八一
五年	五七三、五二二
六年	八四八、八一二
七年	六八一、七五四
八年	五六三、一三四
九年	四三八、二五一
十年	四九三、八三二
十一年	六七五、二八四
十二年	六六三、一八六
十三年	七七九、三六九

粗糖生產高表（糖蜜を含まず）

	斤
大正元年	二九二、六四五、三九一
二年	一九、一四九、二四四

三年	二五一、二七九、二一九	十年	四二一、二〇八、四五七
四年	三四七、四四七、一九〇	十一年	五八七、一九七、四七九
五年	五四六、五九四、八一〇	十二年	五九二、〇九五、二五六
六年	七六三、三七六、四〇八	十三年	七五三、六八三、〇〇〇
七年	五七二、五一四、八五八	十四年	七九九、二三三、〇〇〇
八年	四八六、二三二、八四三	昭和元年	八三三、二一〇、〇〇〇
九年	三七二、〇一二、四八九		

再製糖高表

	斤		斤
大正元年	九八七	大正九年	五七、〇七六、四五一
二年	三三〇、三七四	十年	二四、一八五、五四八
三年	二三一、三六〇	十一年	五〇、〇五六、〇七九
四年	一六六、七一六	十二年	三六、七七七、九三四
五年	二六一、〇六四	十三年	三八、〇六九、〇〇〇
六年	二七、八六七、四六一	十四年	四二、八九一、〇〇〇
七年	一八、八八四、九四四	昭和元年	四八、七三一、〇〇〇
八年	五一、八八一、七二一		

朝鮮の生産額は、大正十一年前は全くなく、其の後甜菜を原料とする製糖に着眼して、着々其の擴張に努めてゐるが、日尚淺くまた多量の産出なく、大正十二年に九十二萬斤、十三年に七十萬斤に過ぎない。

世界に於ける砂糖生産高

	噸		噸		噸
玖瑪	四、〇六六、四三	大日本	四四八、七三六	ペルー	三六、三五三
英領印度	三、二六六、〇〇〇	ブラジル	四三五、〇〇〇	支那	三五、〇〇〇
爪哇	一、七七一、七七三	ホクトルコ	三九七、七四〇	白耳義	三〇、一三一
獨逸	一、二四六、八九一	波蘭	三八九、九九五	濠洲	二八一、八五九
チエックスラバキヤ	一、〇〇一、〇四九	露西亞	三六六、七四三	アルゼンチン	二五七、三四九
北米合衆國	九三一、八八一	伊太利	三二五、三四一	和蘭	二三一、九二三
佛蘭西	四九〇、八五〇	フイリツピン諸島	七六、八五〇	西班牙	一九二、九三四
英領南亞聯邦	一八一、五七一	中央亞米利加	七一、八〇二	英國	一〇、〇〇〇
メキシコ	一六六、九三三	羅馬尼	五〇、〇〇〇	瑞西	五、三五〇
瑞典	一五三、八九〇	ユーゴースラヴイヤ	四七、三二	フインランド	一、〇〇〇
匈牙利	一三五、〇〇〇	塊太利	四七、〇〇〇		
丁抹	一〇二、三五八	遲羅	一六、五〇〇		
及坡	一〇〇、〇〇〇	加奈陀			

註　本表は一九二三―二四年度に於けるウイレットグレー及ラムボーン商會の調にして數量は粗糖標準である。

列國の中、百萬噸以上の生産高を有する國は、三十六ケ國中玖瑪、英領印度、爪哇、獨逸、及チエックスラバキアの五ケ國に過ぎない。而して我國は第八位である。

第二項　輸移入出高

輸移入出の、統計數字の示すところによれば、次の如くである。

輸移入出高表

年次	輸入高	移出高	輸出高
	斤	斤	斤
大正元年	二四、一六五、六五六	一九、七八〇、〇〇〇	九〇、七五五、四〇六
二年	一〇三、〇三〇、一八五	二九、二五〇、〇〇〇	一六八、七六六、九三
三年	二三七、三五一、〇四七	三三、〇七〇、〇〇〇	一三一、二六三、三三一
四年	三四八、六二一、五三五	一九、六五〇、〇〇〇	一二六、五〇八、〇七五
五年	四二四、八五七、一三	一九、七四〇、〇〇〇	一四六、一九三、七六九
六年	五五七、四八六、七四四	二〇、二六〇、〇〇〇	二三〇、九〇三、九五四
七年	四五三、五六四、八九一	二五、六五〇、〇〇〇	一九〇、八七八、一六八
八年	四八四、九一五、八九三	三三、三〇〇、〇〇〇	一〇九、五〇〇、六〇三
九年	三六六、〇一五、三五九	一六、六五〇、〇〇〇	一〇〇、五四四、四七一
十年	四二四、二五〇、〇〇〇	二〇、〇五〇、〇〇〇	七九、三〇五、一〇〇
十一年	五九一、三三〇、〇〇〇	一六、三〇〇、〇〇〇	一四一、四一三、三〇〇
十二年	六二七、〇三〇、〇〇〇	一六、一〇〇、〇〇〇	一〇五、七五七、九〇〇
十三年	七一四、〇六三、九九〇	二五、一五〇、〇〇〇	一八八、一七〇、九〇〇
十四年	七一七、〇一八、七一	二〇、三一〇、〇〇〇	二三八、八〇五、一〇〇
昭和元年	七四八、九一一、五一三	二三、六三〇、〇〇〇	三〇〇、二三一、一〇〇

第三項　關稅及消費稅

關稅

關稅は本邦の製糖事業を保護する意味から、高率を課してゐるが、精製糖の如きは殆ど輸入禁止的なもので、明治四十三年施行以來、四十五年、大正三年、五年、九年の數度の變更があつて、現在の關稅率は、昭和二年四月一日より實施せられてゐる。

改正稅率と舊稅率との對照は、次の如くである。

	改正率	舊率
	圓	圓
第一種（十一號未滿）	二・五〇	二・五〇
第二種（十五號未滿）	三・九五	三・一〇
第三種（十八號未滿）	三・九五	三・三五
第四種（二十二號未滿）	三・九五	四・二五
第五種（精製糖）	五・三〇	四・六五

第一種のみは据置として、他は第四種を除き、舊率より高率となつてゐる。

之等の關稅の變更は、糖價に、理論としては影響を及ぼさるゝものであり、其の高率なるに於ては、本邦の生產及消費

の均衡を得ざる場合、即ち自給自足の域に達せざる時は、輸入を阻止するから、內地糖價の騰貴に資せらるゝ材料となるのである。

消　費　稅

消費稅は昭和二年四月一日より、現行法の施行を見てゐるのであるが、其の稅率は、

		改正率	舊率
第一種	甲	圓 一・〇〇	圓 一・〇〇
	乙	二・〇〇	二・五〇
	丙	二・五〇	三・〇〇
第二種		五・〇〇	五・〇〇
第三種		五・〇〇	七・〇〇
第四種	二十二號未滿	七・三五	八・〇〇
第五種	二十一號未滿	八・三五	九・〇〇
第六種		一〇・〇〇	一〇・〇〇

であつて第二種、第六種以外は、低下してゐる。

第四項　消　費　高

內地の消費高

前述の如き、內地に於て生産された砂糖、或は臺灣及外國からの輸移入糖は、何の位內地に消費されてゐるかといふに、

消費高表

	斤		斤
大正元年	四六七、八七一、〇六二	大正九年	六七五、〇三五、一四四
二年	五五八、四三九、一三七	十年	一、〇〇一、五五五、一八〇
三年	五四一、〇七〇、〇二五	十一年	一、二二七、三七七、一五六
四年	五四六、一二六、四二三	十二年	一、一三六、〇二八、五〇五
五年	五七一、八九九、六九七	十三年	一、一七九、三九〇、八九〇
六年	六六四、一四三、八八五	十四年	一、二四五、六三三、六四三
七年	七六八、一六三、〇七八	昭和元年	一、三四六、八二六、七一三
八年	九六〇、〇六二、七四五		

大正元年四億六千七百八十七萬斤であつたのであるが、昭和元年には約三倍の、十三億四千六百八十二萬斤に上つてゐる。之を元年を百として、其の消長を指數に明記すると、

大正元年	一〇〇	大正八年	二〇五
二年	一一九	九年	一四四
三年	一一六	十年	二一四
四年	一一七	十一年	二六二
五年	一二二	十二年	二四三
六年	一四二	十三年	二五二
七年	一六四	十四年	二六六

昭和元年　二八八

大正四年迄は左程の進展はないが、六年から增加歩調も急激となつて、八年に至つて異常な增加で、元年の二倍強となつてゐる。九年は財界の反動で、人心は非常に不安氣分に襲れてゐたので、砂糖に限らず、米麥の如き常時必需品も、消費を減じてゐる。即ち砂糖は八年より指數に現はれたところによると、六十一といふ激減を示してゐる。而して十年には人氣の回復と共に、八年の消費率を突破し、十一年は同樣に增加狀態であつたけれ共、十二年は九月の關東震災で、關東地方の大消費地を灰燼し、而も人氣消沈の結果消費は稍減じてゐる。十三年に回復の徵があつて、十四年に至つて舊に復し、昭和元年は二百八十八といふ指數で終つてゐるが、元年の三倍弱となつてゐる。

此の趨勢は、人口の增加による自然の增加であらうが、生活程度の向上と共に、砂糖を使用する嗜好品の、急激の增進も含まれてゐると考へらるる。

內地人口一人當りの消費量を調べると、

人口一人當り消費高表

	斤		斤
大正元年	八・九〇八	大正五年	一〇・二七九
二年	一〇・四六五	六年	一一・七八九
三年	九・九九四	七年	一三・五五五
四年	九・九四一	八年	一六・七七三
九年	一一・六五五	十三年	一九・三〇八
十年	一七・〇六三	十四年	二〇・〇七六
十一年	二〇・六四二	昭和元年	二一・三七六
十二年	一八・八五三		

人口一人當りの消費量は、大正元年は僅に八斤八〇八に過ぎなかつたが、年々增加して昭和元年には二十一斤三七六となつてゐる。即ち大正元年の其れに比すると、約二倍半である。右の一人當り使用量を、累年別に指數にて其の消長を明にし、併て內地消費總量の指數と比較すると、左記の如くである。

年次	消費總量指數	一人當り消費指數	正味增加指數	總量指數と一人當り指數との差即ち人口增加による正味增加指數
大正元年	一〇〇	一〇〇	—	—
二年	一一九	一一七	一七	二
三年	一一六	一一二	一二	四
四年	一一七	一一二	一二	五
五年	一二二	一一五	一五	七
六年	一四二	一三二	三二	一〇
七年	一六四	一五二	五二	一二
八年	二〇五	一八八	八八	一七
九年	一四四	一三一	三一	一三

十年	二一四	一一四	一九二	九二	二二
十一年	二六二	一六二	二三二	一三二	三〇
十二年	二四三	一四三	二一二	一一二	三一
十三年	二五二	一五二	二一七	一一七	三五
十四年	二六六	一六六	二二五	一二五	四一
昭和元年	二八八	一八八	二四〇	一四〇	四八

此の指數を檢するに、砂糖の總消費量の中には人口增加による消費量の增加と、生活向上による增加との二種類の增加を含んでゐる。故に生活向上による增加は、一人當りの消費量の指數で明にされるから、此の指數を總消費量の指數より差引いた殘りの指數は、人口增加による消費量の增加指數と云ひ得る。即ち一人當りの消費量の正味增加指數と、差引によつて現れた人口增加による消費量の、正味の增加指數の對比によつて、砂糖の消費量を增加せしむる原因の重大性を明にする事が出來る。

之を大正元年より、昭和元年迄を割合を示せば、

年次	生活向上による消費高の增加割合 割	人口增加による消費量の增加割合 割
大正元年	—	—
二年	八・九四〇	一・〇六〇
三年	七・五〇〇	二・五〇〇
四年	七・〇五九	二・九四一
五年	六・八一八	三・一八二
六年	七・六一九	二・三八一
七年	八・一二五	一・八七五
八年	八・三八一	一・六一九
九年	七・〇四五	二・九五五
十年	八・〇七〇	一・九三〇
十一年	八・一四八	一・八五二
十二年	七・八三二	二・一六八
十三年	七・六九七	二・三〇三
十四年	七・五三〇	二・四七〇
昭和元年	七・四四六	二・五五四

大體に於て此の傾向を見ると、消費高を增加せしむる原因は生活向上によるものが最大であつて、七八割を占めてゐる。人口增加に基因する割合は、二、三割に過ぎない、といふ事が出來る。

世界主要國に於ける消費高

消費高表

	米國	英國	佛國	白耳義	和蘭	獨逸	チェツク スラバキヤ	伊太利	西班牙	合計
大正三—四年	三、八〇一、五三一	一、六三三、五八〇	五〇二、一二七	一五〇、六七六	一〇〇、三一七	二、二八一、八二一	六三三、九〇六	一七五、五〇〇	一二六、四二五	九、四〇五、八七三

四—五年	三、六五八、六〇七	一、二八九、八五〇	一〇二、二〇七	九三、四一八	一〇六、六五九	一、八五四、七〇六	六二七、〇六〇	二三七、六〇〇	一五六、六一八	八、一二六、七二五
五—六年	三、六八三、五九九	一、一四一、九二〇	八二五、九五一	七七、三一六	一二三、一二五	一、三九八、九四五	一二三、六六三	一〇九、五四九	一六五、三〇〇	七、九五九、二六八
六—七年	三、四九五、六〇六	八八三、二三〇	六一〇、七三六	一〇九、三五六	一三九、三六三	一、六〇四、七九五	四一九、五二五	一二一、六三三	一七五、六〇〇	七、五五九、八四四
七—八年	四、〇六七、六七一	七六〇、一〇〇	四一四、六五〇	一一五、四八四	一七三、七九一	一、四三四、九七七	二八三、八九四	一四五、三五三	一七七、四〇〇	七、五七三、三二〇
八—九年	四、〇八四、六七二	一、二八七、八九〇	八二三、六六〇	一三五、八一五	一〇五、四四八	九二〇、、九三九	三四二、〇四九	一五五、八二〇	二四七、二四九	八、二〇三、五四二
九—十年	四、一〇七、三二八	九二四、七六二	五五九、一一三	一二八、九五一	二〇八、六三三	一、一六四、七二七	三一八、三三九	一三五、七六八	一九四、九〇九	七、七四二、五三〇
十—十一年	五、〇九二、七五八	一、二五七、〇四四	七六七、四〇九	一五八、一五〇	二三五、四四八	一、四五九、九一二	三〇九、三七六	三一四、一五二	一七五、九六二	九、七七〇、二一一
十一—十二年	四、七八〇、六八四	一、六〇四、五三二	八一七、三〇九	一六三、二〇五	二三〇、三〇二	一、四八一、四八八	三五一、九五九	二九四、二五〇	一六五、〇〇〇	九、八八八、七二九
十二—十三年	四、八五四、四七九	一、四七〇、三四七	七九六、〇〇八	一五三、五二七	二二三、一三〇	九一〇、二一五	三六一、七五四	三一二、二八六	一九八、九八四	九、二八〇、七三〇

世界各國に於ける一人當り消費高表

	斤		斤
米國	八四・〇	白耳義	三三・〇
丁抹	七三・五	佛國	三五・五
英國	七三・一	墺匈利	一八・〇
合衆國	六五・〇	日本（殖民地共）	一二・三
諸威	五六・七	羅馬尼	九・八
瑞典	四五・〇	ブルガリヤ	九・四
獨逸	三七・五	伊太利	九・〇
和蘭	三四・三	支那	四・五

第五項　糖價の史的考察

以上述べた如く、砂糖の生産及消費は世界的であつて、且內地の消費は、大部分輸移入に俟つより外はないから、糖價の變動は臺灣及外國の事情に支配され易い。

以下糖價の變遷に付、過去に遡り筆を加へる事にしやう。明治四十四年の上半期は、一高一低に終始し、下半期に至つて製糖會社は共同販賣の擧に出でて、市價吊上を講じたがために、糖價頓に上り、其の當時に於ける最高の値を現してゐる。四十五年消費稅改正法案の、議會に提出せらるゝに及びて、益々硬化し、所謂『增稅相場』を出現し、加之に爪哇糖の昂騰あり、臺灣甘蔗の減收等ありて、曩に決定せし義務輸出三十萬ピクルと相俟て、供給減を來して糖價愈々騰り、なほ七八月の臺灣の暴風雨ありて、九月三度の大暴風雨の爲、甘蔗の大減收を豫想さるゝあり、需要期を控へて一途昂騰步調を辿る。其の後强材料なく、諸物價下落の趨勢に伴ひて、ぢり安となり、大正三年七月歐洲大戰の勃發と共に、歐洲全土は殆ど荒廢して、甜菜を原料とする砂糖も大減收の餘儀なきに至り、其の不足はやがて世界市場、殊に東洋市場に仰ぐ有樣となり、茲に砂糖の大飢饉とも稱すべき場面が展開され、五年四月英國政府の香港糖の輸出禁止は、我對支輸出の促進となり、更に露國筋の買注文あり、六年五月佛國政府の爪哇糖六萬噸買付するあり、本邦市場又多大の買注文を受けて益々硬化す、七年に入り米國砂糖消費の激增、臺灣糖減產、船腹不足等の强材料頻々と報ぜられ、而も內地も相當の消費の增加を示して、昂騰の一途にありしも、年末媾和條約成立と共に、財界は動搖して下落せしも、所謂戰後の好況は滔々と進入し來りて、世界市場を擧げての、大熱狂相場を出現して、九年二月には實に百斤に付五十圓といふ空前の高値を呼び

三月本市某銀行の破綻は、財界を不安狀態に導き、株式市場を始め、生糸、綿糸、其の他商品界は釣瓶落しの大慘落を演じ、糖界も又其の厄に會ひ、一時恐怖的相場を演じて三月には一躍十二圓方の大暴落を示したるも、外糖は何等の弱材料なく、却て消費率は更に高く、玖瑪及爪哇は狂騰を傳へらるありて、內地市場又外糖の步調を入れ、四月には十二圓方の大反騰ありて五十圓突破の高値を演ず。五月五十四圓五十錢といふ、未曾有の相場を現したるも、東京に於ける砂糖商の破綻あり、折柄外糖暴落の入電に脅されて、市場は急轉直下的大崩落の混亂狀態に入る。年末三十二圓となり、五月の最高に比すれば實に二十二圓五十錢といふ大慘落である。

十年十一年は他の物價の低落步調と合せて、下落を迴る。十二年の九月關東地方の大震災は、同地方の製糖工場は殆ど運轉不能に陷り、且在庫糖の燒失ありて供給全く絕え、ために關東地方よりの需要旺盛となり、一時大阪市場は好況を呈し一、二圓方引締りを見る。

十三年よりは一弛一張に終始して、昭和二年四月砂糖の關稅消費稅の改正あり、金融恐慌にて當業者の破綻ありて、糖界は極めて不安狀態に置かれ、糖價又其の影響を蒙りて動搖せしも、財界安定と共に復活す。

以上大正元年の價格を百として、其の後の消長を指數に示せば次の如くである。

糖價指數表

大正元年	一〇〇	大正三年	九七	五年	一〇八
二年	九六	四年	一〇二	六年	一一〇
				七年	一二六
				八年	一七六
				九年	二一六
				十年	一三九
				十一年	一二〇
				十二年	一三八
				十三年	一三〇
				十四年	一一七
				昭和元年	一一四
				二年	一一五

第六項　大阪市場の需要と價格

大阪に於ける保稅倉庫の砂糖の出庫高を見るに、

出庫高表

	出庫高（萬斤）	出庫高指數	價格指數
大正十三年			
一月	一、七二六	一〇〇	一〇〇
二月	一、三五一	七八	一〇五
三月	一、三〇四	七六	九八
四月	一、四三八	八三	九三
五月	二、二七七	一三二	九四
六月	二、三六八	一三七	九二
七月	三、二三〇	一八七	九四

八月	二、一五三	一二五	九八		
九月	二、二六七	一三一	一〇一		
十月	一、九五四	一一三	一〇二		
十一月	一、三〇九	七六	九九		
十二月	一、二二八	七一	九六		
大正十四年					
一月	一、三三〇	七七	九四		
二月	一、二二四	七一	九二		
三月	一、二〇二	七〇	九〇		
四月	一、〇五四	六一	八七		
五月	一、五六九	九一	八七		
六月	二、一三一	一二三	八九		
七月	二、〇八三	一二一	九〇		
八月	一、二八四	七四	八八		
九月	一、一八七	六九	八七		
十月	一、六一〇	九三	八五		
十一月	一、七四五	一〇一	八五		
十二月	一、五四五	九〇	八三		

註　出庫指數及價格指數とも大正十三年一月を百として算出したるものなり

十三年、十四年を通じて、需要の最盛期は六月、七月の月であつて、減少期は二月、三月と云ふ事が出來る。從て經濟原則として、價格も之に伴て高低を示すを通例とするけれ共、此の砂糖の場合は異なる現象を現してゐる、即ち價格は兩年共一、二月が最も高く、低い月は十三年度の出庫高の最も多い六月で、十四年は割合に出庫高の多い十二月である。かゝる矛盾は何か別に原因の存するを、意味するのではないかと考へらるる。

此に注意すべきは、砂糖の生產の場所と生產時期である。內地に於ける生產高は微々たるもので、大部分は臺灣及外國に生產される關係上、生產場所が遠方なために、需要に應ずるには相當な日子を要し、而も生產時期は年々一定せられてゐるから、其の時期を逸しては供給を仰ぐ事が出來ない。かゝる故に、生產時期に大阪市場の需要量を考慮して輸移入し需要期迄蓄藏せなければならない。即ち入庫の項に示す如く一、二、三、四、五月に大量な入庫高を現して、六、七、八、九月の需要期迄蓄藏されてゐる。

右の理由で蓄藏された砂糖は、需要の喚起と共に出庫するので、出庫高の增減により、月を經ると共に、過剩狀態ともなり、品薄狀態ともなつて、價格は此の狀態如何により、變動を與へらるやうである。

之が數字的實證を示せば、

出庫割合及糖價指數表

	在庫高	出庫高	在庫高に對する出庫高の割合	割合指數	糖價指數
大正十三年	五、一七三萬斤	一、七二六萬斤	·三三六	一〇〇	一〇〇

第二節　砂糖

二月	七、七六五	一、三五一	●一七三九	七八	一〇五
三月	一二、五八五	一、三〇四	●一〇三六	三一	九八
四月	一四、三〇二	一、四三八	●一〇〇五	三〇	九三
五月	一四、八二二	二、二七七	●一五三六	四六	九四
六月	一二、九一四	二、三六八	●一八三三	五五	九三
七月	一〇、九二五	三、二三〇	●二九五六	八九	九四
八月	八、〇六二	二、一五三	●二六七〇	八〇	九八
九月	六、〇六九	二、二六七	●三七三五	一一一	一〇一
十月	三、九八三	一、九五四	●四九〇五	一四七	一〇二
十一月	二、二八三	一、三〇九	●五七三三	一七二	九九
十二月	一、五五五	一、二二八	●七八九七	二三七	九六
大正十四年					
一月	二、八八四	一、三三〇	●四六一一	一三八	九四
二月	四、一六六	一、二二四	●六九三八	八八	九二
三月	七、五八一	一、二〇二	●一五八五	四八	九〇
四月	一〇、六八二	一、〇五四	○九八六	三〇	八七
五月	一一、二三六	一、五六九	●一三九六	四二	八七
六月	一〇、〇三九	二、一三一	●二一二二	六四	八九
七月	八、一二五	二、〇八三	●二五二六	七七	九〇

八月	六、四四四	一、二八四	●一九九二	六〇	八八
九月	五、五四〇	一、一八七	●二一四二	六四	八七
十月	四、八六三	一、六一〇	●三三一〇	九九	八五
十一月	三、五五六	一、七四五	●四九〇七	一四七	八五
十二月	二、三八九	一、五四五	●六四六七	一九四	八三

註　指數は十二年一月を百として算出す

右の出庫率を指數に現して、價格指數と對照して見ると、大體に於て九、十月の月迄は、兩年共に平行狀態にあつて因果關係を肯定せしむるが、十一二月は正反對の行動をとつてゐる。之は此の時期に至れば、臺灣の生産時期であつて供給上の不安は除去されると解せらるゝから、出庫率が騰貴せるに拘らず、價格は下落へと導かれるものと考へらるゝ。而して十四年は、十三年に比して出庫率低く、從て價格も其れに伴ひ軟弱歩調を辿つてゐる。

第七項　大阪市場の供給と價格

保稅倉庫の入庫高及入庫率を見るに、

入庫割合及糖價指數表

	在庫高	入庫高	在庫高に對する入庫高の割合	割合指數	糖價指數
	萬斤	萬斤			
大正十三年			?	?	一〇〇
一月	五、一七三	?			
二月	七、七六五	四、三一八	●五五六〇	一〇〇	一〇五

三月	一二、五八五	六、一七一	●四九〇三	八八	九八			
四月	一四、三〇二	三、〇二一	●二一一二	三八	九三			
五月	一四、八二二	一、九五八	●一三二一	二四	九四			
六月	一二、九一四	三六九	●〇二八六	五	九三			
七月	一〇、九二五	三七九	●〇三四六	六	九四			
八月	八、〇六二	三六七	●〇四五五	八	九八			
九月	六、〇六九	一六〇	●〇二六四	五	一〇一			
十月	三、九八三	一八一	●〇四五四	八	一〇二			
十一月	二、二八三	二五四	●一一一二	二〇	九九			
十二月	一、五五五	五八一	●三七三六	六七	九六			
大正十四年								
一月	二、八八四	二、五五七	●八八六六	一五九	九四			
二月	四、一六六	二、六一二	●六二六九	一一三	九二			
三月	七、五八一	四、六三九	●六一一九	一一〇	九〇			
四月	一〇、六八二	四、三〇三	●四〇二八	七二	八七			
五月	一一、二三六	一、六〇八	●一四三一	二六	八七			
六月	一〇、〇三九	三七二	●〇三七一	七	八九			
七月	八、一二五	二一七	●〇二六七	五	九〇			
八月	六、四四四	四〇二	●〇六二四		八八			
九月	五、五四〇	三八〇	●〇六八四	二	八七			
十月	四、八六三	五一〇	●一〇四九	一九	八五			
十一月	三、五五六	三〇三	●〇八五二	一五	八五			
十二月	二、三八九	五七八	●二四一九	四四	八三			

右の入庫高は三月に最も多く、二、四月之に次ぎ、減少期は夏期にあつて、之を入庫率に見るに一月最も多く、月を重ねるに従ひて漸減して、七、八月に最も少く、十一、十二月に漸増してゐる。此の入庫率を指數に現して、價格指數との比較を見るに、供給と價格との關係は大體正鵠を得てゐるやうである。而しながら十四年は、十三年より需要起らずして、供給過剰の域に終始したるために、價格は低落の一途を辿つてゐるから、十四年の指數は入庫率の指數との間に、矛盾があるやうに見ゆるも、十三年と比較對照すれば、容易に供給と價格との因果關係を知る事が出來る。即ち入庫率の高き場合は價格低く、入庫率の低き時は價格は騰貴してゐる。（伊東）

第三節　綿糸

現今我が國民經濟上、纖維工業程重要なるものはなく、且これが盛衰のその經濟上に及ぼす影響は非常に大なるものにして、就中綿糸はその中樞を占めてゐる。即ち我國工業界に占むる地位より、その輸出貿易上に於ける重要さより、或は世界に占むる勢力より云ふも、綿糸の右に出づるものは恐らく無いであらう。

この重要商品たる我綿糸は、綿糸として獨立せる一個の商品であるが、實は一種の原料品にして、その大半は織物用原

料である。而してその性質上全然國際的商品である。即ちその原料は全部外國産にして、その相場は或程度に選擇の自由を有する一方、その製品なる綿布は、外國市場に於て各國との間に激甚なる競爭の絶間がない。

製品が斯くの如き立場に在る以上、その原料たる綿糸も、勢ひその影響を受くるは當然の理にして、假令輸入國稅の障壁ありて、他よりの直接輸入を見ざる迄も、必ずその價格は一時的傾向を脫して、外國市場に出合得る程度に下げて來るものである。そこに國際的商品としての價値があり、彈力性を有する所以である。その價格も對內的事情即ち、需要狀態及出合の如何のみならず、對外的事情即ち、原料關係としては米棉、印度棉の相場、輸出入關係として銀塊及爲替相場等と密接不可離の關係を有し、殊に我國に於てはその材料の多種多樣なる關係上、各人の强弱の見解に大なる相違を來たさしめ、爲に常に著しく投機的色彩を帶び、從て現物相場もこれに支配さるゝことが多いのである。これ等は我國經濟組織の缺陷とも稱すべきものにして、當業者にとりては往々迷惑を感ずることあるも、又一特徵として數へ上げる必要があると考へる。

斯く國際的商品であり、彈力性に富める我綿糸は、特殊品の如く、或事情により往々不自然なる、騰落を招來することはなく、假令これあるも一時的現象に過ぎず、常に水平運動が行はれてゐる。これ綿糸が近年急激に長足の進歩を爲し、普遍的になつた一因と考へても、何等差支はなからうと思はれる。

以下順次我纖維工業中の主たる、綿糸(鐘淵鐘標右十六手一梱)を中心として、大正元年より昭和二年に至る十六ヶ年間の、價格變遷の經路を說述しやう、而して其の豫備知識として、綿糸騰落事情に就て簡單に一言するも、何等駄足でないと考へる。

第一項　綿糸價格騰落の環境

國際的商品たる綿糸は、單に內地の情況に支配さるゝのみならず、弘く世界的情勢に左右さるゝものにして、市價の騰落を誘致する原因も、仲々複雜してゐる。從てその價格變動は常に廻轉せられ、且その騰落値幅も比較的大きく、投機、思惑の對照とさるゝに至つた。それ故に、現今の綿糸價格には、諸經濟現象の推移以外に或種の威大なる力が存在してゐる。この或種の力を稱して人氣といふ。而してこの群衆心理である人氣の冷熱の如何により、價格は綿糸自身の環境を無視して昂騰し或は下落する。

然しこの人氣も要するに、經濟現象に刺戟せられて誘發し、相場上下出發の動機を作り出し、波瀾を畫くものにして、その動因は矢張り經濟現象の推移に存するは、贅言を要しない。故に、人氣は單に價格上下道程の綾を構成するものと思はれる。以下經濟現象に就き一言せんと欲す。

棉花價格の騰落

棉花は綿糸の原料品として、その價格に最も重要なる關係を有するものにして、棉花の過剩著しく、ために價格の激落を來たす場合には、價格調節を行ふために、作付反別を縮少して減收を企劃し、棉花の需給を緩和する。クロニクル誌の調査により七月末日を以て終る一ケ年間の世界棉花需給統計を示せば次の如し、(單位千俵)

生産高	一九二四—二五年	一九二三—二四年	一九二二—二三年
	一〇、九六四	一〇、九六一	
米棉	一四、三九二		

印　棉	四、八〇〇	四、七五〇	四、七〇〇
埃及棉	一、四五〇	一、五〇〇	一、六〇〇
伯利西爾其他	二、〇〇〇	二、四六〇	二、七〇〇
合　計	二二、六四二	一九、六七四	一九、九六一
消　費　高	二一、八四七	一九、六四〇	二〇、九六〇
差引生產過剩	七九五	三四	（不足）九九九
年末在荷	六、九三二	六、九三二	六、一〇三

而して右統計によりて立證せられる如く、米棉は世界棉產額の過半を占め、その需要の大半を供給してゐる。故に米棉產額の增減如何は、綿糸の價格に直ちに影響する。

然らば世界棉花界の覇王たる米棉の價格が、常に獨占的平靜を保ち得るかと云ふに、決して然らず。米棉は自體の環境により、變動常なきものである。その環境を構成する諸事情は、複雜にして之を簡單に述べることは甚だ困難であるが、便宜上その諸事象を次に採錄する。先づ米棉の國內的關係諸事象として、

一、新年に於ける米國經濟界の觀測の良否
二、米棉最終繰上高（實收高）發表の多寡
三、萬國紡績聯合會調査による、一月末日に終る過去六ケ月間の世界紡績棉花消費高と、二月一日現在の世界棉花在荷高
四、右の數字を基礎とする、棉花年度末（棉花年度は八月一日に始り七月末日を以て終る）に於ける、世界棉花在荷豫想と米棉の在荷豫想
五、右により得たる期初米棉繰越豫想高より、豫想されたる次季棉の作付反別豫想の增減
六、冬季に於ける氣候の溫寒による、各種害虫の成育乃至死滅の程度豫想
七、氣溫と雨量との關係
八、新棉作柄豫想の良否
九、新棉作付反別の發表
十、新棉收穫豫想の發表
十一、新棉繰上高の公報
十二、其の他新棉の生產費如何、米國經濟界の推移、棉花商の態度、紡績織布界の情勢、政治事情等あり。

更に轉じて米棉の國外關係事象として、

一、マンチエスター、リバプール、ニユオリンス等の市況の盛衰
二、歐洲及東洋の棉花需要情況並に紡績業況
三、歐洲及東洋の棉花商の態度並に政治、金融事情
四、印度棉花商の情勢

等が列擧される。實に是等內外の諸事象の推移により、直接或は間接に、市價に影響し、米棉相場の騰落を展開す。

次に、印棉はその品質、製產額に於て米棉に比し遙かに劣るが故に、その市價の如きも印棉自體の環境即ち、印度特有のモンスーンの經過如何、作柄の良否乃至は實需の狀況、或は土人一派の思惑如何によりて變動する外、主として米棉の影響を受けて、騰落を演ずることが最も普通である。

銀塊相場の騰落

一般商品としての銀塊は、

一、貨幣鑄造用

二、美術工藝用（消費の約二割）

三、貯藏用（消費の約四、五割）

等に用ゐらる。而して支那及印度は古來銀を愛好し、財寶とする習慣ありて、世界に於ける銀の需要國と目されてゐる故にその需要の增減は、直接に而も力强く世界の銀市場に影響する。

世界に於ける銀塊市場として知らるゝは、倫敦、紐育、孟買、上海であるが（孟買、上海は銀の大集散地にして銀塊市場としては如何と思はれるが、便宜上之を銀市場として掲ぐ）その相場の騰落が、東洋貿易上最も密接なる關係を有する我經濟界に、如何なる影響を有するか、即ち綿糸布に如何なる關係があるかに就き、順次ペンを進めやう。

抑〻金貨國間に於ては、金貨そのものゝ價格は絕體的に不變であるが、爲替相場は時〻刻々に變動する。次に銀貨國間に於ては、本位貨の銀は金貨國の金に對し變動して止まぬ。蓋し銀は銀自體商品としての時價を有し、その相場が變動常なきが故である。故に銀貨國と金貨國との爲替相場は、金貨國間の爲替相場以外に、銀塊相場の變動が有力なる要素にして、且銀塊相場は變動常なきものなるが故に、銀貨國と金貨國間の爲替相場は非常に變動の多い結果となる。我國と支那とは丁度此關係に在りて、他の諸外國より關係が密接なる地位にある。されば銀塊相場の騰落による爲替相場の變動は、我國貿易上、殊に綿糸布價格に大影響を齎すものである。

綿糸の需給狀況

我國紡績會社の綿糸出來高は、每月四日大日本紡績聯合會より、その前月の概況が發表せられるが、その生產綿糸は如何に消費さるゝか、即ち紡績會社の兼營する織布原糸として使用する外、之を內地市場に供給すると共に、海外にその販路を求めてゐる。從てその生產數量に對し、內地需要の旺盛なるか否かにより、或は輸出商談の增減によつて、市價も亦變動するを免れぬ。

綿糸、綿布輸出表

（單位、綿糸梱、綿布圓）

年次	綿糸	綿布
大正元年	三七四、九三三	二五、七六一、三九五
二年	四六八、七三七	三三、六〇五、六八四
三年	五六九、九九〇	三四、八四〇、七六一
四年	五七五、八九一	三八、五二一、四三三
大正五年	五四七、一四七	六〇、〇五〇、六四四
六年	四七〇、八五三	二七、四五八、二五一
七年	四二、五二三	三二七、九二三、一二〇
八年	二三〇、三三三	二六〇、三二一、〇六二

九年	三〇四、九二五	三三四、九六五、〇二六	十三年	二七〇、三五九	三三六、五九七、四八四
十年	二九二、二六〇	二〇三、六七三、三九九	十四年	三一〇、八〇一	四七二、三五七、二七三
十一年	二九四、〇六三	三三三、〇五二、二一九	昭和元年	二〇五、五五〇	四二六、二六四、六七五
十二年	二四八、三三四	二三四、七五四、二六九			

實に右の數字によれば、歐洲戰亂當時如何に斯業が惠まれたるかを知ると共に、最近に於ける輸出の減少に對し、紡績工程の進歩發展に伴ふ織布原糸の增減—動亂當時に比し實に二倍に達してゐる—、即ち綿布としての輸出が如何に旺盛であつたかを立證してゐる。

斯く綿糸價格は、綿糸布輸出の增減によりて變動するものであるが、綿糸としての輸出は綿糸生産高の一割二三分に過ぎず、綿織物の輸出はその四、五割に達してゐる。實に我綿糸は主として(六割見當)海外に於て消化せられる勘定なれば、自然市價の大勢も輸出如何によることゝなる。

而して輸出綿糸の主なる仕向地としては、支那市場には、上海、天津、芝罘、青島、牛莊、大連、漢口、安東縣等、他の海外市場には、香港、南洋諸島、印度、阿弗利加、浦鹽、其の他の諸國がある。支那市場への輸出は金輸出數量の五割、印度二割五分乃至三割、香港約二割の順位となり、從て支那並に印度市場に對する輸出の盛衰は市價に至大の影響を及ぼすものである。

次に、綿布の仕向地としては、支那市場に上海、天津、芝罘、青島、牛莊、大連、漢口、安東縣等の諸港あり。其の他海外市場には、香港、印度、マニラ、蘭領印度、海峽殖民地、埃及、濠洲、道羅其の他がある。而して輸出綿布の數量は綿糸同樣支那五割、印度二割五分を占め、兩地の情勢は特に影響する所大である。

阪神綿糸布在荷の增減

綿糸價格騰落のバロメーターをなすものに、阪神在荷と稱するものがある。これは日本棉花同業會の調査にして、阪神兩地の本倉庫、上屋兩者の在荷にして每旬發表されるものであるが、この數字上の增加は內地の不振、輸出の不振を意味し、その減少は內需旺盛、輸出增進を表象する。從てこの數字は紡績會社の生産高と共に、綿糸價格上重要なる地位を有し、前途の需要豫想を律する資料となるものである。

尙、阪神綿糸在荷表の數字の增減も、綿糸價格に影響するところ綿糸同樣にして、前途を卜する目安として絶大の權威を把有してゐる。

操業短縮と綿糸價格

操短とは、生産を制限して滯貨の壓迫を緩和し、これより市價を釣上げる政策である。紡績それ自體の發達上、非常なる貢獻を爲し來れる操短は、過去十四ヶ年間に約八年操短を行つてゐる、今この統計を示すに次の如し。

自明治四十五年四月 至大正元年九月	六ヶ月間	一ヶ月四晝夜休業決議實行
自大正三年八月 至同年十一月	四ヶ月間	一ヶ月四晝夜休業及一割休錘決議實行
自大正三年十二月 至四年七月	八ヶ月間	一ヶ月四晝夜休業二割休錘及棉花一割休臺決議實行

自大正四年八月 至大正五年一月	六ケ月間	一ケ月四晝夜休業一割休錘及梳棉機休臺決議實行	
自大正七年一月 至同年六月	六ケ月間	一割休錘決議實行	
自大正七年七月 至同年十二月	六ケ月間	太糸一割休錘決議實行	
自大正九年五月十日 至同年六月十四日	一ケ月間	一ケ月六晝夜休業決議實行	
自大正九年六月十五日 至同年八月十四日	二ケ月間	一ケ月四晝夜休業一割休錘及一日四時間休錘決議實行	
自大正九年八月十五日 至同年九月十四日	一ケ年一ケ月間	一ケ月四晝夜休業二割休錘及一日四時間休錘決議實行	
自大正十年九月十五日 至同年十二月十四日	三ケ月間	一ケ月四晝夜休業一割休錘及一日四時間休錘決議實行	
自昭和二年五月 至同年十二月	六ケ月間	一ケ年四晝夜休業一割五分休錘(十時間二交替制)決議實行	

以上の操短には、一定の法則が規則的に循環して紡績の發達、延いては糸價の調節に肋成してゐる。供給過剰となれば操短の決議となり、操短の期間を經過する時分には、巧に需要の調節が行はれ、增錘の計畫となり、增錘完了の曉には再び供給過剰となりて操短を繰返し、恰も一定の休養期間を經過して、活動期に入るが如き觀を呈して來たのであつて、過去の歷史は雄辯にこの事實を物語つてゐる。これに關しては追て說明する史的考察の中に、自然了解せられるであらう。

紡績操短の歷史を知る者は、操短の威力を十分に知悉してゐるが同時に世論は往々之に極端なる攻擊を加へ、許すまじきものとしてゐた。公平なる見地に立ちて考ふるに、經濟界混亂の場合は別として、引續きこれを繼續するが如きは、人道上、輸出貿易上より見るも不利益である。過去に於て反對攻擊されたるは、績紡の業績が餘りに良い爲めに、始終羨望の的となつてゐたことも、事每に攻擊せられたる一因であると思はれる。

政治經濟問題と綿糸との關係

以上の外、綿糸價格に影響するものに、內外政治關係、內外金利公定步合の變動、爲替相場の變動等種々あるが、紙數の制限上その中、支那に於ける日貨排斥と綿糸布との關係に就き一言しやう。

從來支那には、從前幾回となく動亂暴動が繰返され、その規模の大小こそあれ、殆ど年中行事の觀を呈してゐる。從てその騷亂當時はその規模にもよるが、その都度我對支貿易上に支障を來すを例としてゐる。然し一ケ年を通じて見るときは、我對支貿易は年々增大し、騷動勃發當時はこれを悲觀材料として取扱ふが、漸次消滅する傾向がある。

支那に於ける日貨排斥運動は、大正四年二十一ケ條問題、同八年山東問題、同九年旅大回收問題、同十四年紡績罷工問題、の四回の多きに達してゐるが、綿糸價格への影響は、一時的には內地滯貨豫想で市價の低下を來たすが、一定の時期を經過し滯貨も減少すれば、動亂後は却て需要喚起豫想に轉じて市價は回復し、終熄後の輸出增大し、而して昂騰するに至る。然しその輸出も或程度迄に達すれば、支那市場の在荷を激增して輸出減を來たし、市價の軟化を招來する。而して此の場合には、綿糸の對支輸出如何のみを考慮し、綿糸自體の環境は不變としての說明である。

之を要するに、對支貿易は大勢から見れば、一時の兵亂や暴動よりも、水害等による支那國民の經濟的疲弊の方が、打擊を與ふるものと考へらる。

第二項　綿糸價格の史的考察

最近十六ケ年間に於ける我綿糸界には、特筆すべき夥多の新記錄が殘された。大正元年初頭の糸價は百四十圓臺にして爾來國民が齊しく哀悼謹愼の意を表してたゝめ、殆ど一ケ年間と云ふものは、百四十圓臺より百五十圓臺の大保合を續け、偶〻大正三年（西曆一九二四年）七月二十九日、墺軍が突如セルビヤの都ベルグラードを占領するや、歐洲の經濟界は愕然として色を失ひ、八月一日獨露の國交斷絕に次で、歐洲各國間の宣戰布告は、歐洲の天地をして一時に修羅の巷と化せしめ、同時に米棉及銀塊相場の入電なく、從て我國も疑心は暗鬼を生み、一方戰亂の擴大するに伴うて、我帝國も亦八月二十三日を以て對獨宣戰布告となり、十一月七日青島は陷落して東洋の不安は一掃された。然るに米國棉花は戰前の半値に暴落し、紡績は一割の操短の繼續に次で、更に一割增錘の決議をなしたる、一般經濟界の沈淪に伴うて三年十二月には九十一圓丁度といふ、明治三十三年六月團匪事件以來の新安値に暴落した。

然るに、その後漸次活況を呈するに至り、大正五年の中旬には全く舊態に復し、爾來糸價の慘落に逆行して增加し、加ふるに棉花及綿製品は、軍需品として莫大の需要を喚起したるため、前記の安値を名殘りに六年七月には四百圓といふ空前の高値に暴騰し、その後婦和說の提唱と値高に伴ふ多少の波瀾起伏は避けられなかつたが、戰後物資の大移動に伴ふ大景氣來と共に、八年十一月には六百九十五圓といふ有史以來の新高値を實現した。

ところが滿れば缺くるの譬に洩れず、思惑熱熾烈の半面は、次第に金融の梗塞、物價の調節となり、偶〻九年四月某銀行の破綻が先驅となつて、財界は急轉直下的に惡化し、三月六百八十圓のものが十二月には二百七圓と、實に四百七十三圓方の大暴落を演じ、從て綿糸布の先約に對しかの不名譽なる七割切捨問題を惹起せし程悲慘を極めた。

その後財界の整理期に入れると共に、全く反動の一筋を辿り、取り分け昭和元年度は、米棉一千八百萬俵臺といふ稀有の大豐作に伴ふ世界的原價不安——爲替恢復による外需の梗塞——支那の動亂——銀塊相場の慘落——深夜業廢止の前提としての紡績二十二、三萬梱の增産——といふ環境の不良に、百七十圓といふ戰前の新安値に崩れ、二年に入り財界稍安定するに及び、漸次好調を呈し九月には二百四十圓迄恢復したるも、曩の黃金時代を顧みるに、眞に感慨無量である。

以上線糸價格變遷の跡を、大略說述した積りである。これより出來得る限り、各時代別にその變遷の徑路及その原因とも稱すべきものに就て、より詳細に叙述を試みやう。

然し乍ら行論の便宜上、前半は稍簡にして、後半は稍稠密である。これは世界的大勢の然らしむるところにして、加ふるに後半の慘落は、以て特に今後の趨勢を卜知するの好教訓である。歷史が經濟の集合なると共に、實驗は敎訓の垂示であるとすれば、此の叙述敢て徒事の業ではなからうと信ずる。

大正元年　本邦の綿業界は、日淸日露歐洲の各三戰役に添うて、著しき發展を遂ぐるに至つた。本年三、四月頃迄多少輸出減退の趨勢にありし我綿業界も、爾後向上の狀勢となり、外は南支那動亂鎭靜後需要頓に增加し、加ふるに銀塊相場昂騰したるため、支那に對する輸出盛況を示し、內地に於ては一般人心の安定と共に、購買力の恢復を來たし、需要の增進を見るに至り、一時の操業短縮も問題とならなかつた。

斯くて十月に入り、一割七分五厘の操短撤廢に加ふるに、九月以降四晝夜休業制度の廢止を試みるに至り、斯界は大に

樂觀氣分濃厚となつて、價格の昂騰を見るに至つた。尤も内地に於ては、米作の違收入及金融方面の緊縮に累せられ、相當の打擊を蒙りしが、他面銀塊相塲の昂騰、及秩序恢復後に於ける需要の激增等、支那方面の輸出額は日を逐うて殷盛となり、内地需要の減退にも拘らず、在庫品の拂底を告げ、從て糸價は却て昂騰するに至つた。即ち十一月の製產額十二萬八千梱に達せるも、輸出は四萬二千梱と連れて新記錄を示し、十二月は輸出四萬七千梱といふ更に巨額を算する等、茲に輸出萬能の一大威力をば發揮することゝなつた。更にこれを前年同月と比較するに、十一月に於て二倍以上の激增となつてゐる。

	大正元年 十一月 梱	大正元年 十二月 梱
綿糸出來高	一二八、四九七・〇	一二八、五七六・〇
輸移出高	四二、四八一・〇	四七、六八一・〇
内地殘存高	八六、〇二六・〇	八〇、八九五・〇

	明治四十四年 十一月 梱	明治四十四年 十二月 梱
綿糸出來高	一〇一、〇六八・〇	一〇三、七六四・五
輸移出高	一六、九九九・〇	二三、五五三・〇
内地殘存高	八四、〇六九・〇	八〇、二一二・五

大正二年　斯くて大正元年の糸價は、多少一高一低を辿りつゝ經過したが、本年に於ても昨年と同樣、一高一低を以て終始し、一ヶ年平均價格に就ても差したる變化はなかつた。即ち、一ヶ年平均價格は大正元年は百四十五圓三十二錢、大正二年は百四十六圓拾八錢である。

今、本年推移の跡を顧みるに、上半期は何等の波瀾もなかつたが、俄然上半期の終りより下半期にかけて、支那紛糾は遂に南北の軋轢となつて、價格は頓に下落し、七月は六月の百五十圓臺より、百三十圓臺迄暴落するに至つた。併し幸ひ支那に於ける禍亂は、豫想外に早く鎭定し、一般の不安を除くに至り、加ふるに銀塊相塲の騰貴に伴うて、糸價も向上歩調をとるに至つた。然るに十一月に入り内地機業界の不振、原料の昂騰、銀塊の動搖等不安材料續出したゝめ、十二月には亦々百三十圓臺へと逆戻りを演じた。

大正三年　歐亂前の大正元年、同二年に於ける糸價の大勢は、上述の次第で一進一退の經路を辿つたが、要するに不振の狀態といふことが出來やう。今その變遷の跡を回顧するに、六、七兩月の少騰以外は、一月以來續落の狀態である。こは日淸、日露兩戰役當時と變りなく、開戰となるや世界は大に動搖し、棉花の暴落、海外爲替の杜絕、銀塊相塲の崩落等、幾多の悲觀材料を以て蔽はるゝに至り、遂に糸價は續落するに至つた。六、七兩月は一割休錘の決定と、米、印兩棉の漸次高報等に因つて、一時多少反撥的向上を現し、五月平均百十一圓八十三錢は、七月に入り百二十一圓十七錢と昇進したるが、其の後塊塞紛擾事件重大化し、生產漸く過剩となり、加ふるに原棉及銀塊の大挫折となつて、糸價は引續き大瓦落の恐慌相塲を演出するに至り、暴落は遂に九十圓臺に下落し、實に明治三十三年以來の悲況を呈するに至つた。加之、當時當局は緊縮方針を固持したる爲、一般物價は下落し、財界は恰も火の消えたる有樣となり、當時青島陷落（十一月上旬）の快報、及一割休錘の續行等に接しても、頽勢は容易に挽回することが出來なかつた。然し青島陷落し、且北支終航期に近づき現實行增加したるため、輸出は激出して十二月に入り五萬九千餘梱となり、本年の輸出は前年の四十六萬八千餘梱に對して、五十六萬九千餘梱、即ち十萬一千餘梱の激增を示した。

大正四年　歐洲戰局の前途尙遼遠であると雖も、聯合軍の形勢漸次良好となり、戰亂勃發と同時に、大暴落を演じた

る米國棉花は、政府保護と棉產地金融組織の新設により、棉價は次第に回復を告げ、且中立諸國に對する軍需品の輸出旺盛と相俟て、財界の好轉を誘發するに至り、一面地方在荷の減少、金融の緩慢等、何れも好轉材料に刺戟せられ、糸價亦日に昂騰するに至つた。併しながらこの好況も永く繼續するに至らず、原棉の低落、殊に政府者側の對支外交の澁滯により、對支輸出に惡影響を及ぼし、六、七兩月は遂に百圓臺を割るに至つた。歐戰第一年月の相場としては、當時如何に人氣が萎靡不振であつたかを、窺ふことを得やう。然しこの安値は尺蠖の大いに伸びんとして、先づその屈するの狀態にあつたものか、米棉相場の暴落も、英國の棉花戰時禁制品となすの宣言も、格別の動搖を與へず、日貨排斥の漸く去ると同時に、漸騰歩調に轉じ、一割操短の決議せられると共に、棉高追隨の漸昂歩調を辿り、一歩健實味を加へたのである。今本年の米棉、綿糸の現物相場を比較對照すれば左の如し。

月次	棉花 最高仙	棉花 最低仙	綿糸 最高 圓	綿糸 最低 圓
大正四年 一月	八・七〇	七・九〇	九六・五〇	九二・五〇
二月	八・七〇	八・三五	一〇六・〇〇	九七・〇〇
三月	九・八〇	八・二五	一〇五・〇〇	一〇一・五〇
四月	一〇・六〇	九・八〇	一二五・〇〇	一〇七・〇〇
五月	一〇・四〇	九・五〇	一〇六・〇〇	九八・五〇
六月	九・八五	九・四五	九九・〇〇	九六・二五

月次	棉花 最高仙	棉花 最低仙	綿糸 最高 圓	綿糸 最低 圓
七月	九・六〇	八・九〇	九七・五〇	九六・〇〇
八月	九・八五	九・二〇	一〇四・〇〇	九七・五〇
九月	一三・四〇	九・七五	一一四・〇〇	一〇五・五〇
十月	一三・七五	一一・八五	一一二・五〇	一一一・七五
十一月	一三・五〇	一一・六〇	一一四・〇〇	一一〇・〇〇
十二月	一三・七五	一一・九五	一一八・五〇	一一四・五〇

次に大正四年の綿糸輸出額を示せば次の如し。

月次	輸出高	月次	輸出高
大正四年 一月	五〇、四八〇梱	五月	三五、三七一梱
二月	四七、五三七	六月	三五、七八四
三月	四四、三七九	七月	四一、二九〇
四月	四〇、六九三	八月	五七、四六〇

註　八月以來の昂騰は、原棉高に刺戟せられたるものにして、これは輸出商をして、此の間棉高思惑の買進みをなさしめた所以である、而して糸價の不振が却て輸出增加の因を作つたことゝ思はれる、注目すべき現象である。

大正五年　以上は開戰後一ケ年間の糸價推移の狀勢であるが、その後の變遷は著しく漸騰の一方である。即ち本年十二月の百七十九圓五十錢を最高値、一月の百十五圓を最安値として、その最高最低値幅實に六十四圓五十錢の多きに上つてゐる。故に値頃の新記錄に止まらず、値幅に於ても、亦新記錄を作れるものといふことが出來る。今大正元年より五年迄の、最高最低値幅を列擧すれば次の如し。

	圓		圓
大正元年	一三・五〇	大正四年	三二・五〇
大正二年	二一・五〇	大正五年	六四・五〇
大正三年	四八・〇〇		

今、大正四年の糸界を回顧するに、本年當初に於ては、關係商品の活動に連れ好調を呈したる綿糸は、支那政局動搖懸念のため輸出に勘からざる打擊を與へたるも、糸價に對しては、特に注意を要する程の影響はなかつた。然し本邦に於ける輸出貿易は、一般に好況を呈し、時局關係品の各種製造品は昂騰の一方であり、加ふるに金融も緩慢なりしため、糸價

は漸次昂騰に赴ひ、殊に印度支那からの注文嵩みたる等、斯界の景氣は倍々良好に向ふ一方であつた。その後對支輸出の好調及米、墨風雲急を傳へて、米棉稀有の狂騰となりたるため、糸價も大いに恢復し、當時百三十圓臺を突破した位であつた。

而して此の好況は本年下半期に入り、依然繼續されたのみでなく、銀塊及米棉漸騰した爲、終に八月には百四十圓臺を唱へ、殊に十月に入りては米棉の不振確定と共に、棉花は益〻昂騰し、輸出綿製品の好況、並に内地綿布の活躍等と相俟て、糸價は十一月に入り遂に百七十九圓の高値を示した。年末に至り突如獨帝の媾和提議のため、糸價の下落も激甚であつたが、下旬聯合軍の媾和一蹴によつて又反撥し、本年の最高記錄を實現した。而して茲に戰時蟄伏の時代を去つて、正に雄飛時代に入らんとする戰爭剌戟の第一の波瀾を演じた。

之を要するに、斯くの如き好記錄を作りたる所以は、要するにその根本原因は、歐亂の齎らす好景氣であるが、その直接原因は前述の如く左の四項であらうと思はれる。

一、綿製品の輸出激增
二、原棉の激騰
三、綿糸産出增加の困難（機械輸入困難のため）
四、金融市場の大緩慢

等である。

而かも仔細にその昂騰振りを考察するに、本年中の糸價は之を自然的昂騰時代、人氣的昂騰時代の二に大別が出來やう即ち本年上半期の相場がその高低案外緩徐であるに反し、下半期殊に後三ケ月間の昂騰が、龍の雲上するが如く非常に急激であつたことは、前表の如くである。これ上半期の相場が需給乃至原棉關係を主とし、人氣を從としたるためにして、下半期特に九月以降急激に昂騰したるは、財界好況に伴ふ思惑熱の勃興に因り、人氣に重きを置かれたるに外ならない。しかも此の傾向は年末に於て特に顯著なるものがあつた。

斯くて大正五年の糸界は叙上の如く末期に至り素晴らしき勢を以て新記錄を作り、俗にウタツ（卯辰）の上騰時代を實現したのである。

大正六年　大正六年中に於ける綿糸界は、波瀾曲折に富み、總括的に言へば殆ど、『空前絶後の綿糸界』の一言に盡きるであらう。而してその經過と原因を詳述するは、寧ろ蛇足の觀あるを以てその大勢を概説しやう。

前表によれば、本年の糸價は七月の四百圓を最高値、一月の百二十八圓五十錢の多きに上り、昨年の六十四圓五十錢に比すれば、その空前の大波瀾の戰跡を偲ぶことが出來やう。それ以外に於ける淨動は前表によつて一目瞭然である。

之を要するに、歐亂の影響に基くものにして、斯くの如く糸價の狂騰したる所以は、

一、戰亂に伴ふ織布對外輸出激增
二、正貨激增、通貨膨脹に伴ふ金融の大緩和

三、投機熱の勃興と思惑資金の増加
四、原棉稀有の新高値
五、米棉作付反別の減少、並に作柄不良と軍需品としての需要増加、及之に伴ふ供給不足懸念と先高見込等相綜合せられ、糸を買ふよりも、金力で人氣と相場とを作り出された結果であらう。

次に反動的熱氣の冷却原因は、

一、熱狂に伴ふ内外實需の減退
二、棉花の呼吸的低落
三、營業者困憊に伴ふ不安人氣の助長
四、銀行の警戒
五、製產增加

等の因果輪轉に因り、人氣で糸價を崩したに外ならないが、斯くして六年綿糸界は窮極するところ、上半期の半まで獨乙の中立國宣言、英國の輸入禁止、支那印度の關稅增加問題、更に回轉して露國大革命亂の勃發等のため、戰時活躍の時代に入りながら今一段の活氣なく、實勢本位の平靜を保ちたるが、それ以後に於ては、徹頭徹尾人氣と仕手關係本位の大騰落を演じたのであつて、而もその原因は一に、戰時財界の一大變態に伴ふ變態的人氣の大消長に外ならない。

今一般關係業者が最も參考とし、且記念とする糸價と需要との關係表を附記しやう、次表を比較對照すれば此の間自ら釋然たる解釋を得ることが出來やう。但し、茲に特に注意を要する事象は、八月中の輸出激減にして、これは金力相場が如何に輸出を阻害するものなるかを實證するものである。

大正六年大阪三品取引所各限月成績表

月次	發會値	最高値	最低値	終了値	綿糸輸出高	綿織物輸出高	メリヤス類輸出高	綿糸末現荷
	圓	圓		圓	梱	千圓	千圓	梱
一月	一四三・〇〇	一九五・九五	一四一・八〇	一七五・七〇	四二、一七二	七、三三四	一、六六八	二、九三二
二月	一五二・五〇		一九七・〇〇	一八五・四〇	四四、七〇六	八、一二三	一、六七三	一三、九九七
三月	一五五・〇〇	一九五・四五	一四八・八〇	一九〇・〇〇	五七、三三一	一〇、〇七九	二、六二一	一三、一〇六
四月	一八九・九五	二二七・九五	一五二・一五	二〇八・九五	五〇、六九〇	九、〇一三	一、六一七	一二、四五九
五月	一八四・五五	二四六・九五	一六一・一〇	二三四・九五	四三、九一一	一〇、三四一	一、八四七	一一、三七三
六月	一七四・〇〇	二七九・四〇	一六九・四〇	二七七・三五	二二、七五一	九、二五一	一、八八四	一五、四八三
七月	一七五・九五	四七〇・〇〇	一六八・九五	四一六・〇〇	二四、〇四六	九、一〇六	二、六二五	一八、六三八
八月	一七七・九五	四七二・九五	一七〇・〇〇	三一七・五五	一七、二八六	一一、〇二四	二、六四八	二五、二七四
九月	一八三・二〇	四七四・五〇	一七二・九五	二七五・七〇	二八、二九七	一二、六八八	二、五六一	二九、一二五
十月	二〇三・二〇	四六五・〇〇	一八二・九五	二三四・一〇	四五、五〇七	一三、一二九	二、四五八	三二、四三八
十一月	二三五・〇〇	四六二・五五	二〇一・〇五	三九四・二〇	六〇、八九二	一四、五〇五	二、八八一	二二、五三五
十二月	二〇二・五〇	四六五・〇〇	二一五・〇〇	三〇九・〇〇	二三、五六五	不詳	不詳	四三、一四八

大正五、六兩年の綿糸輸出比較表

月次	本年梱	昨年梱	比較梱	
一月	四〇、五三一	三四、四六二	六、〇六九	增
二月	四四、七二八	五二、二八八	七、五六〇	減
三月	五六、九六二	六二、二四三	四、二八一	〃
四月	四九、八六一	五六、三四四	六、四八三	〃
五月	四二、二八四	四八、五九二	六、三〇八	〃
六月	三二、一七三	三六、九五九	一四、七八六	〃
七月	二四、一八六	三九、一七〇	一四、九八四	〃
八月	一八、〇九七	四七、九三〇	二九、八三三	〃
九月	二七、四五〇	三〇、七八〇	三、三四〇	〃
十月	四五、五〇七	三八、三七一	七、一三六	增
十一月	六〇、八九一	三四、六五一	二六、二四〇	〃
十二月	三五、五八八	五二、九七〇	一七、三八二	減

大正七年　本年の糸價は昨年の跡を受け、再度の戰時相場を現出し、十月の四百二十八圓を最高値、一月の二百九十七圓を最安値とし、一ケ年平均三百五十七圓二十錢を以て終つた。而してその變動値幅（百三十一圓）に於ては、昨年（二百二十八圓五十錢）には到底及ばないが、綿糸の高値としては斯界の新記錄を作つた。

今、本年の糸價を概說するに當り、行論の便宜上過去戰時中に於ける斯界を大觀するに、歐亂勃發當時世界的人氣衝動の惡影響を受け、百圓臺割れの慘落を告げたるも、爾後年を追うて世界的物資缺乏の好影響を受け、幾多の大波瀾は免れなかつたが、終に三、四百圓臺へと漸騰を實現するに至つた。而して戰時中糸價が三、四百圓臺を持續し得たるは、一は原棉騰貴と金融緩慢の影響に因るとは言へ、我綿業界の興隆と、對外輸出激增に、基因することは爭ふべからざることである。參考のためその數字を示せば次の通りである。

綿糸需給關係　（單位梱）

年次	綿糸出來高	輸移出高	內地供給高
大正三年	一、六六六、一八四	五六九、九九〇	一、〇九六、一九四
四年	一、七二〇、二六四	五七五、八九一	一、一四四、三七三
五年	一、九二五、五七九	五四七、一四七	一、四〇五、四三二
六年	一、九二三、八四五	四七〇、八五二	一、四五二、九九三

綿業品輸出狀態　（單位千圓）

年次	綿織物	綿製浴巾	綿肌衣	其の他メリヤス
大正三年	三四、四八〇	二、三二一	八、四〇八	—
四年	三八、五一一	二、〇四五	一〇、七一七	一、六四五
五年	六〇、〇五〇	三、二六六	二八、八三四	五、一九三
六年	一二七、四五八	三、〇〇九	一六、七一八	九、五四六

註、綿糸製產高は對內事情によつて、前後數回の操短に拘らず、戰前に比し約二十萬梱の激增を示してゐる。然し

綿糸輸出高は戰時中却て減少を示してゐるのは、大需要地たる支那市場に於ける民力の疲弊著しくために需要減退した結果であらう。

戰前戰時の我紡績業狀態

種類	大正元年	大正二年	大正三年	大正四年
工場數	九三社	一〇〇社	一〇三社	二七三社
拂込資本金	六六、一六一、三七三圓	七七、五七五、二七二圓	八一、二三六、八七四圓	八五、二七九、七三四圓
平均一日運轉錘數（リング）	二、一七五、四三一本	二、二九四、四二七本	二、三六九、七九四本	二、七五三、五六七本
平均一日運轉錘數（ミュール）	三七、三四六本	五〇、〇三七本	四〇、一四五本	三四、一五三本
計	二、二三三、七六七本	二、二四四、四六四本	二、二〇九、九三九本	二、七八七、七二〇本
原棉需要高	七八、六六二、九九三貫	八八、六八五、〇七四貫	九五、〇八六、三五八貫	九八、〇三〇、六二八貫
綿糸製（リング）造高（ミュール）	六七、二九二、七一五貫	八〇、五五七、五〇〇貫	八一、七八三、七九七貫	八四、九〇五、二四四貫
計	六六、九二二、〇八三貫	六九六、九九九貫	五九八、六九〇貫	三八三、三五四貫
平均一梱價額	六七、九二二、〇八三貫	八二、二五四、四九九貫	八二、三四二、四八七貫	八五、二八八、四四九貫
石炭消費高	一四三圓	一四三圓	一二〇圓	一二三圓
職工（男）	六七五、五六八噸	一四六、三三九噸	七八九、六三八噸	七二一、七九八噸
職工（女）	一九四、八人	二一、二六四人	二三、四三〇人	二三、九五一人
職工計	八二、三三六人	九三、七二四人	九三、五八五人	一〇〇、八九四人
一日平均（男）	一〇一、七五四人	一二四、九八八人	一二六、一〇〇五人	一三四、八四五人
一日平均（女）	四錢	四五錢	四八錢	四八錢
職工賃銀（女）	二九錢	二九錢	三〇錢	三〇錢

斯くて戰時中の綿糸界は、如上大勢的狀態に於て順良に經過して來たが、更にこれが推移を大別すれば、

一、恐怖時代（大正三年十月より四年上半期の糸價九十圓臺より百二、三十圓の時）

二、安堵時代（其の後六年初めの糸價百五十圓乃至二百圓の時）

三、熱狂時代（六年上半期末より同年盛夏の糸價四百圓臺を呼びし時）

四、反動時代（夫の山嘉問題勃發當時糸價二百圓臺の時）

に劃別し得るであらう。而してこの論法で行けば、本年は

五、好況時代（休戰條約成立迄）

六、過渡時代（休戰條約締結以後）

の二期に區別し得るであらう。

扨本年初以降の經過を概觀するに、相場の記錄に於て米棉現物三十八・二十仙の新値を呼び、而も最高値は前年の四百圓を摩す四百二十八圓を實現した。大正七年中の上半期は米棉の騰落に因り、糸價は原價的に大波瀾の大騰落を示した。然るに飜つて綿糸布の海外輸出趨勢を案ずるに、綿糸輸出は綿布輸出に於て、逐次旺盛を極むるものとなつた。試に過去三ヶ年間に於ける、上半期輸移出綿布を對照するに、實に左の如き激增となつてゐる。（單位圓）

國別	大正七年上半期	大正六年上半期	大正五年上半期
支那	四七、七二四、九七五	三五、五一一、一四五	一四、四一一、二一四

關東州	六、三九七、四〇〇	四、〇五〇、三〇四	一、七一〇、八六六
朝鮮	九、五八九、三〇三	六、八二一、二六六	四、四三〇、九五三
香港	二、三〇〇、七〇二	七七五、三六八	五二九、二四六
英領印度	一七、二九三、〇三六	七、二八三、一五四	三、五八五、〇〇八
海峽殖民地	一、七一三、一八九	七六二、八六九	三三四、八七二
蘭領印度	六、一六九、五二〇	二、六三八、七二九	一、二二五、〇七八
佛領印度支那	五八〇、六一四	一九九、〇五九	八一、六四三
露領アジア	四、〇四七、六七五	三一一、九七七	三一〇、七六九
比律賓諸島	九二七、二七六	三四六、四七四	五六、八〇九
シャム	九〇二、四五一	一三四、一六〇	九一、一二八
英吉利	四三三、一二九	八、三四二	七三八、一五六
北米合衆國	七九二、八三一	九〇七、六六〇	三四七、六一二
濠太利	三、七九四、六九五	五五九、六九二	七八七、六七〇
新西蘭土	四八八、六二九	一三五、七二三	四五、四八九
布哇	九八、九一三	一六三、二八四	一一八、五六六
其の他	二、一三九、〇七九	二五一、八四〇	一九六、七八二

斯くの如く綿布輸出の好況は綿糸在荷の消化となり、一方米棉も頽勢を恢復し操短の繼續に連れて漸騰し、十一月に入り休戰條約の締結は好材料を與へしが、米棉の暴落のため十一、十二兩月は漸落した。

大正八年　戰亂に因り騰貴したる物價が、戰爭の終末と共に下落するは因果の道理であるが、然かも通貨の濫發に原因する黃金洪水は滔々として所謂膨脹し、戰爭終末の報と共に一時一服の狀態であつたが、斯界も亦思惑熱油然として勃發し、人氣と相和し戰後灼熱時代を展開した。本年は初頭より歲末に至る間殆ど續騰の狀態を現出してゐる。殊に七月以後の昂騰は最も甚しく、最高値は六百九十五圓、最安値は四百圓にして、その最高最低値幅實に二百九十五圓である。而してこれを昨年に比し百六十四圓方の騰貴である。

本年一月以降米棉の續落にも拘らず、生產能力の減退及世界的需要が旺盛であるため、格別の影響も與へず、阪神在荷の減少と相俟て漸次好轉し、糸價は非常の高値となつた。次で媾和成立と同時に糸價獨り狂騰し、物價問題に惱まされながらも依然穩健を失はず、米棉の暴落も全く對岸の火災視する觀があつた。かくて步一步と新高値を實現した。こは要するに、全く需給關係の然らしむる處である。十月以後織物界の好況に需要も旺盛を極め、且米棉高を報ずる等糸價は終に六百圓を突破した。然しながら十一月末に於て、產額增加と輸出減少は阪神在荷の激增(六千餘梱)を來たし、十二月一轉還落の趨勢に變じ、且金融界の警戒等があつて相當の暴落を演出したが、倘一方に於て原棉輸入難及購買力の旺盛等の强材料のため、大した浮動も生じなかつた。然し此の時既に、極樂時代は漸く推移せんとする徵候を現してゐた。

大正九年　本年は一月より三月に至る約三ケ月間、戰時の高値を持續したるが、三月中旬より俄然形勢一變し、歲末に至るまで殆ど續落の狀態である。これは要するに、戰時灼熱時代が既にその極度に達し、本年は早や峠を越して下り坂となつた。而して三月迄高値を保合へるは、昨年よりの惰勢に過ぎないものと思はれる。故にその時期の長かるべき筈はな

く、終に夫の大暴落歩調を辿ることとなつたのである。

本年綿糸の最高値は二、三兩月の六百八十圓、最安値は十二月の二百七圓にして、その最高最低値幅實に四百七十三圓といふ素晴らしき勢を示してゐる。而も最高値は戰時灼熱時代の第二番天井である。

歐亂後糸價の奔騰は、斯界に對する人氣を彌が上にも集中するに至り、本年初頭より三月迄は、外は海外糸價の昂騰、銀塊相場の暴騰、內は通貨膨脹に伴ふ財界樂觀、株式及生糸高の刺戟、政府の物價調節、澁滯等、幾多の强材料が因をなし前年の高値を持續して、前述の如く戰後第二番天井を實現した。三月中旬より、上述の諸强材料何れも行詰りの狀態となつたが、尙高値に經過せんとし、熟柿の既に爛熟してしかも容易に墮ちない觀があつた。然るに金融界は梗塞の狀態となり、從て綿布停滯は愈〻大となるに隨ひ、この傾向は綿糸に波及し、加ふるに銀塊相場の崩落は斯界を不安狀態ならしめ四月終に六百圓を割るに至つた。而してこの低落歩調は月を逐うて倍々顯著となり、操短四割の實行、其の他糸價崩落による取引不能の緩和策として、輸出綿糸組合（シンヂケート）の組成も案外不成績に終り、加ふるに米棉、印棉及銀塊が激落して輸出不況となり、遂に三月當初の六百八十圓に比し半分、乃至三分以下の暴落となつたのである。茲に於て市場は大混亂と化し、當時の不況は眞に人をして慄然たらしむるものがあつた。殊に銀行方面の破綻及機業地の窮狀等何れの方面にも不況が充滿してゐたのである。

要するに、今回の慘狀は戰後好況期より平和期に移る過渡期にして、從て暴落の程度もそれだけ甚しかつたのであらう。

綿糸綿布輸出額月別表

月次		綿糸製産額	綿糸輸出額	綿布輸出額
		梱	梱	碼
大正九年	一月	一五六、六二八・五	一〇、九九四・五	圓 二三、三四七、一六二
	二月	一六五、二六〇	一六、一七七・五	二五、八三三、六六五
	三月	一七三、四〇二・五	一四、六六四・五	二八、七九三、五二一
	四月	一七五、一二〇・〇	一八、八二二・〇	二九、六四四、六〇六
	五月	一六九、〇四七・〇	一三、七三九・五	二三、四三三、一五九
	六月	一五二、五三一・〇	一七、〇七九・〇	二三、六九三、三三八
	七月	一二九、八五二・五	二〇、一九六・〇	一五、〇五八、三八〇
	八月	一二七、八一六・五	四三、六〇一・〇	二八、五九八、六二三
	九月	一三一、四八一・〇	四六、九〇六・〇	三三、一八四、五三六
	十月	一三六、七二一・五	四三、五〇〇・〇	三三、五九九、二〇四
	十一月	一四六、七三九・五	二五、二六二・〇	一七、五八四、三五三
	十二月	一五三、六二九・〇	二一、三二八・五	一〇、〇〇二、一五四

大正十年　大正十年の糸價變遷の跡を大觀するに、大體に於て二期に區分することを出來る。即ち漸落歩調の上半期漸騰歩調の下半期是である。而して最高値は一月の三百三十三圓、最安値は三月の百六十六圓にして、その値幅は昨年に比し三百八圓方の下落である。

一月初頭米棉、銀塊共に引締りを示したが、既に銷沈の人氣は一向に引立たず、其の後銀塊の新安値及操短滿期に對する不決定は尙更人氣を不安ならしめ、三月には終に二百圓關門を割り、更に外は歐洲外交界の暗憺、內は原內閣の行詰り等あつて、百六十圓臺に慘落した。今戰後灼熱時代の第一、二番天井の各値段と對照するに、實に驚くべき激落となつてゐる。

大正八年十一月		大正九年二月	
	六九五圓		六八〇圓

其の後四月に入るや、內地需要の逐次增加と輸出の漸增は、阪神在荷の漸減により徐々に昂騰の步調に轉じた。

大正十年一月			三三三圓		
大正九年	月次	大阪	神戸	合計	
	九月末	一二五、九七五	七、四九三	一三三、四六八	
	十月々	一〇八、五三一	七、七〇九	一一六、二四〇	
	十一月々	九七、九〇六	七、六四五	一〇五、五五一	
	十二月々	七八、一一〇	六、三六九	八四、四七九	
大正十年	一月々	七二、七六六	四、二三六	七七、〇〇二	
	二月々	七七、一五七	三、四四八	八〇、六〇五	
	三月々	六六、六六一	二、〇八一	六八、七四二	
	四月々	五八、八一〇	九二四	五九、七三四	

斯く在荷の減少は、操短と相俟て昂騰步調を辿つて居つたが、英國炭鑛夫罷業の紛糾等のため、其の後一進一退の浮動狀態であつた。然るに操短解除見越賣込の反動と、米棉作柄不良のため、九月には終に三百圓臺に躍進した。然し日銀貸出警戒と株式の崩落が因をなし、加ふるに阪神在荷增加、銀塊下落のため十月には終に二百圓臺に崩落した。

大正十一年　昨年の糸界は戰時相場の整理と共に、常時相場の中に一高一低を辿り、操短解除の結果生產增加を見越し兎角悲觀說に傾いてゐた。

本年に入るや、新機械の輸入据付と共に、綿糸製產高は當然增加すべき筈であつたので、尙更不安は濃厚となつた。

大正十一年	四五〇萬錘	一月生產高	一六六、〇〇〇梱
大正十年	三六六	一月々	一九九、〇〇〇

（本邦紡績創立以來ノレコード）

故に、本年末に於ける阪神倉庫在荷は四萬梱に達し、之を混亂十年末の二萬三千梱に對し、一萬七千梱からの滯貨激增を來たし、從て糸價も勢ひ悲觀の態となつた。故に市價維持の必要上操短繼續說が叫ばれたが、遂に容れられずして、自由操短の消極的制限を見るに過ぎなかつた。併し綿糸生產高の傾向は依然として變化することなく、糸價は漸次低落の度を深くした。

註、操短の如きは、大正九年の如き混亂の場合は別として、引續き之を繼續するが如きは人道上、輸出貿易上より見るも不利益なりと信ずる、此の意味より自由操短を繼續したものと思はれる。

大正十二年　大戰後斯界は生產過剩に陷り、相變らず不況の苦を嘗めたのであるが、この不況の後を受け、一般關係業

者より多大の期待を以て迎へられた本年も、十一、十二兩月が豫期の好調を示したる外、徹頭徹尾所謂整理的苦境時代を以て終始した。即ち一葉墜ちて天下の秋を報ずるに外ならなかつた。

顧みるに、本年の最高値は七月の二百八十五圓、最低値は十月の二百三圓であるが、仔細にその歩調の足跡を吟味する時、最高最低の實現は極めて短期であり、保合期間は頗る長い。

畢竟これは本年の綿糸が投機時代を去つて、整理期の實勢本位時代に推移した結果に外ならないと思はれる。而して計らずも、九月一日夫の關東大震火災により、自然的の大調節を見るに至つたのであるが、關西方面は却て生産高を增加しために前途は大に悲觀氣分に滿たされてゐた。

これと同時に本年特異の現象として認むべきものに、

一、相場の順序が戰前同樣、極めて明白截然と需要、不需要の季節的順應相場を演出したこと

二、大震災の結果關東百萬錘の紡機が破損又は潰滅し、綿糸生産の大激減を來したこと

三、延て上半期の供給過少懸念と、在荷停滯の大部分消化し得たこと

等がある。

尙本年の相場が多く綿相場本位であり、殊に最近最もその傾向顯著となつたのは、最も注目すべき現象である。故に參考のため月別の紐育米棉現物相場を表示すれば、次の如し。(單位仙)

月次	最高	最低	月次	最高	最低
一月	二八・七五	二六・四五	二月	三〇・二五	二七・四〇
三月	三一・三〇	二八・七五	四月	二三・四五	二三・〇五
五月	二八・九〇	二五・三〇	八月	二六・三五	二三・五〇
六月	二九・九〇	二七・二五	九月	三〇・七五	二五・九五
十月	三一・八〇	二八・二〇	十一月	三七・六〇	三二・二五
十二月	三七・六五	三三・七〇			

尙、關東大震災當時、關東に於ける紡機の全滅したもの實に左の如し。

會社名	工場名	錘數	織機臺數	摘要
大日本	深川工場	三四、三五二	九、〇四四	全燒
富士瓦斯	押上	五九、三四四	二一、一三六	〃
同	小山第三	四〇、〇〇〇	—	〃
相模	平塚	六三、八三二	—	倒壞
小田原	本社	三〇、七二〇	三〇〇	〃
東洋服部	王子	五、六八〇	—	〃
鐘淵	横濱	一一、三〇四	—	〃
富士瓦斯	本社第一	三〇、四四〇	—	〃
同	小山第二	五二、四七二	—	〃
同	川崎	一一、三一四	—	〃
合計		四八五、三六八	一一、九六八	
			七九、二八四	
			三〇〇	

大正十三年　大正十一、十二兩年は紡績增錘新設の時期に屬し、內地財界の挫折は供超の自然淘汰行はるべくして、帝都及關東一帶の震災が整理時代に一の動搖を來たし、次で米棉凶作續きの刺戟は原價的昂騰の波瀾となつた。

大正十三年は米棉の續落、海外爲替の暴落にも拘らず、原棉の輸入困難と、春高見込を以て三百圓臺と生れたが、二月米棉の續落は支那騷亂と共に二百九十圓臺を生み、二月の二百二十二圓を最高値とし、六月の二百七十三圓を最安値として七月迄、丸六ケ月間全範圍の往來を繰返すに過ぎなかつた。八月より九月に亘て米棉作柄不良のため、米棉昂騰し大反撥を演じた。その後爲替安のため、綿布の輸出は支那以外の新輸出地開拓せらるゝに連れ、五年振りに品薄を云爲せられ餘勢は更に十、十一、十二月の新高値に、鰻上りに棉業界の恢復を信ぜられつゝ越年した。

斯く糸界の狀勢が、あと程好化する幸を得たことは、畢竟夏季の紡績減産、爲替安、綿布の輸出好況等に因るといふの外はない。

今大正十三年に於ける海外爲替相場（正金銀行建値）瓦落の趨勢を示せば次の如し。

月次	日米爲替（弗） 最高	日米爲替（弗） 最低	上海爲替（兩） 最高	上海爲替（兩） 最低
大正八年	五一・⅛	五〇・½	四八・¼	二九・½
十二年	四九・00	四八・½	六九・½	六二・00
十三年一月	四八・¼	四七・½	六四・00	六〇・00
二月	四七・½	四七・½	六二・¼	六一・¼
三月	四七・½	四四・00	六二・00	五八・00
四月	四二・00	四〇・00	五九・½	五四・00
五月	四〇・¼	四〇・00	五六・¼	五三・¾
六月	四一・½	四〇・¼	五八・00	五四・¾
七月	四一・½	四一・00	五五・00	五五・½
八月	四一・½	四一・00	五五・¾	五四・00
九月	四一・½	四〇・¾	五四・¼	五四・¼
十月	四〇・¾	三八・½	五一・00	四六・½
十一月	三八・¾	三八・½	四九・¾	四八・¼
十二月	三八・½	三八・½	五〇・¾	四九・¼

大正十四年　本年糸價の推移を顧みるに、前年下半期以來恢復の傾向を辿り、年末に於て既に、

一、爲替低落による輸入棉花の昻騰恢復至難

二、紡績減産及綿布輸出激增延て在荷減少

三、年末にも拘らず金融緩慢であつて、貸出警戒の程度緩弛

其の他英米財界の活況を景品として、內外假需要の擡頭、思惑熱の再發となり、一月の價格は昨年來の價格を維持した。此の高値を名殘りにその後多少の波瀾は免れなかつたが、大體に於て肺患的の次第弱りの下に、十二月には二百七十圓の最安値に終り、即ち始は脫兎の如く、終は處女の如き有樣を以て、單調に幕を閉じたことは、近年稀に見る珍現象といはざるを得ない。即ち、

上半期は震災後に於ける過度の思惑、購買力の減退のために實需は極度の不安に陷り、爲替の逆調を利用し又は思惑崇りを瘵やすべき筈であつたのに、却て思惑熱再發し、こゝに年中の禍根を胚胎せしめた。三月には爲替の小高下に反動的に全く神經衰弱的になり、原棉安、生產增加等のため益〻不振となつて六月に入つた。

上半期の打擊は仲々深刻なため、下半期は至極閑散裡に經過し、指數の上から云つても七、八、九の三ケ月は保合狀態を示してゐる。然るに、果然烈風は突如として臻つた。高値保合行詰つた處へ愈〻保合下岐れの機會が到來し、又米棉稀有の大豊作のため米棉の大暴落する等、十一月には三百圓臺を割り、再び軟化の色を見せるに至つた。

斯く本年の糸價が、何故に金槌の川流れ式に終つたかと云ふに、

一、米棉は久振りに一千五百萬俵といふ大豊作を告げ、新棉の崩落したこと
二、米棉安に伴ふ原價不安の濃化したこと
三、生産額が逐次的にレコードを作つたこと
四、下半期より爲替の恢復に伴ひ、綿布の輸出を阻害したこと
五、生産增加に對して輸出が比例的に增加せず、ために供給が案ぜられたこと
六、上海、青島の紡績ストライキに次で、動亂勃發したこと
等に基因するものにして、要するに原價的に下つたものといふことが出來やう。
而して他面綿糸の需要供給の狀態如何といふに、地方農村は米穀の增收、繭高等のため購買力增進し、現實的に積極的に推移し、長足の進歩をなしてゐる。即ち一月以降の需給狀態を附記すれば、次の如し。（單位梱）

月次	産額	輸出	月末在荷
一月	一八五、〇六六	一〇、六五八	一六、九七四半
二月	一九六、六五四	一二、一四〇	一八、九八六
三月	一九六、六二七	二三、五二九	二三、八四四
四月	二〇五、八七八	三二、八〇四	三五、七一四半
五月	二〇〇、四四一	三五、四四〇	二五、〇九四
六月	二〇四、八〇三	四二、九二一	二四、三六二
七月	一九七、五六八	二一、六一六	二四、七四一半
八月	一九六、五一四	二一、三二四	二一、九二七
九月	一九六、九八五	二六、六二六	二三、三五半
十月	二一一、一四二	三三、〇九八	一八、八九五
十一月	二三〇、二九七	二三、〇三七	一八、二九三半
十二月	二三四、〇〇三	二八、六〇八	？

即ち、右表によつて明なる如く、綿糸の生産額は逐月レコードを作つてゐるに反し、阪神在荷高は逐次減少してゐる。これは內外需要の激增してゐることを、證據立てゝゐるものである。之を要するに、本年の斯界は價格的には不況であつたが、需給的には却て積極的に良化してゐるものと思はれる。

昭和元年　糸界は昨年九月以來逐月漸落の歩調を辿り、本年七、八兩月に季節的關係と在荷薄のため小騰した以外、如何なる月と雖も下落せざる月はなかつた程である。即ち本年に入るや、爲替相場の急騰のため綿糸價格も低落方面に誘はれ、而も亦前年米棉の增收以外に本年の作付反別の增加判明して、米棉相場は更に暴落したるため、糸價も之に追隨して漸落を辿つた。而して下半期に於て、七、八兩月は前述の如く、一時季節的に昂騰したが、銀塊の暴落、綿糸布輸出の減少（綿布は數量に於て增加）支那南部の騒亂等の影響を受け、一向不振の域を脫すること能はず、逐月漸落歩調に轉じた。

之を要するに、本年の糸價下落の原因は主として爲替相場の急騰、海外市況の惡化に基くものと思はれる。（註）今參考のために昭和元年と大正十四年の對米爲替の高低表を附記すれば次の如し。（單位弗）

	最高値	最低値
昭和元年	四八・㊀	四三・㊁
大正十四年	四三・㊁	三八・㊁

註　斯く本年の糸界は隨分不振を極めたのであるが、これを製品の需給狀態より見れば決して不振ではなく、生産、消費共新記錄を造つたのである。即ち昨年の生産高は二百六十七萬八千梱で、昨年に比し七分餘を增産し、月平均二十三萬梱の新記錄を示した。これに對して消費高も二百四十萬梱餘と推算され、內紡績會社が各自の兼營織布に消費したものは七十四萬梱、一般機業地の消費高として推算される量は百六十七萬梱となつてゐる。これを昨十四年に比し紡績會社の自家消費は八分三厘の增加に當り、一般消費は實に一割五分の激增である。兩方合して綿糸の內地消費は一割餘の增加であつたのである。これは綿糸の輸出より綿布の輸出へと代りつゝあるためである。

昭和二年　本年の綿糸界は妙味薄の一語に盡きてゐる。我綿業界が近年稀に見る多事多難であつた割合に、相場は極めて動きの少い平凡なものに終始した。所謂上濳り下濳りの狀態にあつたと思はれる。即ち本年の最高値は九月の二百四十圓、最低値は一月の百八十四圓にして、その最高最低値幅實に五十六圓といふ些少であるを見ても明瞭で、九月までは需給關係不良で漸落し、以後二百三十圓內外に保合つた。

今、本年糸價變動狀態を通觀するに、舊臘以來上向に轉じた糸價は、本年に入つて一段と積極化し、九月には二百四十圓の高値をつけ安値より三割方引返した。最も不況を極めた昨年十一月とその後の恢復狀況を示すに左の如し。（單位圓）

	昭和元年十一月中	昭和二年九月中
最高	一八八・〇〇	二四〇・〇〇
最低	一七〇・〇〇	二三三・〇〇
引値	一八・〇〇	七・〇〇

この恢復は主として原棉のそれに、照應したことは勿論にして、年初強氣の根據は米棉高の見越であつたが、豫想の如く年初の十二・三仙を底値として逐月連騰し、九月には廿四仙の不作相場を演じ、且作柄も事實千二百七、八十萬俵と發表されて豫想は決して誤謬でなかつたのであるが、反面に於てこれとは反對に、綿製品の需給關係が終始強氣を惱まし續けてゐた。即ち、四月に突發した金融界の混亂により內地需要が著しく振はぬ所へ、支那動亂及排日の擴大によつて、輸出も不振となり、加ふるに印度の關稅等に災されて日に月に惡化し、紡績が二日に二割三分の操短を實施しつゝあるにも拘らず、阪神倉庫在荷は遂に五萬梱に垂んとし、綿布も亦十萬梱を超えて減少することなく、米棉高に引づられながらも伸惱みを餘儀なくせられて、年初の最安値百八十四圓より正に五、六十圓方の引上げを見たに過ぎずして、米棉の昂騰に比較すれば、殆ど同日の談ではなかつた。而してその後米綿は九月の二十四仙を最高値として、今や十九仙內外を保合つてゐるが、糸價は之に追隨し得なかつた。斯くの如く、操短の效果が比較的に薄かつたのは、

一、種々の除外例が設けられたため、實際の操短率は表面の操短率よりも遙かに低かつたこと

二、深夜業廢止對策は一日も忽諸に附せられず、自然操短中にも增錘が絕えず行はれたこと

三、操短により單位當り原價を低減すべく能率の增進を圖つたこと

四、原價割高を維持し、採算が有利となつたため、決議範圍內に於て可及的增產傾向を生じたこと

等に基因するものにして、要するに今回の操短擴張は、積極的に需給を改善する望みは全くなく、今後の需給惡化を消極的に阻止する程度に過ぎない。從て相場の上への動きも、同樣に消極的であつたと思はれる。併しその效果は假令消極的であつても、兎に角、需給方面はこれで一應テコが入つたことは否まれぬ。

第三項　綿糸價格騰落の計數的考察

凡ての商品に於ける、需要供給の季節的變動は、千差萬別にして、且經濟界の狀態、大自然の勢は時として、需要關係に大なる變化を與へるがため、これが確定的判斷は甚だ困難な業である。併しながら、一の商品を選び、これが一貫した過去の需給狀態を明にすれば、必ずや或種の現象を發見し得るものである。斯くの如くして比較的妥當的なる判斷を下し得ると思はれる。

然らば、綿糸の需給變動は如何といふに、經濟界異常時に於ける生產者の特殊的手段と、機業者其の他の需要の趨勢が市場に及ぼす影響の大なるは免れざるも、かくの如き特殊的事情を閑却するに於ても、尙、常に季節的に需給に消長あるは看過し難き事實である。

斯くの如く、季節に依る需給の消長は、軈ては市場に反映すべき必然性を有するものにして、この必然性を見出さんとして、茲に統計的研究の筆を進める次第である。

卷末の價格指數を以て、需給の消長が必然的に、指數騰落を促す季節的變動を見出すに當り、先づ考慮すべきことは、特定年度に於ける季節的變動を觀察する場合に、勢ひ特殊的事情を一般的現象の如く觀察し易く、從て季節的變動の本質を探究する上に於て不適當である。即ち、數ケ年間に亘る平均一種に就てこれを求むるとすれば、固定的の弊を免れず、變轉極りなき、經濟界の影響を受けて騰落する指數即ち取引狀態を或は變則と見誤ることなきにしもあらず。故に、特定年度の特種事情を排除し、加ふるに、一平均なる固定的の弊を免るの方法として、移動平均なる五ケ年に亘る平均を、各年度を中心として前後二ケ年間の同一月の指數を基として、平均價格指數を算定し、前月の指數と對比してその騰落を見るの方法を採用した。但し、大正三年一月に就ては、同二年十二月の前後一ケ年間の、移動平均に比較して、その騰落を見るの方法を採ることゝした。

第一表移動平均が每年如何に變化してゐるか、これを見易くするために、前月指數と對照比較してその騰落を記號にて表はした。第二表が即ちこれである。移動平均指數の對前月の騰落を示せば、各年各月の騰落關係を明にすることが出來ると思ふ。

斯くしてこの兩者を對照し、克明にその變遷の跡を辿るとき、各年各月の指數の騰落に、或種の現象の存することが發見せらる。而してこの各月の騰落を分類すれば、この關係が一層明になると思はれる。第三表が即ちこれである。

これにより、

一、騰貴に就て見るに、六、七、十二月の各十一ケ年、二月の九ケ年、一、八月の各七ケ年、九、十、十一月の各五ケ年、三月の四ケ年、五月の三ケ年、これに次ぎ、四月は二ケ年の騰貴を示し

二、下落は四、五月の各八ケ年、三、十、十一月の各七ケ年、一、八、九月の五ケ年、二月の三ケ年、これに次ぎ、六

月及七月は各一ヶ年の低落を示し、十二月は全く低落を示してゐない

三、持合は前月よりの商狀の推移同一と見るべきものにして

四、九月の各二ヶ年、三、五、十二月の各一ヶ年である

前記騰落の分類に於て、騰貴、低落、保合の三種類に分類して、一定期間に於ける三者の統計を示した。併しながら保合はこれを三とすることが出來る。即ち、前月が、前々月より引續き騰貴して、その商狀を保合たる場合と、これとは全く反對に、下落の商狀を保合たる場合と、前々月より保合たる場合とである。第四表は即ちこれが分類である。

次に、第四表と第三表とを對照して各月の推移を研究するに、例へば四月の保合二ヶ年は、前月の騰貴を受けたる一ヶ年と、下落を受けたる一ヶ年に分類され、これを後表四月の騰落記號表に振當てゝ見る時、騰貴三ヶ年と、下落九ヶ年の結果を示し、同月は概して下落すべき月なるを想はしめる。其の他の月も同樣にして、その騰落事情を觀察することが出來る。

以上の結果を通觀するに騰貴の年度多き月は大體に於て、生産の減少期或は實需の大勢動きて、市場に反映せる取引の繁忙を物語るものと見るを得べし。これに反して下落の年度多き月は、生産增加期或は需要の減退期其の他の關係の逡巡狀態にあるを想はしめる。

附記、綿糸は格別の事情なき限り春、秋兩季は一般に生産額增加する傾向があり、織物業者の綿糸需要期は冬物として六月より九月迄、(十、十一月は補充)、夏物として十二月より四月迄(五月は補充)にして、撚糸業者の需要旺盛期は、十一月より三月迄、需要減退期は、四、五月より九月迄である。

一、大阪市卸賣綿糸移動平均指數

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一ヶ年平均
大正三年	八八	九〇	九〇	九〇	八七	八八	八七	八八	九一	八八	九一	九二	九〇
四年	九三	九五	九六	九六	九七	一〇四	一一五	一一四	一〇六	一〇一	一〇九	一一二	一〇三
五年	一一五	一一七	一一三	一一二	一二〇	一二八	一四五	一四七	一四一	一四二	一四四	一四六	一三二
六年	一五三	一五七	一六一	一六二	一六三	一七九	一九九	二〇六	二〇六	二一四	二〇二	二一六	一八六
七年	二二〇	二三四	二三七	二二一	二〇三	二一四	二三七	二四〇	二三三	二三七	二三六	二四四	二三〇
八年	二三八	二四八	二四五	二三三	二一四	二二七	二五二	二五三	二五一	二四五	二三六	二五五	二四二
九年	二四九	二五四	二五一	二三八	二一七	二二六	二四一	二四二	二四六	二四一	二二八	二四五	二四〇
十年	二三九	二四五	二三六	二二四	二〇六	二一五	二二五	二二一	二二五	二一九	二一六	二三三	二二四
十一年	二二五	二二九	二二二	二〇八	一八九	一八八	一九四	一九〇	一九〇	一八一	一九二	二〇五	一九九
十二年	一九三	一八四	一七五	一七六	一七五	一八一	一八九	一八八	一九四	一八七	一九三	一九六	一八五
十三年	二〇〇	一九〇	一八四	一八〇	一七七	一八三	一九一	一九〇	一八六	一九七	一八四	一八六	一八六
十四年	一九一	一八五	一八〇	一七四	一七四	一七八	一八四	一八六	一八九	二〇〇	一八七	一八七	一八四

二、移動平均指數對前月騰落記號表　(＋騰貴△下落○保合)

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正三年	＋	＋	○	○	△	＋	△	＋	＋	△	＋	＋
四年	＋	＋	＋	○	＋	＋	＋	△	△	△	＋	＋

三、移動平均月別騰落統計表

種類	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計
騰貴	七	九	四	二	三	一	一	一	五	五	五	一	八〇
下落	五	三	七	八	八	一	一	五	五	七	七	〇	五七
保合	〇	〇	一	二	一	〇	〇	〇	二	〇	〇	一	七
騰貴	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三

四、保合商狀の分類

種類	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計
騰貴	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三

×　×　×

叙上に於て、大略綿糸價格變遷の經路及その原因、並にその統計的研究を概說した積りである。以下綿業立國論に就て些か述べて結言に代へたいと思ふ。

我邦經濟界は今や沈淪の極度に達し、爲政者、學者は勿論のこと一般商人と雖も妥當的、合理的景氣恢復策を考慮しつゝあり、この經濟界の不振を救ふべく、內には產業立國、國產振興が叫ばれ、外には貿易振興、國際貸借の改善等が唱へられてゐる。昭和新日本が經濟的地位確立の重大なる秋に進んでゐる。

產業立國論に次で綿業立國論が擡頭した。綿業立國論と云ふのは、我邦の貿易が每年多額の入超を繰返してゐるがため棉花の輸入より以上に綿製品を輸出して、そのバランスを合はそうとする議論なのである。我國に於ては、累年棉花輸入額の內、綿製品輸出に依て幾許かを埋め得ると云ふに過ぎないのに、英國は綿製品輸出に依り、輸入棉花代金の幾倍を收受し、丸で我邦と逆の立場に至る程の發展を爲してゐる。我邦に於てかゝる議論が空想に過ぎないものか否かと云ふに、必ずしも不可能ではないが、急に英國のやうな具合に行き兼ねることは、遺憾ながら事實である。

最近六ヶ年日本綿品貿易統計

（千圓）

年次	棉花純輸入額	綿製品輸出額	差引入超額	一般貿易入出超額
大正十年	四二九、八六〇	三〇一、六一四	一二八、二四六	入　三七一、三一七

年次	糸	入
十一年	四二二、四五一	二五二、八五六
十二年	四八六、五二四	五三四、四八〇
十三年	五七三、五二八	六四六、三六七
十四年	八六九、五一〇	二六七、〇六八
十五年	六七五、二三一	三二二、七五七

最近六ヶ年英國綿品貿易統計　（千磅）

年次	棉花純輸入額	綿製品輸出額	差引出超額
大正十年	六五、〇五一	一七八、六六五	一一三、六一四
十一年	八一、九〇四	一八六、九二〇	一〇五、〇一六
十二年	八六、一八九	一七七、三三〇	九一、一四一
十三年	一一〇、〇一八	一九九、一六二	八九、一四四
十四年	一一四、七〇八	一九九、四〇八	八四、七〇〇
十五年	七五、七六八	一五四、三四三	七八、五七五

棉花輸入額に對する綿製品輸出額の比率　（%）

年次	日本	英國
大正十年	七〇	二七五
十一年	八五	二七八
十二年	六九	二〇六
大正十三年	八〇	一八一
十四年	六八	一七四
十五年	七七	二〇四

即ち我國にありては、棉花輸入額に對し七、八割の輸出に過ぎないのであるが、英國に於ては二倍以上の輸出額を見つゝあるのである。

而して何故に斯様に、日英間に著しい差を生ずるかと云ふに、英國の綿製品輸出は主として精製品、精加工品の高級品にして、その技術の優秀に對して支拂はるゝ額が、原料代を遙かに超過するに依る爲であつて、反之我邦に於ては粗製品を主として原料代に些少の加工賃を加へたるものを輸出するとは、甚しく懸隔した開きを生ずるのである。

然し乍ら我邦に於ても、近時粗より精へをモットーとして、精進したるがため、加工綿布は顯著なる進歩を示して來た

綿製品輸出内容の傾向　（單位千圓、指數大正十年を百）

年次	生地綿布	指數	加工綿布	指數
大正十年	一五〇、四五二	一〇〇	五三、二二一	一〇〇
十一年	一五六、一四〇	一〇四	六五、九一二	一二四
十二年	一五六、八五六	一〇四	七七、八九八	一四六
十三年	二〇五、七六二	一三七	二〇、八二五	二二七
十四年	二五七、四七五	一七一	一七五、三七三	三三〇

十五年　二二七、五七九　一五一　一八八、六七六　三五五

即ち大正十年を一〇〇と見て、生地綿布にあつて五割増なるに、後者にあつては三倍半の躍進を示してゐる。殊に右表は單に金額を現はせるものにして、大正八、九年の高値に比し昨今はその價格は非常の相違であるから、若し數量にて比較計出すれば、恐らく驚嘆すべき増加率を示してゐるであらう。

故に、今後益〻精製品の種類の増加に依る數量的發展を期すると同時に、精製、加工技術の錬磨に依つて綿業貿易のバランスの均衡を計り、更に入超を出超に轉換することは、綿業立國の理想に近づくことである。而して近來の傾向を以てすれば、少くとも第一次の理想點に到達し得る日は餘り遠いことでもあるまいと思はれる。（熊見）

第四節　絹織物

第一項　價格を左右するもの

絹織物の價格は、主として其の需給關係により支配されるのであるが間接には又一般物價、特に其の原料とする生糸價格及貨銀の高低、貨幣流通高の多少乃至其の價値等、其の他種々の關係により、左右されることは甚だ多いのであるが、其の原因の主なるもの〻内、絹織物の供給狀態を觀るに吾國に於ける絹織物の生産は、日清、日露の大戰により急激に増加し、其の後漸増の傾向を持續したが、大正三年歐洲戰爭と共に、一時頽勢を現し此の年一億餘圓の産額を計上したが、前年に比し實に二千餘萬圓の減額であつた。其の翌四年常調に復し、爾後引續き異常の好調を呈し、歐洲戰爭終熄の大正八年には六億七千三百餘萬圓と云ふ尨大な數字を示したが、翌九年大恐慌の襲來に因り急轉し、此の年二億一千萬圓の減額となり、爾來沈滯不振の難關を經て今日に及んでゐるのである。又吾國絹織物の輸出は、日露役後の明治四十年には、三千百餘萬圓に激増した、其の後は一進一退を續けつ〻漸次増加の傾向を辿り、大正三年の歐洲戰爭と共に、一時減少を見たが、翌四年以後引續き好調に轉じ、歐洲戰爭終熄後の大正八年は、一億六千二百餘萬圓と云ふ巨額の數字を示した。翌九年財界パニックの後を受け、其の翌十年には戰後貿易の不振となり、八千九百餘萬圓に激減し、十一年には一時回復したるも、大正十二年には關東の大震災の爲に再び頽勢を示し、爾來今日に至るまでには、多少の増減を經て漸増の歩調を續けてゐる。

今本邦絹織物の生産並に輸出高を示せば次の如くである。

年次	生産額	輸出額	生産額ニ對スル輸出額ノ割合
	千圓	千圓	%
大正元年	一一七、四二六	三〇、一〇一	二六
二年	一二〇、三二七	三九、三四九	三三
三年	一〇二、四八二	三四、〇二三	三三
四年	一二一、六八七	四三、二一九	三六
五年	一六〇、〇八四	五〇、六三二	三二
六年	二一九、七二三	六二、八五八	二九
七年	三七七、八九八	一一七、五三三	三一
八年	六七三、九三七	一六二、四七六	二四

九年	四六七、三九二	一五八、四一六	三四	
十年	五〇三、一六四	八九、九三六	一八	
十一年	四二一、五五一	一〇七、九二八	二六	
十二年	四〇五、一五一	九二、三二九	二三	
十三年	四二五、七二四	一二五、八四〇	三〇	
十四年	四一三、七九四	一一六、九八五	二八	
昭和元年	四二六、九一四	一三三、〇七一	三一	
二年	四一一、一〇四	一三九、六一五	三四	

次に需要關係に就いては據るべき調査もないが、生産高より輸出せるものを控除すれば、殘りは國内の保留高である。國内に存留したる絹織物を以て、直ちに國内需要に當てたるものなりとして之を見る時は、推察の上に誤りなき能はずと雖も、吾國の消費に關しては特別なる調査を缺くを以て、國内に存留したものを直ちに消費と看做して、推論の上に大なる誤謬を來すが如き程度のものではなかろう。明治四十年より昭和二年に至る二十一ヶ年に、保留したる絹織物は平均生産高の七二%に相當してゐる。

又絹織物の價格に、間接關係を有すものゝ内、主なるものを擧ぐれば、

生糸價格と絹織物　生糸は絹織物の原料として、内地に於ける重要商品にして、輸出品として大宗たるの地位を占むるを以て、其の價格の高低は、内地經濟界の景氣に影響するは勿論、外國特に米國經濟界の景氣に、左右せらるゝこと尠からず、尚、近來吾國對外信用の象徴たる、爲替相場の變動常ならず、從て生糸價格の變動甚だしく延いては之れを原料とする、絹織物の生産費を左右する重要なる原因となる。

各季節と絹織物價格　吾國に於ける絹織物の種類は、數百種の多きに上り、使用目的も種々異なるも、概ね其の需要は季節物にして、春、夏、秋、冬の各季節に應じるものには其の季節により、一定の變動あるを免れない。普通の狀態に於ては、取引の初期に於て比較的高價を稱え、取引の最盛期に最も高く、補充取引まで漸次安値に陷るのが、例であるが、最近數年間に於ては、却て初期より最盛期へと漸落を續けてゐる。之れは大正十年以來財界の不況によりて、絹織物の需要不振にして市場は常に滯貨の狀態にあり、從て價格は取引の最盛期にも不拘、漸次低落し、之れを常例とせる爲一般取引の手控え、又は見送等の商狀となり、益〻價格の低下を助長するのである。

又年内取引を繼續される絹織物と雖も、年内に於て絹織物の、最も需要の多い冬物、春物の取引當時は、同一商品も一般に高價となるのである。

機業地と價格　歐洲戰爭以後に於ける、吾國未曾有の財界の好況に乘じて、生産能力を極度に擴張したる機業地に於ては、爾來一般購買力の減退せるに不拘、生産の調節之れに伴はず、各機業地組合等に於て、之れが對策を講じんとするも大小企業家の統制ならず、依然として市場は生産の過剩を告げ、絶えず絹織物價格を壓迫してゐる。

人造絹織物と絹織物價格　最近に於て人造絹織物の、消費高並に生産高の、急激なる增加は絹織物の領域を侵蝕し、間接に絹織物の價格を低下せしむる原因となりつゝあり、今後人絹製造技術の進歩と共に其の短所はさらに一層範圍を縮少され、其の結果絹織物の價格は、人絹織の爲に絶えず抑制せられるものと、見るべきである。

一般物價と絹織物價格　大正元年より昭和二年に至る、各年に於ける吾國絹織物の價格と、一般物價の關係に就て觀る時は、大勢に於て一般物價の趨勢と、同一歩調を示せるを知るのであるが、尙詳細に觀察すれば、自から異なるものあり次に調査の各年に於ける絹織物の價格に就て述ぶべし、今絹織物の研究の對象として大阪市に於ける甲斐絹一匹の、卸賣價格を基準とする時は、其の高低は次の如し。

	平均價格	最高價格	最低價格	最高最低ノ差
	圓	圓	圓	圓
大正元年	八・七七	九・五〇	八・三〇	一・二〇
二年	八・八八	一〇・〇〇	八・〇〇	二・〇〇
三年	八・七八	九・五〇	八・〇〇	一・五〇
四年	八・三八	九・五〇	七・五〇	二・〇〇
五年	九・六二	一〇・三〇	九・二〇	一・一〇
六年	一〇・八三	一五・〇〇	九・〇〇	六・〇〇
七年	一三・四五	一八・五〇	一〇・四五	八・〇五
八年	二〇・四九	二七・五〇	一二・〇〇	一五・五〇
九年	二〇・七四	三一・九〇	一三・八三	一八・〇七
十年	一七・二〇	一八・三〇	一五・六七	二・六三
十一年	一七・〇八	一八・六六	一四・八〇	三・八六
十二年	一八・五四	一九・三〇	一七・五〇	一・八〇
十三年	一六・五七	一八・五七	一四・三七	四・二〇
十四年	一五・七七	一七・六七	一四・二五	三・四二
昭和元年	一四・二七	一五・六〇	一一・九三	三・六七
二年	一一・二二	一二・四三	九・八三	二・六〇

次に大阪市に於ける甲斐絹一匹の、卸賣價格の高低を基準として、之れに直接關係を有する、一般財界の事情を述べ、尙絹織物の原料たる生糸、並に一般物價（全國平均）をも研究の對象とし、互に如何なる關係にあるかを述べんとす。

第二項　絹織物の價格

大正元年に於ける絹織物の價格は、三月より六月に至る需要閑散期に、比較的安く、七月より九月に至る冬物取引の最盛期に、割高を示したのみで、價格の變動極めて少く、甲斐絹一匹に對する年内最高最低の差、僅に一圓二十錢にして至極平穩の内に終始した、之れは一般財界の事情にも因るが、本年は絹織物の生産額は、昨年よりも五百七十六萬圓の增加を見たるに不拘、輸出額は四百二十三萬圓の減少を示し、明治四十二年以後に於ける、輸出の最も不振な年であつたが爲に、内地の保留高は九百九十九萬圓の增加となり、之れが多少價格に影響したと、觀ることが出來るのである。

大正二年の絹織物價格は、一般物價と同じく、昨年より平均一%の騰貴を示してゐる、殊に生糸は七%の騰貴であつた。一般物價が年初以來下落歩調にあるに不拘、絹織物が五、六月の需要閑散期を除いては、順次高潮を續け、特に七、八月に於て高値に進んだのは、冬物需要期に入つたのと、生糸の相場四月以來九月まで漸騰し、就中七月より九月まで特に高かりしに因るものゝ如く、尙本年に於ける絹織物の生産額が、昨年よりも二百九十萬圓を增加し、輸出額九百二十五萬圓の激增を示したる爲、内地保留額の減少が價格に好影響を及ぼした一因とも、觀ることが出來るのである。

大正三年に入つても尚、一般物價は殆ど毎年漸落を續けたが、絹織物は七月まで、生糸は六月までは、漸騰したるも、七月には歐洲大戰の勃發となり、物價は一齊に下落歩調を辿つた。其の内八、九兩月に於て、絹織物及一般物價が僅ながら値を戻した、之れは政府が戰爭によりて蒙むる、一般産業界の打撃を憂慮し、寛大なる貸付を爲し、極力救濟に努めたに依るものゝ如し、七月歐洲大戰開始當時に於ける、人心の動搖は、殆ど世界を擧げて闇黑たらしめ、戰爭三年繼續説さへ傳へられ、前途果して如何に推移するであらうかに付ては、一般が可なり極端なる悲觀人氣に囚はれ、各方面の事業が急に收縮せられた、當時一般の財界は、輸出貿易は杜絶の狀態に陷らんかの懸念深く、金融市場漸く梗塞し、金利は昂騰し、八年我政府が獨逸に對して宣戰を布告するや、青島攻撃の開始となり、御用船の徴發は内地の荷動きを著しく減じた政府は正金銀行をして對外爲替の調節を圖らしめ、日銀をして一般産業界に對しては、極めて寛大なる貸付を敢行せしめ大藏省預金部に於ても、出來得る限り資金を放出して、極力救濟に力めたものである、從て比較的一般經濟界は平靜を保ち、物價も一齊に小安かつた。絹織物に於ても不安人氣の影響を受けて、生産及貿易は不振を免れなかつた。即ち生産額は昨年より一千七百八十四萬圓、輸出額五百三十二萬圓を何れも減少し、從て内地保留額は一千二百五十二萬圓減少したことは、當時の事情を雄辯に物語つてゐる。

大正四年は昨年以來一般物價は不況を續け、漸次低落歩調を辿り、本年は明治四十二年以來の安値に陷ちた絹織物は一月、生糸は六月、一般物價は七月何れも最低であつたが、十一月以後は歐洲大戰の好影響を受けて、物價は奔騰に轉じたのである。戰時相場の最高潮は、大正五年八月から十二月中旬の間で、此の期間こそ所謂白熱的時期であつた、而して此の白熱的市況は、六年七、八月及八年九年の高値に比すれば、尚及ばざる如きも、人氣としてはより以上の市況を呈したのであつた、夫れは一般金融は緩慢となり、日銀の利下發表は四月及七月の兩度に於て、行はれたによるのである、殊に證券市場に其の影響が甚だしく、生糸も前年より平均三七%の騰貴を示し、絹織物及一般物價は、何れも一四%の騰貴であつた。此等の原因に依りて、絹織物の生産は昨年よりも三千八百四十萬圓、輸出七百四十一萬圓の激增を示してゐる。

大正六年の上半期中に於て、約二億六千萬圓の貿易出超を示し、金融緩慢と海外正貨の增加等は、一般財界を刺戟すべき相當の材料として觀られた、日銀は三月利下を行ひ一錢四厘とした、又一般事業界の内でも、特に紡績及海運事業に、非常に好況を齎した、尚本年米國の戰爭參加に好影響を受けたのである。一面貿易は八月末に於て、三億八千萬圓以上の大出超を示し、正貨は二億圓の入超、通貨は之れに伴れて膨脹した、八月三十日には物價調節令が發布せられた、亦九月には米國の金禁輸令が布かれ、本邦に於ても同令の發布を見るに至つた、而して十二月には船舶管理法が發布されると云ふ有樣で、悲觀材料は續出したが、物價は漸騰した、絹織物は七月には、十五圓の新高値となり、年内最高、最低の差は六圓と云ふ未だ曾て無き變動相場が現れ、生糸及一般物價も七月は新高値に躍進し、生糸は絹織物と同じく、年末に從ひ再び落調に轉じたが、一般物價のみは益〻續騰を續けたるは、軍需品としての綿織物及鐵類等の暴騰によるものにして銑鐵の如きは昨年より二倍三分八厘の騰貴を示してゐる。

大正七年は有名なる米騷動のあつた年である。財界は引續き通貨の膨脹を來し、大正三年末三億八千五百萬圓の兌換券は、本年一月末七億四千五百萬圓となり、物價は騰貴して戰前の二倍に當り、不健全なる投機、思惑の旺盛等にて、米價

第四節　絹織物

も連月暴騰し、四十三圓六十錢と空前の高値に躍進し、遂に米暴動の突發を見たのである。絹織物の相場も動搖常ならず年內甲斐絹一匹の値幅は八圓にして、昨年より平均二九％の騰貴である、生糸一六％、一般物價は五七％の騰貴を示し、一般物價は調査期間中の最高である。

絹織物の生産は昨年よりも一億五千八百十八萬圓、輸出五千四百六十七萬圓何れも激增してゐる。一般物價及生糸は年內通じて、殆ど漸騰步調を續けてゐるが、絹織物は不規則なる騰落を示したるは、購買力の旺盛による品物拂底及買占、賣惜等の思惑が、價格を刺戟して急騰落を演じ、絕えず不安定の狀態に置かれたに因るものである。

大正八年二月から愈〻戰後大相場の展開せられたが、一般世間は戰爭の終局に悲觀人氣漂ひ、內にも何となく手堅いものがあつたのは、通貨の大膨脹漸く其の形跡著しく、四月下旬から五月へかけて、益〻其の傾向顯著なるものがあり、亦一面に於ては、物價の騰貴は日を逐ふて著しく、此の間の消息を具さに物語るものであつた。

絹織物の相場も、年初以來躍進又躍進、殆ど其の停止する所を知らざるもの〻如く、年內甲斐絹一匹の値幅は十五圓五十錢を示し、十二月は一月よりも二倍二分の騰貴にして、之れを昨年と比較すれば平均八一％、生糸七〇％、一般物價三五％の騰貴となる、絹織物の生產高に就いて觀るも、昨年より二億九千六百四萬圓、輸出四千四百九十二萬圓の激增にして其の率七割八分の多きに達した。

年內絹織物は終始騰貴を續けたるも、早春一般世間は戰爭の終局に、物價は一般に軟弱を免れなかつたが、何となく手堅いものがあり、年末までは漸騰を續けた。

各年に於ける甲斐絹一匹の平均價格の最高は、大正九年の二十圓七十四錢にして、年內各月の最高は三月に於て三十一圓九十錢を示し、大正元年より昭和二年に至る十六ケ月中、各年の最高を示すと共に、年內に於ける價格の値開きも、十八圓七錢と云ふ最も波瀾の多い年であつた。三月に於ける最高値段三十一圓九十錢が、其の翌年には二十二圓となり、七月には早くも十三圓八十三錢と云ふ崩落振りにして、百雷の一時に落ちたる如く、重要商品は相踵いで崩落し、銀行の取付は頻々として諸方に起り、人心動搖は殆ど其の極に達した。而して其の反動の原因に就ては、一に銀行の態度の急變に因るもので、其の主動者は日本銀行の貸出停止にあつた、即ち一般企業熱は殆ど停止する所を知らず、資金の需要は實に巨額に上つたが爲に、銀行は其の要求に應じきれない、如何に『確かな擔保がありとしても、融通を斷る外はない』と云ふ銀行家の態度が反動勃發の端緒となり、之が餘りに唐突であつたことに因るのであつた。兌換券は七年五月の六億一千萬圓から、八年六月には九億一千八百萬圓、十二月には十億一千七百萬圓の增發となつた、其の結果內地の物價をして奔騰せしめ、延て國民の投機熱を勃興させたのである、從て輸出は却て減退して、輸入は增加することゝなつた、茲に於て日本銀行は物價の暴騰に驚き、投機熱の狂的熾烈、海外貿易の逆調に吃驚して、俄にか態度を急變したのが『最早や貸さぬと』なつたのである、八月より一應落付き模樣となつた、それは當時政府が、徹底的に救濟すると云ふ掛聲が、大に活氣を附けたのと、値頃が安くなつた爲に、人心も稍平穩に歸し、金融市場も稍周圍の事情を樂觀して、落付き氣味となつたからであつた。茲に於て政府は日本銀行に命じて、資金を放出し各市場を救濟することを決意した、即ち其の內鑑糸救濟資金としては一千萬圓を融通し、尙其の他政府自ら預金部より帝國蠶糸會社へ、五千萬圓の低利資金をも貸付け

大に救濟に努めた結果絹織物の價格は、年末に掛けて回復歩調となつたが、一般財界は六、七月より十月に至る間は混亂の裡に經過した、而して一般物價は漸次安値に陷ちた、夫れは市中銀行が專心資金の回收に努め、人氣の安定するに伴れて日銀に對する負債を償却したから、自然日銀の貸出は減少し、通貨は自ら收縮した、而して通貨の收縮は、株式及一般商品をして低落せしめる誘因となり、戰後特に暴騰した絹、綿、毛糸等の外、砂糖及肥料等は、信用通貨の急激なる收縮に、一時に投げ出さなければならなかつたから、意外の大慘落を演じたのは、亦已むを得なかつたのである。一般物價は順次安値に崩れたが、絹織物及生糸は九月頃から反動戻しを示したが、大勢は依然として軟弱味を去らない、乃ち九年三月の大瓦落を境として、長期の不況時代に轉じたものとの觀測は、一般に信ぜらるゝ有樣となつたのは、當然の成行である。

絹織物の生產に觀るも、昨年より二億六百五十五萬圓、輸出四百六萬圓の減少となつた、本年の生產高は、昨年の六割九分に相當する激減である。

絹織物は相當慘落したるも、反動戻しも手傳て、昨年より尙平均二%の騰貴となり、一般物價は下げ足比較的遲く三%の騰貴を示し、生糸は相當反動高もあつたが、落潮の激しかりし爲に一九%の下落を見た。

大正十年に入つては、聊か樂觀に傾かんとするには、多少の理由がないでもなかつた、則ち泡沫會社は、既に篩にかけられて了ひ、金融も想ひの外緩慢狀態となつた、加之銀行の嚴重なる警戒に、手許の遊金は潤澤となつたる折柄、一面囊きに放資した英國々庫證券及大藏證券の約二億二千餘萬圓が、本年春頃までに續々償還せられ、正貨は著しく增加を示した爲、市中金利の如き、一流商業手形一錢三厘まで低下した等は、自然財界をして樂觀に傾かしめた理由の、主なるものであつた。

下期に入つては多少反動的好況を、實現すべきかの振合なきにあらざりし處、時恰も大阪の巨商某氏一派の、株の買占は終に失敗に歸した等のこともあつたが、當時一般業界にあつては、樂觀氣分の漂ふものなきにあらず、此の時の戻り人氣には、稍樂觀に傾きかけた爲、取引上各方面に多大の損害を招いたことは、當時世評のあつた處である。

綿織物は上半期までは、安値の傾向にあつたが、後半期に於て回復歩調を辿つたのは、冬物の需要期に入れると、生糸高の影響に因るものである。生糸、一般物價は年初以來大體に於て、小騰を續けたが昨年の暴騰暴落の跡を受けたる爲、綿織物は昨年より四〇%、一般物價は四一%、生糸は四六%の下落を示してゐる、絹織物の生產は昨年より三千五百七十七萬圓を增加せるに、輸出六千八百四十八萬圓を激減せるは、戰後貿易界の、不況著るしきものあるが爲である。

大正十一年には、某氏一派の買占が二月末の受渡に至り、其の受株代金が百三十銀行に於て、不渡處分に附せられたのを動機に、金融市場に小恐慌を來たした爲、破綻銀行さへ續出せしめ、某商業銀行は閉店し、關西金融市場は混亂狀態に陷らんとした、此の時政府は市場關係者の要望により、日銀をして約二億圓、預金部からは三千萬圓を放出して、其の動搖の防止に力めた、如斯して上半期は經過したが、下半期に入つて商品市場は一般に悲觀人氣が傾き、米界に於ても、本年三十六、七圓に生れたる米價は前半期は强保合であつたが、其の後好順氣と、證券安其の他にて正米先づ崩れ二十四、五圓に慘落し、一般物價は春以來金融市場の小恐慌に禍されてより、概ね漸落歩調を辿つたが、生糸は三月以後漸騰した

結果、絹織物も其の影響を受けて強調を續けた、之れを昨年と比較すれば、絹織物及一般物價は平均一%安であるが、生糸は四三%の反撥を示してゐる。

絹織物の生産は昨年より八千百六十一萬圓の減少となり、輸出のみ一千七百九十九萬圓の增加を示したるは、昨年の激減を緩和したものと云ふべし。

大正十二年は關東の大震災のあつた年で我邦有史以來最大の悲慘事であつた。經濟界は一時極度の混亂に陷り、各地の市場は取引停止の已むなきに至つたが、當時井上藏相は經濟界の復活を急務として、商品市場を一日も早く開市すべしと、忠告したと傳へられて以來、杜絶した經濟機關の善後策は進捗し、漸く市場が開かれたが、存外買物輻輳して活氣を呈し、復興材料に要するものは一齊に騰貴し、市況は意外に繁昌を極めた。生糸は四月まで、一般物價は五月、絹織物は六月まで漸次高値に進んだが、其の後八月まで一齊に安かつたが、絹織物の七、八月安値に陷たのは、生糸安に因るものであらう、九月より震災の影響を受けて諸物價は再び昂勢に轉じた、之れを昨年に比較すれば、絹織物は平均一六%、生糸二五%、一般物價二%の騰貴であつた。吾邦未曾有の災害により、絹織物の生産及輸出は不振であつた、即ち生産は昨年より一千六百萬圓、輸出一千五百六十一萬圓何れも減少を見せた、殊に輸出は橫濱の潰滅により、著しく減少したるは明である。

大正十三年の一月はまた震災の復興氣分橫溢し、勘からざる救濟資金の放出に、自然兌換券の膨脹となり、乃ち震災直前に於ける最多額、十四億六千萬圓の兌換券發行高は、十三年一月には、十五億九千四百萬圓に上り、貸出も亦十二年九月最高五億九千四百萬圓なりしものが、十三年一月には七億七千九百萬圓といふ數字を示し、從て諸物價の騰貴となり、一方輸出の減退と、輸入は多大の超過を招くに至つた、加之未曾有の大震災に、我財政的信用は、海外に於て甚しく失墜したため、爲替相場の低落日を逐ふて著しく、正貨亦從て減少の傾向を呈したのみならず、清浦內閣の後を承けた加藤內閣は、財政の緊縮を標榜するに至り、市場は俄然悲觀人氣に襲はれたために、物價は漸次低落五、六、七月に至つて一段の不況を呈した、併し上半期末の日銀貸出は、四億三千萬圓、兌換券發行高四億一千萬圓の大收縮を見るに至り、貿易入超六億七千萬圓といふ巨額は、我金融界に取つては大なる壓迫なるは勿論、商品市場を抑壓したことは當然であるが、政府多額の救濟資金の需要不振の爲、金融市場は緩慢を呈したから、割合に商品市場は小康狀態を維持した、下半期にあつて、八、九月頃より除々好轉の模樣を示したが、支那に於ける內亂の勃發により、一時我財界に危惧の念を生ぜしめたが程なく鎭靜した、次で英國の勞働黨內閣倒れて保守黨內閣代り、米國では共和黨大勝してクーリツヂ氏大統領に再選せられ英米財界に安定を與へ、延て本邦に對する影響としても、生糸、繭、綿糸布、米等漸次高騰したが、因より大したものではなかつた。年末に接近するに從て反撥的市況となり、十一年正金銀行の金地金賣却價格が、爲替相場に據ることに變更されたに依り、綿糸、米穀、生糸等の各市場が反騰を告げたのである。今一ケ年中に於ける物價の平均を見れば、絹織物は昨年よりも二二%、生糸三九%に下落した、之れは爲替安の影響にも因るべく、一般物價は反對に九%の騰貴であつた、生產は昨年よりも二千五十七萬圓、輸出三千三百五十二萬圓を何れも增加したが、特に輸出に觀るべきものあるは昨年の震災に於て橫濱港の輸出一時杜絶の狀態に陷つたこと及爲替の低落等が輸出を促進せることは明である。

第四節　絹織物

大正十四年は環境不景氣深刻なるに拘らず、一時春高氣分一般市場は活況を呈したが續かず、二月より三月に入つて益〻悲觀人氣に包まれ、漸次安値に陷ちた、四月に入つて日銀利下の發表となり、上半期末支那の紡績罷業の暴動化を傳へたが、單に一時の杞憂に過ぎないで、却て期正米の奔騰となり、金融は益〻緩慢を招き、貿易の回復、綿糸の擡頭、生糸の強調、米綿の底入模樣等續出、大勢昂騰の裡に經過した。

下半期に入つては日銀第二次利下發表の噂もあつたが、政界の不安に禍せられて市場は活氣に乏しく、八月には我政府の正貨現送に、甚しく金融の前途は懸念せられ、財界不安の空氣益〻濃厚となり、市場は一般に悲觀に傾いた、十月の外國貿易は、差引六千百七十九萬圓の出超の結果は、自然貿易の樂觀說を傳へられ、農村景氣の樂觀等、物價は概ね漸騰步調を辿つたものであるが、漸く年末に接近するに從ひ、一般消極人氣に偏し、自然頭重の商狀を免れなかつた、夫れは紐育準備銀行の利上げの影響や、對外爲替の急遽回復して四十三弗突破の勢ひを示せる爲、事業收益の低下を稱へられ、物價は一般に安値を免れなかつたのである。之れを一年間通じて觀る時は、物價は五、六月頃までは順次安く、九、十月頃までは回復したが、以後再び安値に陷ちた、之れを昨年と比較すれば、絹織物九%下落したが、生糸は一八%、一般物價は二%の騰貴を示した、絹織物の生產は昨年よりも一千百九十三萬圓、輸出八百八十六萬圓何れも減少を見た。

昭和元年の新春と共に、對米爲替は四十四弗を突破し、續いて四十五弗と順次新高値に躍進し二月には早くも四十六弗半となり、之れが延ては吾國生糸、綿糸界に及ぼす影響を懸念せられ、爲替高の對策として、政府は正貨の現送中止を發表したる爲に、人氣は落付模樣となつたが、三月に入つて米棉、綿糸は一段安く、貿易の入超、爲替の反落となり、現下の經濟事情は對外爲替の動搖に依り、動もすれば安定を缺く狀態である、上半期末の重要商品の市況不振にして、貿易の入超等に依り物價は漸次低落した、後半期に入つて特殊銀行の利下決定し、電力會社の外債成立に好感を與へ、綿糸は奔騰し、爲替も最近漸騰して遂に四十八弗臺に進んだ、支那動亂の前途不安及之に加ふるに、出超期に入つて各月入超を續け、一般物價漸落步調を辿つた。

十月には突如日銀の利下發表せられ、前途好望の折柄銀塊安、爲替高となり、米綿の增產の壓迫に綿糸、生糸及其の他物價は小安く、年末接近と共に政局の前途不安、殊に聖上の御不例に依る人氣の沈滯は免れ難く、內鮮銀行の利下發表により、金融樂觀人氣を高めたが、物價は依然として漸落した、絹織物も四月までは漸落したが、五月より七月まで春の値頃迄回復したるも、八月以降再び慘落した。之れを昨年と比較すれば、平均一七%、生糸三三%、一般物價二二%の何れも下落であるに不拘、生產は昨年より一千三百十二萬圓、輸出一千六百九萬圓の增加を示した。

昭和二年　昭和改元第一春のことゝて、一般人氣更新の萌しあり、順調に經過を見せたが、三月には北丹後の震災に引續き、東京銀行休業問題の惡材料頻出し、又定期市場の頓挫を來し、事態漸く一變し、四月は本市某銀行の休業事件發生し續て全國的金融恐慌を惹起し、遂にモラトリアム令の發布を見、事態容易ならざる爲、當地織物同業組合は決議を以て、產地に對し盟休斷行、投賣防止の勸告を爲し、一齊に二週間乃至三週間の盟休を斷行した、五月中旬以後は辛じて生產の舊復を見たが、夏物の賣行不振で殘品豫想外に多く、相場の落勢滔々として止まず、一般取引に對する信用狀態の收縮、資產の偏在等、財界の不況深刻化すると共に、當業界は至極沈靜に赴き、取引一向進捗せず生糸及繭安相續き、金融關係

と相俟て人氣惡化して暴落し、八月甲斐絹一四九圓八十三錢を稱へた。

九月は前年末よりの綻りを受けたると、急な寒さの爲に冬物の需要頓に增加し、加ふるに品薄の折柄とて相場は漸騰歩調を辿つたが、十月に入り一進一退を續け、十一月後は集散地の不振に漸落し、十二月に入つて産地は既に晩季に入り、需要地も閑散となり、氣配も鈍重であつたが、月末に至り初賣出し用取入れの一齊となつた爲、小綻りの狀態であつた。物價は漸次下落の傾向を續け、之れを昨年と比較すれば、絹織物平均三五%、生糸一五%、一般物價三%の下落を示した。

絹織物の生産は昨年よりも一千五百八十一萬圓の減少となり、輸出は反對に六百五十四萬圓を增加せるは、絹織物の價格著しく下落せるに因る所勘からざるべし。（花井）

第五節　石　炭

第一項　大阪の石炭價格

我國産業は日清日露兩役の刺戟を受け、更に歐洲戰爭を經るに至りて、愈〻産業革命の完成を告げた、從て工業の原泉たる石炭の需要進展と共に、石炭價格の著しき躍進も、亦此の産業革命の結果と見るべきである。

大正元年以降大阪に於ける石炭價格の變遷は、次の如くである。

豐前上塊一萬斤

	最高	最低
	圓	圓
自大正元年至同四年	五八・五〇	四一・〇〇
自同五年至同九年	二四〇・〇〇	四五・〇〇
自同十年至昭和二年	一八六・〇〇	一二〇・〇〇

次に大阪の炭價の趨勢を、東京及産地の夫れと比較すると、次の如くである。

炭價指數比較表

年次	大阪 指數	大阪 增減	東京 指數	東京 增減	産地 指數	産地 增減	物價(大阪) 指數	物價(大阪) 增減
	100	—	100	—	100	—	100	—
大正元年								
二年	一〇六	六	一一三	一三	一〇六	六	九八	(一)二
三年	一一三	一六	一一四	一	一一五	九	九二	(一)六
四年	九八	(一)一四	一〇九	(一)五	一〇一	(一)一四	九八	六
五年	一一二	一三	一一三	一三	一一三	一二	一一〇	三
六年	一七一	一五〇	一二七	一四	一七〇	五八	一五七	三七
七年	三七二	一〇一	三九七	一三	三三六	一五六	一〇八	五一
八年	四三三	五〇	四一三	一六	四五三	一二六	二五三	四五
九年	四六四	四三	四三三	二〇	四五七	五	二七四	二一

十年	三八	(一)二六	三九	(一)二六	三四	(一)六〇	二七	(一)八〇	三四	(一)六〇
十一年	三四	(一)一四	二九四	(一)一四	二九	一二	三一	(一)三	三一	(一)三
十二年	二八三	(一)三三	二九四	(一)六	二五六	(一)六	二九五	(一)六		
十三年	二六六	(一)一六	二九〇	(一)三七	二四〇	(一)一六	二〇七	二		
十四年	二七〇	四	二六三	(一)一三	二三五	(一)一五	一九五	(一)一三		
昭和元年	二六七	(一)三	二六一	(一)二	二三五	—	一九三	(一)三		
二年	二六九	二			二四五	一〇				

即ち程度の差は認むべきも、大阪、東京、產地共に同一傾向にして、大體我國諸種の事情は、亦我大阪に於ける事情と看做し得るのである。

只關東震災により、東京、横濱地方の石炭消費力、年額三百二十五萬噸が失はれたことは、前記比較の場合注意すべき點である。

物價は所謂物價方程式に從て、變動する場合もあるべく、又各箇の貨物は貨物其の物の狀態によりて價格の變動を生ずるものである、故に兩者變動の本質の差は、亦結果の差を示すので、大阪の石炭價格及物價に付圖表を描くに、大正九年を山とする非對稱形が出來、而かも兩者に、相違の箇所あるを發見するのである。

第二項　石炭價格の季節的變動

石炭價格が夏季に比し、冬季に於て上騰することは、常識上當然のことである、從て石炭價格を見る上に於て、其の變動は特殊の經濟事情に由るか、又は單に季節的變動に過ぎないかを、檢討する必要がある。

而して大正十二年乃至昭和二年の平均に於て求めたる、季節變動の常型は次の如くである。

石炭價格季節變動表

（自大正十二年至昭和二年平均）

四月	九九・六	一〇〇・〇
五月	九八・九	
六月	九七・四	九七・二
七月	九六・七	
八月	九六・〇	
九月	九七・四	九八・四
十月	九八・一	
十一月	九八・一	
十二月	九九・六	一〇〇・六
一月	一〇〇・三	
二月	一〇〇・三	
三月	一〇〇・三	

第三項　大阪の石炭事情

工業都市たる大阪は、又石炭の大消費地で、昭和二年の推定消費高を、全國推定消費高と比較すれば次の如く、

	石炭消費總量	一方里ノ消費高	人口千ニ付消費高
全國	二七、七〇八千噸	一、一〇一噸	四五二噸
大阪市	二、一三三	一七七、七五〇	九四四

一方里に對する大阪市消費高は、全國のそれに比して約百七十倍である。

現在我國の出炭狀況は三千三百萬噸內外で、その昭和二年の產出額を地方別にすれば、九州炭首位で七割弱を占めてゐる、

地方別石炭產出量（昭和二年）

	總量	割合	大正元年割合
北海道	六、五三八千噸	一九%	一〇%
九州	二二、〇一二	六六	七六
其の他	四、九八一	一五	一四
合計	三三、五三一	一〇〇	一〇〇

從て大消費地たる大阪へ移送さるゝ石炭が、主として九州炭であることは當然のことである、更に大阪九州間は瀨戶內海を通じて、運輸上至便の地位にある、かゝる事情からして、九州炭は海運で大阪に集中し、その小部分は大阪から鐵道で、各小消費地に分布されてゐるのである。

海運發送地別石炭移入高（昭和二年）

	到着數量 千噸	割合
九州——大阪	二、二〇五	九二%
北海道——大阪	一八九	八
其の他——大阪	八	〇
小計	二、四〇二	一〇〇
殖民地——大阪	八六	—
外國——大阪	四九八	—
合計	二、九八六	—

而して九州から來る石炭が全體の九割を占めてゐるが、之れは大正初年頃も、之と同一狀態であるから、最近九州炭の出炭割合が、減少しつゝあるに拘らず、大阪に於ける九州炭の勢力は、決して衰えておらない證據である。而して九州より來る石炭の七割は、若松港から積出されたものである。

次に船舶で若松から大阪に這入る石炭は、大正二年には、汽船一二%、帆船五七%、曳船三一%、大正七年には、汽船一二%、帆船四八%、曳船四〇%である。而して昭和三年十一月中に、各地方より大阪に移入された石炭は、曳船及帆船によるものが、汽船によるものと殆ど伯仲してゐる、その船數に至りては前者は後者の約五倍である。

	船數	石炭總量 千噸
汽船による移輸入高	一二七	一六四

曳船、帆船による移入高　五九一

而して右の內汽船による外國よりの石炭輸入高は、概數四萬五千噸であるから、內地各港から來た石炭は、汽船と和船と半々である。斯く小運送によるもの多きは、大阪に小石炭商の多きを物語るもので、安治川、木津川等に到着した石炭は、陸揚げをなさず、船から船へ賣捌かれる小口取引が相當に多く、是等小口商人の敏活なる動作は、大阪の炭價を左右する場合もあるのである。

然し乍ら又一方大口需要者は、直接產地の石炭商或は、生產者と取引するものあり、その供給契約は普通三、四年位であるが、十年の長期に亘るものもある。

第四項　工業の發達狀態

大正三年春に於ける石炭價格は、日露戰役以來の昂騰であつた、而して歐洲大戰による工場工業の完成は、更に一層の騰貴を促したのである。

昭和元年末現在の內地工場數五萬二千中、其の六割強は大正元年以降の設立に係るもので、その年次表、次の如くである

創業年別工場數表（全國）

創業年次	工場數	指數
大正元年	一、七六三	一〇〇
二年	一、二九五	七三
三年	一、一四九	六五
四年	一、〇四七	五九
五年	一、八二六	一〇四
六年	二、二四九	一二八
七年	二、五一二	一四二
八年	三、〇七三	一七四
九年	三、一〇七	一七六
十年	二、七三八	一五五
十一年	二、五五六	一四五
十二年	二、四五八	一三九
十三年	二、七六五	一五七
十四年	二、〇六九	一一七
昭和元年	一、九〇六	一〇八

次に大阪府下に於ける工場に就き、大戰前と大正六年とを比較すれば、次の如くである。

戰前に比し大阪府下工場の發達表

	擴張工場數	增資額	生產增加額	職工增加數
		千圓	千圓	人
染織工業	五一二	九一、〇二〇	一二三、八二二	一二、一二四

年次	物價指數（大阪）	石炭價格指數（大阪）
大正元年	一〇〇	一〇〇
二年	九八	一〇六
三年	九二	一二二
四年	九八	一二一
五年	一二〇	一二一
六年	一五七	二七一
七年	二〇八	三七二
八年	二五三	四二二
九年	二七四	四六四
十年	二一四	三二八
十一年	二一一	三一四
十二年	二〇五	二八二
十三年	二〇七	二六六
十四年	二〇八	二七〇
昭和元年	一九五	二六七

機械器具工業	四四三	一五、五四九	六、〇七三	
化學工業	三五一	三二、二一一	五、七一四	
飲食品工業	五〇	二、〇六六	九七	
雜種工業	一三六	一、七五六	一、〇三六	
特殊工業	一一	九、〇六四	八二〇	
合計	一、五〇三	一五一、六六六	二五、八六四	

	新設工場數	投資額（千圓）	生産額（千圓）	職工數（人）
染織工業	八〇六	九、七五三	一九、五〇六	一二、六九三
機械器具工業	一、四七二	一八、七八五	五三、九九一	一五、〇一二
化學工業	七〇〇	二一、三三五	二三、八七八	九、五九六
飲食品工業	七八七	六、四一七	六、五八三	一、五四四
雜種工業	六三〇	三、五九七	一四、五〇九	六、六六九
特殊工業	三〇	一、一六二	一、三四五	七七六
合計	四、四二五	六一、〇四四	一一九、八一一	四六、二九〇

註、調査の時日は大正六年十月末日現在を基準とし、大正三年八月以後に於ける、擴張又は新設工場を調査せり、投資額及生産額は其の明ならざるものは、推定額を算出し、且生産額は擴張工場にありては、大正二年八月より同三年七月に至る、一ケ年間の生産額より控除したるものを掲上し、新設工場は大正五年十一月より同十六年十月に至る一ケ年の額を掲上せり。

第五項　我國石炭の需給關係

供給の狀態　大正三年八月我國が、歐洲戰爭に參加してより、外國船の往來殆ど皆無の狀態となり、從てその方面の需要が減退したので、炭坑業者は自衛策として、大正四、五年に於て、採炭を一割五分乃至二割五分の制限を行ふことになした。然るに同五年には、全國各種工業の勃興により、漸く石炭の需要增大したので、同年十一月に此の制限を撤廢し、その後數年間は黃金時代であつたが、大正九年春に襲來した大恐慌の結果、石炭の需要を減退せしめ、炭業者をして又亦採炭制限を決行せしめたのである。而して此の制限は大正十年に始り、十三年まで續いたのであるが、大正十四年には右制限を一時撤廢した、それが爲遂に供給過剩に陷りて、炭價思はしからず、大正十五年に再び採炭制限を實施したのである。

多少面倒であるが、數字を以て說明すれば、大正元年乃至大正三年の供給過剩額は、三百萬噸內外であるが、大正四、五年は採炭制限の結果、過剩額二百萬噸弱に減じ、大正六、七年は、三百五十萬噸、同八年は五百萬噸、大正九年、十年は出炭減少の結果、前者二百萬噸、後者百六十萬噸まで下つた。それ以後は四百萬噸乃至六百萬噸を、上下してゐるのである。

全國石炭供給高表

年次	出炭高（千噸）	輸入高（千噸）	輸出高（千噸）	差引內地供給高（千噸）	供給過剩高（千噸）
大正元年	一九、六四〇	三一	三、四九五	一六、一四五六	二、九六八

第五節　石炭

二年	二一、三二六	五八一	三、〇七二	三、九〇一	一七、九九六
三年	二三、二九三	九六五	三、四二三	三、六一五	一九、六四三
四年	二〇、四九一	六二〇	一、九〇四	二、九四七	二、九四三
五年	二二、九〇二	五六一	一、八四四	三、〇四〇	二、八三六
六年	二六、三六一	七一九	三、五三七	二、八三六	二、八三六
七年	二八、〇二九	七七四	三、五六三	二、二一四	二、二一四
八年	三一、二七一	七二一	五、一四八	二、三〇三	二、三〇三
九年	二九、二四五	八一〇	二、二二六	二、一六四	二、一六四
十年	二六、二二一	七九〇	一、六八五	二、四二六	二、四二六
十一年	二七、七〇二	一、八七	？	一、七一八	一、七一八
十二年	二八、九四九	一、七一三	六、六六九	一、五九九	一、五九九
十三年	三〇、一一一	二、〇一二	五、四七四	一、七三九	一、七三九
十四年	三一、四五九	一、七六八	六、一〇九	二、七三八	二、七三八
昭和元年	三一、四二七	二、〇四五	四、二四二	二、六三二	二、六三二
二年	三三、五三一	二、七〇三	六、三二八	二、二〇八	二、二〇八

消費の狀態　大正元年の全國石炭消費高は一千三百萬噸で、大正九年の二千五百萬噸まで、漸進的に增加し、其の後若干の起伏を見たが、昭和二年には二千七百萬噸を示してゐる。消費の用途別は、大正九年農商務統計に據ると、工場用五七%、內外國艦船用二七%、鐵道用一三%である。

全國石炭消費高表

年次	推定消費高 千噸	指數	本籍人口千ニ付消費高 千噸
大正元年	一三、四八八	一〇〇	二五六
二年	一四、九二四	一一一	二七九
三年	一六、二二〇	一二一	二九九
四年	一六、二六〇	一二一	二九五
五年	一八、五七九	一三七	三三三
六年	二〇、七〇七	一五四	三六七
七年	二三、〇二六	一七一	四〇六
八年	二四、八〇一	一八四	四三三
九年	二五、六六五	一九一	四四三
十年	二二、九〇〇	一七〇	三九〇
十一年	？	？	？
十二年	二二、三九四	一六六	三七一
十三年	二四、九一〇	一八五	四〇七
十四年	二四、三八〇	一八一	三九二
昭和元年	二六、五九八	一九七	四三九
二年	二七、七〇八	二〇六	—

第六項　石炭の生産費

現下一般の生産組織は無統制の有様であるが、石炭に就ては石炭協會が生産統制機關となつてゐる。而して石炭は、一般貨物と同様に、其の生産費が、その需給調節に多少働くので、即ち生産費を中心として、或場合には遠心的に、又或場合には求心的に需給を調節し、從て價格を調節するのである。勿論是は短時日の間に現れるものでは無いのである。

貨物の基礎價格は生産費である、石炭の生産費は、普通一噸當りの、採掘に要する營業費を指すので、(起業費即ち鑛區費、用地費等の資本的支出を含まず)昭和二年十一月の鐵道省調査によれば、筑豐炭田一噸當り生産費は、勞銀三圓二十錢、其の他三圓三十錢、合計六圓五十錢である。

我國の炭田は深層採掘である結果、採炭費が相當嵩むのであるが、需要地價格の大半は返て運賃に於て占められてゐるのである。其の例は、大正十一年調査に係る九州粉炭一噸の運輸費によりて首肯し得るので、即ち次の如くである。

	圓
山元値段	七・五〇
若松港船乘値段	二・五〇
若松港安治川間運賃	三・二〇
安治川工場間運賃	三・〇〇
計	一六・二〇

斯く運賃が、炭價即ち廣義の生産費中に、重大なる地位を占むる所の、運炭費の騰落を次に示す、

石炭運賃表（大阪若松間帆船、一萬斤建）

	運賃 圓	指數	石炭價格指數
大正二年	八・八〇	一〇〇	一〇〇
三年	八・二六	九四	一一五
四年	七・六七	八七	九二
五年	一一・四〇	一三〇	一一四
六年	二三・四五	二六六	二五五
七年	二三・九一	二六〇	三五一
八年	二〇・一三	二二九	三九八
九年	二一・五四	二四五	四三七
十年	一五・三八	一七五	三〇九
十一年	一九・一四	二一七	二九六
十二年	一八・四五	二一〇	二六六
十三年	一九・一〇	二一七	二五〇
十四年	一六・四八	一八七	二五四
昭和元年	一六・二三	一八四	二三二
二年	一六・五六	一八八	二六二

第七項　石炭價格騰落の原因

叙上石炭に就ての經濟事情の要點を摘記すると、

一、大阪は石炭の大消費地で全國の七・七%に達す

二、大阪で消費する石炭は內地炭大部分で、その九二%は九州炭である

三、九州炭の七割は若松港から大阪に來る

四、石炭價格は夏期に比し冬期が騰貴する

五、全國石炭消費の約六割以上は工場用である

さて、石炭生産費の約五割は、運炭費が占めてゐるので、世間の一部では石炭が産地價格に比し需要地價格が、より以上に騰貴してゐるのは、船舶運賃の騰貴による如く稱へた論者もあつたが前揭の表によりて見れば、その然らずして、却て石炭の騰落が、運賃の騰落に先行してゐるのである、即ち運賃の騰貴は石炭の運搬が大なる原因をなしてゐるのである次に需給方面及需要に最も關係深き、工場に關する各表其の他の表によりて、主として需給の關係が石炭價格騰落の重點をなし、時に價格が需給を左右してゐることが明瞭である、以下大正元年以降の價格騰落を、三期に分ちて細說する。

第一期（自大正元年至大正四年）

此の時期は經濟界不況に拘らず、石炭に就ては、强保合時代とも稱すべき狀態を示した、その原因は需要增加率が、供給增加率を超過したこと、即ち過去五十年間に於ける供給增加率九%內外なるに、需要增加率は一二%內外に達したのと此の時代は石炭供給契約の、更改期にあるものが多數ありたる等が、原因となつたのである。

然るに大正三年暮から、季節的に高値となるべきものが、却て下落の徵を現し、翌年に入りて遂に下落した、是即ち深刻なる財界不況の爲、工場の閉鎖、又は廢業等續出して、其の工場數大正三年に比し、一・四%を減少して需要增加率は全然停止し、一方全國貯炭高の年末現在高は大正二年の七十一萬噸に對し、大正三年は百五十八萬噸、同四年百四十四萬噸に激增した如きが、最大原因である、而してその大阪が、東京及産地より、以上に低落したのは、小石炭商人が、手持品を賣崩した結果である。

茲に於て採炭業者は二五%乃至一五%の生産カルテルを斷行して、供給過剩率を、大正元年乃至同三年の、二〇%乃至二二%に比し、二分一の一一%に低下せしめ、更に年末に近づくに從ひ、季節的關係も加はりて、石炭市況は漸く愁眉を開いたのである。

第二期（自大正五年至大正九年）

當期は昂進時代で、即ち石炭價格の暴騰を始めたのは、大正五年冬からである。而して全國工場數も大正五年は、一四・八%を激增し、更に大正九年は、同四年の二倍强となり、正に工業に於て著しかつたのである。

如斯狀態に於て、石炭價格騰貴したるに乘じ、石炭の採掘が激しくなり、供給が相當以上に增加せるに拘らず、炭價益々强調を示せる結果、大正七年頃には、其の暴騰は地元炭業者の釣上策に由るものとさへ、叫ばるゝに至つたが、實は斯く炭價は騰貴したが、その價格を以て取引され得るものは、大正七年の調査に於て、全生産の約二割內外の見込で、大炭

坑業者は低價の長期契約履行、坑内勞働者の移動等で、此の慶澤を受くること僅少であるが故に、之等炭業者がより生産增加に努めた結果と、採算上從來顧みられなかつた劣等炭坑の開業等と、相俟て現れた現象である。

我國の石炭需要は、歐米の如く生活必需品にまで、普及しておらないから、其の騰貴が一般に對して、直接的には生活問題を起さないが、間接的に種々の影響を及ぼすので、大正七年の鐵道運賃値上げの如きは、其の適例である。

然るに此の時代の、無節制なる採炭の結果、大正八年末は前年末に比し、六割の貯炭增加を示し、更に翌九年の恐慌を受けて、遂に九年六月から、炭價下落の步調に向つたのである。

第三期（自大正十年至昭和二年）

第三期は、弱保合時代とも稱すべきである。而して大正十年三月より又亦下落を始めたが夫れは前期の事由の外、金融關係惡化による、石炭の投賣が、重なる原因である。由て全國炭業者は、大正十年五月一日から、一七%の採炭制限を行つたので、炭價も餘り波瀾を見せず、大體安定を續けたのである。然るに大正十二年九月の關東震災は、京濱地方の石炭消費力を奪ひ、爲に大阪に於ける貯炭高は、十一年末七萬四千瓲に對し、十二年末は十一萬七千瓲に著增したので、炭價亦九月より、その影響を受けたのである。

次に大正十三年乃至昭和元年は、消費が減退して、價格に反映したのである。更に昭和二年に於て、財界不況に反し、炭價が活況を呈したのは、消費の旺盛と送炭制限により、需給伯仲したからである。尤も昭和二年には三千三百萬瓲の產出があつたが、常盤地方の爭議及荒天等の爲、送炭量は二千七百萬瓲に過ぎず、之に貿易差額五十萬瓲を加算するも、內地消費の二千七百萬瓲に大差なく、從て貯炭高の減少著しくなつて、現今內地に於て圓滑なる石炭供給を行ふには、常備貯炭として最少限度百五十餘萬瓲を、要すると稱せられてゐるのに、同年五月末貯炭は百九萬瓲（前年二百六萬瓲）、八月末貯炭百二十五萬瓲（前年百七十八萬瓲）と云ふ狀態で、而も十月には早手廻しの需要家が、續々買進みたる結果一層騰貴したのである。茲に於て各炭坑は十一月頃より、極力增產に努めたので、貯炭も追々增加を示し、十一月末百四十六萬瓲十二月末百六十四萬瓲に進み、而して消費も好調の結果、炭價手堅き保合で、越年したのである。（柏原）

第六節　石油

凡そ一般商品價格の、一厘一錢の動きと雖も、その原因とすべき事情があるのであるが、斯く微細にその原因を、探究すると言ふ事は、甚だ困難であるのみでなく、又こゝにはそれが目的でない。只大阪市統計書に現れたる、一ケ年間の平均價格及其の指數について、各年を通じて比較的變動のあつた期間に大別して、述べる事とする。

普通に石油と言へば、狹義に於て原油を指し、廣義に於ては原油とその製品である燈油、揮發油、輕油、重油、及機械油等を總稱してゐる。そしてこゝに述べんとする燈油、即ちランプ油の價格變動については、一般財界の消長、燈油の需給關係、其の他効用の變化等に依つて、その市價に影響する事は勿論であるが、同系製品である其の他油類の、市況に依つても、亦その價格に影響する事多く、從て同系製品である各油類についても併せ說述して、以て大正元年より昭和二年に至る燈油價格の變遷を知るに便せん。

本邦製油産量累年表（單位千函）

年次	揮發油	燈油	輕油	重油	機械油	合計
大正元年	三三	二、一四九	一、七八	一、三六九	八〇七	五、三二六
二年	一一〇	二、七一七	一、二六三	一、一二六	八九六	六、一一三
三年	一八三	二、九〇〇	一、九六四	一、九九九	一、一八四	八、三三一
四年	二三六	二、六五〇	二、六六八	三、七〇六	一、三一八	一〇、五七八
五年	三八四	二、六五八	二、三三四	三、九四四	一、一八四	一〇、三九四
六年	六二七	二、二八一	三、〇七八	二、七四九	一、八八八	一〇、五二三
七年	七三六	一、五四三	三、五七一	一、六六四	一、七四九	九、一六三
八年	七四三	一、三三一	二、九〇三	九九四	一、八八三	七、七四三
九年	七八七	九九九	二、八五五	九二六	一、八五五	七、四二三
十年	七〇六	七二六	三、四九四	五三三	二、一三九	七、五七八

本邦石油消費量累年表（單位千函）

年次	揮發油	燈油	輕油	重油	機械油	合計
大正元年	二四九	七、九八一	一、二四四	一、六二〇	一、一三三	二、三二六
二年	一三九	七、六七九	一、三七五	一、四九〇	一、一七〇	一、八五三
三年	三六一	六、五三〇	一、九九六	二、一八六	一、四四七	二、五一〇
四年	三四三	六、二四五	二、一四五	四、〇六四	一、五七七	一四、八六六

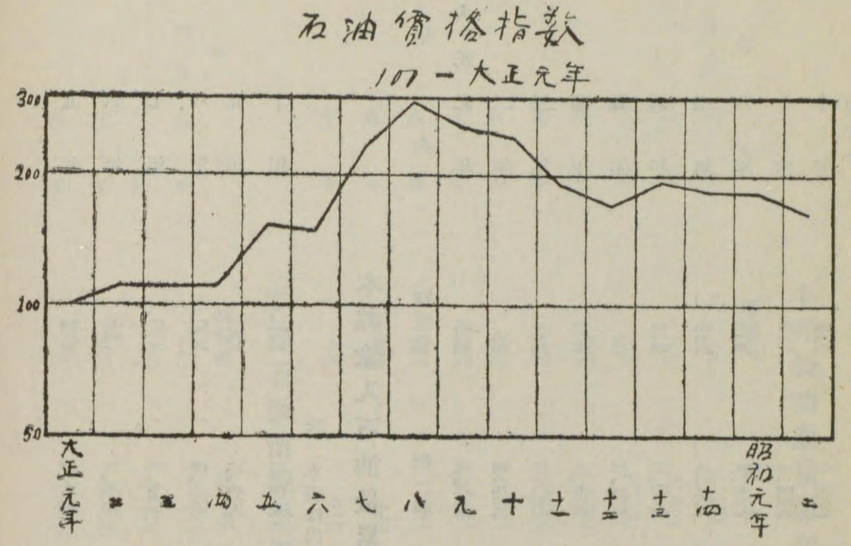
年次	揮發油	燈油	輕油	重油	機械油	合計
五年	四五四	四、九八〇	一、六六六	四、一四九	一、四七三	一二、七二二
六年	七四一	三、九九九	二、九三六	二、九九二	二、〇〇九	一二、六七四
七年	一、〇一三	三、七六五	三、五二五	二、七五九	二、二三三	一二、二七四
八年	一、〇〇八	四、九〇五	二、九〇六	一、〇九五	二、二〇八	一二、一二三
九年	一、三九八	三、四〇九	三、三三八	一、〇九二	二、三四九	一二、二四八六
十年	一、二八八	三、四二九	四、一七五	九七一	二、五〇四	一二、三六七

註　本表は内地製油産量と外油輸入量の合計なり

本邦輸入石油量累年表（單位千函）

年次	揮發油	燈油	輕油	重油	機械油	合計
大正元年	三三四	五、八三三	六六	二五一	三五一	六、六九〇
二年	二九	四、九六三	一一三	二六四	二七四	五、六四一
三年	一七九	三、六二〇	八七	一八七	二六三	四、三三五
四年	一〇七	三、五九五	八二	三五七	二五九	四、四〇一
五年	七〇	二、三三三	一三四	二〇五	二八八	三、〇二一
六年	一二四	二、〇七七	六二	二四三	二三一	二、七一八
七年	二七六	二、三九	一四八	九五	四七三	三、三八一
八年	二六六	三、七五七	二九三	一〇〇	三二六	四、七四三
九年	六二一	三、四四六	五二四	一六六	四九四	五、一三二
十年	五八一	二、七二〇	七八〇	四四九	三六六	四、八九七

第二章　價格概說



大正三年以前　日露戰後の活況の後を受けて、明治四十四年に至り濫掘の結果、油田を涸らし湧出量の急減せしむる等産油界は不況に落ち入つたが、僅に採掘の方法の改良に依つて、增產を圖り、當時從來の綱掘法では、四百間以上に掘り進むことは、非常な困難とされ、四百間以下の掘鑿にも、一ケ年以上の長時日を費さなければ、ならなかつたといふ事である、しかるに日本石油會社が、この行詰りの樣を慨き、先進國である米國に技師を派遣し、且老練なる技術家を聘して、斯業の改良に盡したので、產油量も漸次增して來た、殊に秋田縣下黑川五號井油田の如き、大正三年五月、日產量壹萬石といふ樣な噴油を見たため、全國の產油量も大正元年以來各油とも逐次增產を來たしてゐる(前表參照)。燈油も他の油類と同じく、大正元年の二百十四萬九千函から、同三年には二百九十萬函に增加して居るが、一方全國各油消費量(前表)を見るに、燈油を除く他の油類は一樣に增加してゐるが、ひとり燈油は、大正元年に七百九十八萬一千函であつたものが、次第に減じて、一見供給過剩の樣に思はるゝが、輸入燈油(前表參照)の減少に依つて、其の缺を補はれ、略ぼ需給の中庸を得て、其の市價の如き大したる變動なく、頗る平凡に推移した。(大正三年迄は輸出石油なし)

歐洲大戰中　久しく沈滯して、一定の價格を保つて居つた油界も大正三年八月歐洲戰亂の突發により、一時需要縮少せられたるやの感があつたが、戰線の愈〻擴大さるゝに及んで、我國一般工業の勃興と共に、財界好轉の徵しがあつたので大正四年末燈油五錢、輕油拾錢の値上げとなり、延いて各油の需要俄かに增加したがために、各種油類價格も、漸騰の步調を取つたのである、各交戰國では『近世戰爭は、一面より機械の戰爭と稱える事が出來る』と言ふので、軍艦、自動車飛行機を初め、種々の機關が使用せられ、其の機械の圓滑なる運轉を起さしめるのは、石油即ち揮發油、重油、機械油等の力に依らなければならないから、各國は競ふて、その價格の高低如何に關せず、軍需品として所要量の、石油を購入したがため、各國間の輸出入の平調を缺くに至つた。かくて我國に於ても、產業の殷盛、交通運輸の發達、化學工業並に醫療用品として、有らゆる方面にその用途が開かれ、石油の需要が日に月に增加したのと相俟て、輸出入の平調を失し、船腹の不足、運賃の昂騰等に依つて、內地の需給關係はその均衡を失ひ、其の結果大正七年、俄然石油價格の暴騰となり、一時殆ど天井知らずの奔騰振りを見せた、即ち內地產原油について見るも、(後表參照)大正四年、西山原油一石七圓四拾二錢、東山原油五圓四拾錢、新津原油參圓三拾錢であつたものが、大正八年西山もの三拾二圓六拾六錢、東山もの二十四圓二錢、新津もの二十壹圓四拾三錢、即ち同四年に比し西山、東山もの共に四倍强、新津もの六倍强といふ樣な、油價未曾有の昂騰となつたのである。

內地原油建値（一石ニ付キ）

年次	西山原油 圓	東山原油 圓	新津原油 圓
大正四年	七・四二	五・四〇	三・三〇
五年	九・九七	七・二六	六・一八
六年	一一・二七	八・二〇	九・〇七
七年	二〇・七三	一五・〇九	一六・五五
八年	三二・六六	二四・〇二	二一・四三
九年	二二・六八	二〇・六八	二一・三二
十年	二三・八八	二〇・五七	二〇・四三
十一年	一八・一九	一五・〇〇	一四・二〇
十二年	一四・三〇	一二・〇〇	一一・七五
十三年	一七・五四	一四・二〇	一三・〇〇
十四年	一五・七七	一二・〇〇	一〇・〇〇
昭和元年	一五・三〇	一一・九五	九・六五

斯くの如く原油の騰貴につれ、當然燈油價格もその影響を受け、大正七年より同八年にかけ、本市統計書卸賣物價表によれば、上松二罐入一函最高拾五圓前後に達し、同元年中の價格平均參圓九拾九錢に對し、殆ど三四倍の値上りとなつたのである。けれども燈油以外の各油は、叙上の影響に依り消費量、輸入量（輸出量は大正三年以來僅少なれば論ずるに足らず）共に增加したれども、獨り燈油の內地消費量は、その輸入量と共に逐年減少しつゝありて、畢竟大戰中に於ける燈油市價の昂騰は、他の一般油類市價と、その容器及精製用藥品の、高騰の影響に歸着する樣であつた。

歐洲戰後　叙上述べたる如く『今や石油を制する者は、克く世界を制す』とさへ唱へられ、各國とも擧げて、之れが供給の獨立を計り、米國の如き、世界石油產額の七割を占めて居るが、尙年々需要が增大して、需給の均衡を失ふを懼れて同政府は民間斯業者と謀り、積極的の石油政策を樹て、列强に臨む有樣であつたが、飜つて我國の狀況は、產油量逐年增加して來たが、大正六年以來又復頽勢に轉じ、減產するに至り、殊に燈油に於て最も甚だしく、その原因とするところは戰亂のため鑿井用鐵管の輸入杜絕、米國の鐵類輸出禁止、諸材料暴騰に依る生產費高等を數へる事が出來る。

更に消費量は、漸次增加したとは言へ、その內容について見るに、各油類中揮發油、輕油及び機械油の需要は、著しく增加してゐるが、只燈油の需要は愈〻減じつゝある、之れは往時燈油は、消費油類中の大部分を占めてゐたが、從來その用途が照明用に限られ、電燈、瓦斯等の普及に伴れて、年々衰退して來たのは、當然である。かくて一般油價は、大正九年三月財界の大反動、諸商品價格の暴落に、多少油價の低落を見たとは言へども、需要增加產油減少に依つて、他の日用生活必需品の如く、急激なる反落を見せず除々に低下の有樣であつたが、恐慌以來各事業會社の、極度の生產制限と、輸入の手控、通貨の膨張による物價低下傾向を、阻止する擧に出でたのと、他の一般油類價格に依つて、燈油價格の如き、辛じてその市價を維持して居つた樣な觀があつた。

大正十二年前後　歐洲戰亂の終局により、一般工業界の衰微、財界の變動等による影響にも、比較的表面平靜を保つてゐた一般油價も大正十一年末以來、愈〻その影響を受けて、漸次低落の傾向となつた。

けれども內地消費量は、一向衰へず、むしろ增加して來た。

內地石油消費量累年表（單位千函）

年次	揮發油	燈油	輕油	重油	機械油	合計
大正十一年	一、八三七	四、二九	四、四九五	九六四	二、二九一	一三、七一六
十二年	二、〇一〇	三、七九三	二、九六六	二、四七〇	二、一五一	一三、三九一
十三年	三、一三四	三、八三〇	四、四九〇	三、八六五	四、〇五〇	一九、三六九
十四年	三、六八二	四、八〇一	四、八一六	五、〇〇四	三、一三一	二〇、五三五
昭和元年	四、九九一	三、四六四	五、三三五	五、四二〇	三、五二六	二二、七二六
二年	六、二四五	三、一七〇	四、八六〇	八、五二五	四、八四	二七、六七四

殊に我國自動車の發達目覺しく、ために揮發油の消費日々に增して、大正十一年壹百八十三萬七千函であつたのが、三年後の大正十四年には二倍强の、三百六十八萬二千函に達して居る、また重油も歐洲大戰後消費減退の姿であつたが、近年海軍、鐵道、商船、工場方面に、年々需要を增し、大正十一年百萬函に充たなかつたものが、同十四年には一躍五百萬函に達して居るが、その間燈油は僅の增減のまゝであつた。

今その需要增加を證する、內地鐵道輸送數量(貸切扱)を、揭ぐれば左表の如く、即ち大正元年二十五萬八千餘噸（指數一〇〇）であつたのが、大正七年四十四萬五千餘噸指數一七三に、同十三年には五十六萬噸指數二一七に增加した。

全國鐵道輸送石油數量累年（單位噸）

年次	數量	指數
大正元年	二五七、八六九	一〇〇
三年	三〇九、二六六	一二〇
七年	四四五、二六六	一七三
十年	五三六、四三六	二〇八
十一年	五八八、〇一二	二二八
十二年	五二五、五六七	二〇四
十三年	五六〇、〇〇八	二一七
昭和元年	五七六、八〇三	二二四

大阪市に於ける石油集散數量（單位千斤）

年次		海運	陸運	計	海運	陸運	計	差引消費
大正十一年		二三、一〇四	七八、六四	九〇、七八	二七、一五三	五六、八六〇	八三、一三	三三、九一五
十二年		二五、四四九	六三、九五七	八九、三六六	四四、四七七	三五、八七八	七〇、三四一	一九、〇一三
十三年		四九、一四三	六一、五一六	一一〇、六五八	五四、一二六	三六、三七四	九〇、五〇〇	二〇、一五八
十四年		三八、〇四八	七三、七七	一一一、八二五	五五、〇五三	三七、九〇六	九二、九五九	一八、八六五
昭和元年		六〇、五六一	七四、〇五六	一三四、六二六	七〇、〇八三	四三、二九七	一一三、三八〇	二一、二四六
二年		五一、六八六	九六、九二三	一四八、六〇八	七五、九三六	二七、六四九	一〇三、五八五	四五、〇一三

註、本表には石油以外の鑛油をも幾分含む

即ち大阪市に集散する、石油數量を見るに、大正十一年以來發送、到着共に年々增加を來たしてゐる、そして大阪市に於ける消費量も、年によつて多少の增減はあるが、大體一ヶ年間に二千萬斤內外にして、逐年增加の傾向を示してゐる。かくて內地消費の增加するに對して、內地產油のみにての不足は、價格の如何に拘らず、外油の輸入に依つて、充さなければならない事情にあつた。（次表參照）

外油輸入量累年表（單位千噸）

年次	揮發油	燈油	輕油	重油	機械油	合計
大正十一年	一、一八四	三、三八四	一、八六六	三七九	一、〇二三	七、八二七
十二年	一、二八四	三、二五一	三七	一、七五四	七三	七、三二九
十三年	二、一八五	二、八二八	—	二、四八六	一、九九六	九、四九五
十四年	二、二五三	二、七一八	—	三、二四〇	一、四五九	九、六六九
昭和元年	二、九一九	二、五六八	—	三、九六一	一、七五八	一二、一〇六
二年	三、五〇九	二、二九七	—	七、五二三	一、九九二	一五、三一〇

しかるに、各供給國に於ける、油價を見るに、常に歐洲方面最も高く、東洋之に次ぎ、南洋、印度の順で、我國の第一供給國である米國は、最も安價であつたが、從來關稅の障壁を設けて、內地油價を不自然に高からしめて居つたのであつた。

昭和二年前後　石油の需要そのものは、減じてゐないが、しかし揮發油、輕油、重油等の燃料油は、前述の如くその用途廣汎となるにつれ、增加しつゝあるに反し、獨り燈油に於いては、近年暖房、司厨用及び農業用發動機方面に、用途を開拓して、多少需要の增加したるとは言へ、その增加も遲々たるものであつた。

最近ノ世界原油產額（千米石）

	昭和元年	大正十四年	大正十三年	大正十二年
米國	七二五、〇〇〇	七六三、七四三	七一四、〇〇〇	七三三、四〇七
メキシコ	九〇、〇〇〇	一二五、五一五	一三九、五八七	一四九、五八五
ロシヤ	六一、〇〇〇	五二、四四八	四五、一六三	三九、一五六
ヴエネズエラ	三七、三六	一九、六八七	九、五〇〇	四、〇五九
波斯	三五、四六〇	三五、〇二八	三一、八四五	二八、七九三
ルーマニア	二三、二九九	一六、六四六	一三、九六六	一〇、八六七
蘭領印度	二三、三三〇	二一、四三三	二一、〇〇〇	一九、八六八
チリー	一〇、七八二	九、一六四	七、八二二	五、六九九
印度	八、七二八	八、〇〇〇	八、一五〇	八、三三〇
亞爾然丁	六、五〇〇	五、八一八	三、八四四	三、四〇〇

右表の如く近年世界各國とも、產油增加の有樣で、殊に我國と直接關係あり、我が輸入量の大部分を占める米國の如き同國オクラホマ洲セミノール油田の、大增產などの結果、大正十三年以來七千萬パーレル（千米石）の、增產を示し、供給過剰から來る、販路の爭奪烈しく、ために殆ど採算を無視して、他に捌け口を探す有樣である。我內地は財界不安で、一

58 合 7

般に買氣を手控えさせ、加ふるに輸入は少しも減る氣配なく、更に各石油會社は、その販賣方針も、殆ど同じことを繰り返して居る様なわけで、依然無結束無協調の、暗中飛躍を續けて居るので、燈油價も卷末附表昭和元年中の平均價格七圓二十五錢から、同二年には六拾錢の下落を示し、六圓六拾四錢になつてしまつた。或る二三の石油會社が、揮發油の値上げを策したがため、各油とも少し値を持ち直したとは言へ、それも束の間で、依然各油とも下落の傾向で、要するに內地一般油價は、殆ど米國の市況によつて、支配されて居つた様な、觀があつた。（余部）

第七節　鐵

國家の隆替は、產業の消長によつて定まり、產業の盛衰は、鐵及石炭の多寡によつて定まる。就中鐵は銅と共に、工業發展の最大要因であつて、近世の文明は凡て、鐵の恩惠に浴するものと言つても差支なき程、その利用は廣汎に亘つてゐる工業國に於ける鐵の眞價は、實に黃金、寶石にも優るものといふべく、その消長は直に、その國の文明を左右する重大問題である。

飜つて、我邦の情勢を觀るに、鐵鑛僅少のためか、餘り香ばしくなく、この點より既に、工業國としての第一要素を缺くものである。又需要方面に於ても、歐米先進國に比べて、甚だ貧弱である。即ち、一ケ年一人當り鋼材の需要額僅に二十九磅（七貫七百匁）にして、米國の二百六十磅（六十九貫三百匁）、英、獨、佛、白四ケ國平均百十一磅（二十九貫六百匁）に比べて、米國の九分の一、歐洲四ケ國平均の四分の一といふ、悲しむべき現狀にある。

鋼材需給狀態累年表

（單位佛噸）

年次	內地產高	輸移入高	合計	輸移出高	差引需要高	需要ニ對スル生產割合(%)
大正元年	二一九、七一四	六四〇、九六六	八六〇、六八〇	三七、二九	八二三、五五一	二七
二年	二五四、九五三	五二九、二六五	七八四、二三七	二九、〇〇〇	七五五、二三七	三四
三年	二八二、五一六	三九六、二八八	六七八、八〇四	一七、〇〇〇	六五一、八〇四	四三
四年	三四二、八七〇	二三三、六三九	五七六、五〇九	二六、〇〇〇	五五〇、五〇九	六二
五年	三八一、二二二	四二六、九六八	七九八、一八九	七七五、九四三	二一、二四六	四九
六年	五一三、四四五	六七三、二一〇	一、一八六、六五五	一、一三四、九一六	五一、七三九	四五
七年	五三九、六三七	六五〇、七八〇	一、一九〇、四一七	一、一二九、四一〇	六一、〇〇七	四八
八年	五五三、六〇一	七二四、九九一	一、二七七、五九二	一、一七二、三五二	一〇五、二四〇	四七
九年	五三七、四六一	一、〇三九、四五三	一、五七六、九一三	一、四七九、五三一	九七、三八二	三六
十年	五六一、八二九	六四六、八〇一	一、二〇八、六三〇	一、二三三、四三三	八五、二〇八	五〇
十一年	六六二、〇九三	一、一〇〇、八三八	一、七六二、九三〇	一、六八〇、七六三	八二、一六八	四〇
十二年	八一九、六九四	七九九、一七七	一、八一八、八七一	一、五二一、三六五	九七、五〇六	五四
十三年	九〇六、二八〇	一、一五四、四〇三	二、〇六〇、六八三	一、九七一、八八三	八八、八〇〇	四六
十四年	一、一〇三、八八三	五三二、八九一	一、六三五、七七四	一、六二八、二六九	一〇七、五〇五	七三
昭和元年	一、三三〇、六八〇	九二四、七三一	二、二五五、四一一	二、一三五、〇三三	二二〇、三八九	九二
二年	一、三一〇、四〇四	八〇九、一八四	二、一二九、五八八	二、〇〇九、五五八	一三〇、〇〇〇	六三

備考、一、本表輸移入額中には朝鮮、滿洲を含む

二、昭和二年輸移出高は推定である

されば、當局は從來これが發達奬勵に努め、深甚なる注意を拂つて來たのである。

而して鐵は、我邦重要商品中、明治、大正、昭和三時代を通じ、全體として他の財貨より、比較的騰貴の程度の緩い財貨である。茲に、我邦鐵價の變遷を考ふるに當つて、特に注意を要するは、我國に於て需要せられる鐵は、その大部分とは言へないまでも、重要なる部分が輸入されてゐることである。例へば、銑鐵の需要に對する輸入の割合（數量による）は大正二年五三%、同十四年三六%にして、鋼材は、六六%、二八%の割合になつてゐる。

我國の鐵需要の內、輸入品が如何なる重要を有するかを見るに、鐵の種類によつて、又時代によつて異る。鐵需要といつても、鐵鑛、銑鐵、鋼材、特殊鋼等に對するものに分れ、鋼材の內で又、棒鋼、形鋼、線材、釘、鋼管、其の他の種々なるものに對する需要があつて、その用途が異るに從て、需要の變化する具合も異る。例へば、棒鋼、形鋼、薄鋼板釘等は、家屋、橋梁、建築材料として、建築界の好景氣の時に需要が增加し、厚鋼材、形鋼等は、造船、造艦等の材料として戰時に於て需要が增加する。

これ等の內、何れに對する需要を考ふれば、これ等の凡ての鐵に對する需要を、代表することが出來るか、といふことが問題である。鐵鑛及銑鐵は、何れも鋼鐵の原料であり、それ自身使用されることは尠ない。尤も銑鐵は、釜、機械の部分品として、可なりの需要を有するが、これは一應無視して差支ない。特殊鋼は更にこれを鑄造し、加工して機械に作るものであるから、これに對する需要は、機械に對する需要に包攝せられる。斯くの如く殘る鋼材に對する需要が、鐵需要を代表するものとして、適當であるが、これは前述のやうに、各種のものに分れ、これに對する需要の各別を、門外漢から覗ふことは困難である。そこで鋼材の直接原料である、鑛石及銑鐵に對する需要を代表的なものとして、考へるのが便利である。それは鋼材需要を、包括的に代表し得るものであるからである。

故に、本稿に於ては鑛石及銑鐵を中心として、平鐵價格（大阪市統計書）の變遷狀況に就て筆を進めることゝする。

世界各國銑鐵產額累年表

（千佛噸）

國別	一九二七年	一九二六年	一九二五年	一九二四年	一九二三年	一九二二年	一九二一年	一九二〇年	一九一九年	一九一八年	一九一七年	一九一三年
北米合衆國	三六、九三一	三九、九〇三	三六、九五三	三一、五七四	四〇、六六六	二七、二八一	一六、七七〇	三六、九八三	三一、〇六八	三九、〇五二	三八、七七六	三一、一四三
獨逸	一三、〇五六	九、三九八	一〇、一七四	七、八二三	四、九三五	九、三九五	七、八四三	七、〇四二	六、二八二	九、一〇六	一二、六一九	一九、三〇四
佛蘭西	九、二九六	九、三七七	八、四九二	七、六九一	五、四三三	五、三三九	三、六八一	三、四三四	二、四二二	一、三〇六	一、七三四	五、二〇八
英吉利	七、四六三	二、四八八	六、三三八	七、四三六	七、五五九	四、九八〇	二、六五八	八、二四四	七、五一六	九、二三一	九、四七一	一〇、四二四
白耳義	三、七四四	三、三九三	二、五四一	二、八〇七	二、八九	一、三〇三	八七六	一、二一七	二五一	一	八	二、四六七
ルクセンブルグ	二、七一八	二、四八九	二、三六二	二、一七四	一、四〇六	一、六七六	九七〇	六九三	六一八	—	—	—
露西亞	二、九七七	二、三三六	一、五四五	七五三	五二八	二三七	二一七	一五	—	—	一、五二四	四、五五八
ザール領	一、七七九	一、六二五	一、四五三	一、三四七	九二九	一、一五八	九六五	九四〇	—	—	—	—
チエツコスロヴアキア	一、二五〇	一、二四九	一、一六五	九八六	七六二	三四四	五四一	七一〇	六二七	—	—	—
日本	一、二六七	一、一三五	九三三	八三三	八〇九	七〇二	六五七	七三〇	七九七	六九五	五〇一	二四三

英領印度	一、〇一六	九〇四	九〇二	八九一	五四五	三五六	三七七	三一七	三三五	二六九	二五六	—
加奈陀	八三八	七九二	六〇六	六二三	九二四	四一〇	六二七	一、〇一五	八七六	一、二五	一、〇三一	一、〇三一
瑞典	四二七	四六七	四三二	五〇六	二七七	二五九	三〇九	五八五	五〇九	七七八	八五六	七四三
西班牙	五〇八	四六七	四六八	四〇六	四〇〇	一七八	一七八	二五二	二九五	三八六	三五八	四二五
濠洲	五一八	四五七	四四六	四二三	三〇五	二五四	三三三	二六一	二四〇	一八〇	一四九	四八
伊太利	四九八	四五三	四八二	三〇四	二四七	九二	七六	一〇九	二五五	三三五	五〇五	四二七
墺太利	四二七	三三〇	三八〇	二六六	三四四	三三三	二一四	九八	六三	—	二、〇三二	二、三八〇
波蘭	五八四	三〇九	三二五	三三一	五二〇	四六五	六五〇	一〇二	—	—	—	—
支那	二〇三	三〇五	三〇五	一七九	一六〇	一四九	二二四	二五六	一五九	一五〇	九八	
匈牙利	二五九	一六〇	九三	三〇〇	三〇〇	二五〇	五一	三〇	—	—	—	
其他の國	三九六	三〇四	二五四	二〇三	二〇三	一〇一	一五一	一八四	一〇二	七〇	一〇三	二〇三
合計	八六、一五五	七八、二九〇	七六、六三五	六七、八四四	六九、四二九	五五、三三二	二七、八三八	六三、九〇六	五二、四〇一	六二、七七一	六九、一四四	七八、七〇一

備考

一、日本の生産高は朝鮮及滿洲を含む

二、支那の生産高は漢冶萍煤鐵公司の生産數量のみを掲記す、但し一九二五年は推定高とす

三、日本、支那を除く他は、アイオントレード・レヴュー（一九二八年は推算）に依り、英噸は佛噸に換算掲上す

四、ルクセンブルグ（一九一九年以前）及ザノル（一九二〇年以前）の産高は、獨乙の分に之を含む、チェツコスロヴァキア及匈牙利（一九一九年以前）の産高は、墺太利の分に之を含む、波蘭（一九一九年以前）の産高は獨乙及露西亞の分に之を含む

五、本表は日本評論社産業叢書工業編（下卷）鐵鋼一班より轉記す

第一項　鐵鑛石、銑鐵の需給狀態

我國の銑鐵輸移入が、その需要中如何なる割合を占めてゐるか、即ち次表の如し。

銑鐵需給狀態累年表

（單位佛噸）

年次	内地産高	輸移入高	合計	輸移出高	差引需要高	需要に對する生産割合（%）	需要に對する輸移入割合（%）
明治廿九年	二六、一二三	三九、〇三五	六五、一五七	—	六五、一五七	四〇	六〇
三十九年	一四五、四五五	一〇三、四四三	二四八、八九八	三七三	二四八、五二五	五八	四三
大正元年	二三九、一六八	二三三、〇一四	四七一、一八二	三二四	四七〇、八五八	五一	四九
二年	二四二、六七六	二七三、三一〇	五一五、九八六	三五八	五一五、六二八	四七	二三
三年	三〇一、七二六	一七二、一三四	四七三、八六〇	一八七	四七三、六七三	六四	三六
四年	三〇二、六二七	一九〇、八八五	四九三、一一二	四〇〇	四九三、九一二	六五	三九
五年	三九一、八九二	二三七、六五五	六二九、五四七	一、六四二	六二七、九〇五	六三	三八
六年	四六二、七九二	二三五、〇八二	六九四、八七四	五五二	六九四、三二六	六二	三四
七年	六〇六、四二八	二六七、七四一	八七四、一六九	八三三	八七三、〇一三	七〇	三一
八年	六二二、六〇九	三四八、七〇七	九七一、三一六	一、八九四	九六九、四二二	六四	三六
九年	五二九、八七五	三九〇、一九八	九二〇、一七三	二、一四	九一七、六五九	五八	四三
十年	四八〇、三〇〇	二七六、二八四	七五六、五八四	三、六九三	七五二、八九一	六四	三七
十一年	五九九、三一〇	四〇九、二〇六	九六八、九一六	三、六九九	九六五、二一七	六二	四二

十二年	六一〇、七五一	四二九、一四二	一、〇四〇、一九三	五、三三一	一、〇三四、九六二
十三年	五九八、四〇五	五三〇、一三三	一、一二八、五三七	六、三二九	一、一二三、二〇八
十四年	六九六、一一一	四〇三、五六八	一、〇九九、六七九	六、五〇三	一、〇九二、一七六
昭和元年	八三一、八三三	五〇八、四一三	一、三四〇、二四四	四、六八六	一、三三五、五五八
二年	八九五、二四六	八四六、一七三	一、七四一、四一八	—	—

備考　本表輸移入高中には朝鮮、滿洲を含む

前表によれば、その三割乃至四割は輸入されてゐる。

尙、大正元年の輸移入高を一〇〇として、累年の輸移入高増減割合を見るに次の如し。

銑鐵輸移入高增減割合累年表（%）

年次	内地産高	輸移入高	需要高	年次	内地産高	輸移入高	需要高
大正元年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	大正九年	二二二	一六八	一九五
二年	一〇一	一二八	一一〇	十年	二〇一	一一九	一六〇
三年	一二六	七四	一〇一	十一年	二三四	一七七	二〇五
四年	一二七	七四	一〇五	十二年	二五五	一八五	二一〇
五年	一六四	一〇二	一三三	十三年	二五〇	二二四	二三六
六年	一九四	一〇一	一四八	十四年	二九一	一七四	二三三
七年	二五四	一一五	一八五	昭和元年	三四四	二一九	二八二
八年	二五六	一五〇	二〇四	二年	三七四	—	—

58 合 7

備考　鐵鑛と異り、銑鐵は大部分内地に於て産出せられ、その内地産出割合が、急增しつゝあるは、戰亂の影響のため大正三、四年に於ける輸移入減少したるを以て、これに刺戟せられて、增加したのであらう。

而してその後輸移入の增加したるは、主として支那よりの輸入增加したるによるものとす。

即ち右表によれば、輸移入高は年を追うて增加し、昭和元年の如きは、大正元年に比べて、約三倍の激增となつてゐる故に、我國の鐵價によつて、引張られて動いてゐると、考へて差支ないと思はれる。否事實は、然る所以を證明してゐる即ち大正元年の如き、好景氣ならざるに、鐵價は比較的高價を示してゐるが如きその一例である。

次に我國に輸移入せらるゝ銑鐵は、如何なる地方より仕向けらるか、移入銑鐵の仕向地は何處にせよ、內地と同樣に看做し得るを以て、深く注意を拂ふ必要はないが、輸入銑鐵の產地は、これを明にする必要がある。今銑鐵の輸出國（供給國）の變化に就て觀察して見るに、我國に輸入される銑鐵は、明治四十年頃までは、その最大部分は、これを英國產のものに俟つた。その後、支那及印度の製鐵業は、著しい發展を示し、東洋市場に於て、自國の需要を充たし、更に我國の如き先進國に對して、鐵鑛石の外に半製品の供給を初め、次で歐戰後支那よりの輸入夥しく、英國品は全く我市場より退却して了つた。それに代つて支那及印度が出現して來た。今、銑鐵の輸入額を國別にすれば次表の如し。

銑鐵輸入國別比較累年表（數量による比例を示す）

年次	英國	支那	英領印度
明治三十一年	七一・四	%	%
		一・二	—

四十年	七〇・八	二四・四	—	
四十四年	六七・七	二九・五	—	
大正元年	六八・八	三一・八	二二・一	
二年	三七・五	二二・六	三〇・八	
三年	三五・六	三二・六	一八・五	
四年	二二・〇	四九・六	二二・七	
五年	一三・六	四四・一	二七・〇	
六年	二・三	四七・二	二六・三	
七年	七・九	七〇・〇	三・一	
八年	一五・八	三三・六	一〇・一	
九年	一六・七	四〇・二	一三・七	
十年	九・九	三三・五	一五・一	
十一年	二・九	三九・四	三〇・六	
十二年	一・八	二八・二	三九・五	
十三年	一・七	三七・三	三六・一	
十四年	二・五	一五・一	四八・四	

又、鐵價の變動に就ては、景氣の變動等需要の方面のみを、考察するのでは不充分で、その原料たる鐵鑛石の側をも、見なければならない。鐵鑛石の鐵價に對する關係に於ては、我國の事情に就て言へば我國の鐵に對する需要が、我國の鐵

石によつて、重要な部分が充足されてゐるか、或は支那や印度、南洋方面の鐵鑛を、購入せなければならないか、或はこの兩者の中間を行つて、朝鮮、滿洲方面の植民地から供給せしむるか、といふことが、重大問題である。この狀況の異るに從て、銑鐵を原料として、その生產費中に含まるゝ鑛石の價格に影響を及ぼし、從て銑鐵、鋼鐵の價格變動の一因子となることである。

我國の需要する鐵鑛石は、明治三十四年頃より、その半をば內地以外の產地から、供給せらるゝやうになり、最近は殆ど凡てを輸入に俟つものであることは、次表によりて明瞭である。

鐵鑛石の需要高累年表　（單位佛噸）

年次	內地產出高	輸移入高	合計需要高	需要高に對する輸入高割合(%)	需要高に對する產出高割合(%)
明治三十三年	四一、三七	一六、五〇四	五七、七四一	二九	七一
三十四年	四八、二三四	七一、九七四	一三〇、二〇八	五九	四〇
三十五年	六六、九六一	四九、三七五	一一六、三三六	四三	五八
三十六年	六五、六二六	五二、八二三	一二七、四四九	四四	五六
三十七年	七〇、三八九	三九、五四五	一〇九、九三四	三六	六四
三十八年	一〇三、七〇三	九六、九七七	一九九、六七九	四九	五一
三十九年	一三四、六二六	一二〇、二六六	二四四、八九二	四九	五一
四十年	一〇四、〇四三	一三一、五〇一	二三六、五四四	五四	四六

四十一年	一二七、七六	一九〇、二二	三〇七、九八八	六二	三八		
四十二年	一〇九、八六〇	一八七、五八一	二九七、四四一	六三	三七		
四十三年	一一三、二九九	二四三、九二八	三五七、二二七	六八	三三		
四十四年	一二四、六九五	二三一、八一〇	三五六、五〇五	六五	三三		
大正元年	一五二、九八三	三二一、八六六	四七四、五九九	六八	三七		
二年	一五三、一〇一	四三三、三二六	五七五、四一七	七三	三七		
三年	二三一、六三六	四六〇、九一三	五八二、五四八	七九	三二		
四年	二一八、九五五	五一〇、七六六	六二九、七三一	八一	三九		
五年	二九、九五三	四七〇、〇一六	六〇九、九六九	七七	三三		
六年	二六七、五九四	四一七、七八八	六八五、三八三	六二	三九		
七年	三七八、一二四	五九七、五四一	九七五、六五五	六二	三六		
八年	三六三、九四九	九五四、六〇七	一、三二七、五五六	七六	二四		
九年	三二四、八九八	九九四、九〇一	一、三〇九、七五九	七六	二八		
十年	八六、九七七	七六八、九七七	八五五、五七四	九〇	一〇		
十一年	三九、七四四	九〇八、三三七	九四八、〇八一	九六	四		
十二年	五五、一七四	九八八、六五〇	一、〇四三、八二四	九五	五		
十三年	五七、九三三	一、二〇一、八五九	一、二五九、七八一	九五	五		
十四年	七五、七六五	一、二二一、五七七	一、二八七、三四二	九四	六		

鐵鑛石輸移入高比例累年表（%）

年次	内地産高	輸移入高	需要高	年次	内地産高	輸移入高	需要高
大正元年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	大正八年	二三七	二九七	二七八
二年	一〇〇	一三一	一三一	九年	二〇六	三〇九	二七六
三年	八〇	一四三	一三三	十年	五七	五七	一八〇
四年	七八	一五九	一三三	十一年	二六	二八三	二〇〇
五年	九一	一四六	一二九	十二年	三六	三〇八	二三〇
六年	一五	一三〇	一四四	十三年	三八	三七四	二六五
七年	一八六	二四七	二〇六	十四年	五〇	四一〇	二九四

即ち内地に於て需要する鐵鑛は、大部分これを輸移入に仰ぎつゝあるが、更に各欄の增減狀態を檢するに、大正四年迄は、內地產高は累年減少してゐるが、戰後輸移入高は、同年を絕頂として漸減してゐる。而してこの鑛石輸入は、大部分支那、朝鮮、最近には海峽殖民地より輸入するものにして次表はその國別表である。

鐵鑛輸移入高國別表

年次	支那		英國		朝鮮		海峽殖民地		其の他		合計	
	佛噸	%	佛噸	%	佛噸	%	佛噸	%	佛噸	%	佛噸	
明治卅五年	四七、八九五	九七・〇〇	一、三七四	二・七八			—	—	七八	〇・一五	四九、三七五	

卅六年	五一、六五三	九九・六七	五一	〇・一〇	一二〇	〇・一三	—	—	—	—	五一、八二三
卅七年	三八、七〇六	九七・八七	四六八	一・一八	三六九	〇・九三	—	—	二	〇・〇一	三九、五四五
卅八年	九五、六九〇	九八・六七	—	—	一、二六三	一・三〇	—	—	二四	〇・〇二	九六、九七七
卅九年	一〇七、〇二二	八八・九九	七八九	〇・六六	一三、四二七	一〇・三三	—	—	二九	〇・〇二	一二〇、二六六
四十年	一〇四、三二二	八五・一六	二五四	〇・二一	一七、八七〇	一四・五九	—	—	五六	〇・〇四	一二二、五〇一
四十一年	一三三、二八七	七〇・〇七	三七	〇・〇三	五六、八三六	二九・八八	—	—	三三	〇・〇二	一九〇、二三三
四十二年	八八、九〇六	四七・四〇	六二	〇・〇三	九八、四一七	五二・四七	—	—	一九六	〇・一〇	一八七、五八一
四十三年	一〇七、七一二	四四・一六	一、二五一	〇・五一	一三四、九二四	五五・三一	—	—	四一	〇・〇二	二四三、九二八
四十四年	一三二、八四九	五二・九九	一、五五〇	〇・六七	一〇七、三六一	四六・三一	—	—	五〇	〇・〇二	二三一、八一〇
大正元年	一九五、六二五	六〇・八三	二、四八五	〇・七七	一二三、四〇五	三八・三七	—	—	一〇一	〇・〇三	三二一、六一六
二年	二七七、八八二	六五・八〇	一、九九一	〇・四七	一四二、四二〇	三三・七二	—	—	二二	〇・〇一	四二二、三一五
三年	二九七、一八三	六四・四八	一、六八二	〇・三六	一六二、〇四四	三五・一六	—	—	三	—	四六〇、九一二
四年	三〇八、〇四四	六〇・三三	六六九	〇・一三	二〇一、九七八	三九・五四	—	—	五四	〇・〇一	五一〇、七七五
五年	二七九、二二六	五九・四一	五六一	〇・一二	一九〇、二二五	四〇・四七	—	—	一四	—	四七〇、〇一六
六年	二九五、六八八	七〇・七七	—	—	一二〇、九〇七	二八・九四	—	—	一、一九三	〇・二九	四一七、七八八
七年	三五九、六九八	六〇・二〇	—	—	二三六、六二一	三九・六〇	—	—	一、二二二	〇・二二	五九七、五四一
八年	五九五、一四〇	六二・三四	—	—	三三三、五二一	三四・九四	—	—	二五、九四六	二・七二	九五四、六〇七
九年	六五〇、五二七	六五・三九	—	—	三三二、五三三	三三・四二	—	—	一一、八四一	一・一九	九九四、九〇一
十年	四三九、七六九	五七・二二	—	—	一九〇、五四一	二四・七九	—	—	一三八、二八七	一七・九九	七六八、五九七
十一年	六四四、七三〇	七〇・九八	—	—	八九、八二七	九・八九	—	—	一七三、七八〇	一九・一三	九〇八、三三七
十二年	六六一、七九六	六六・九四	—	—	九五、三九〇	九・六五	一六三、四四一	一六・五三	六八、〇三三	六・八八	九八八、六五〇
十三年	八〇〇、一五七	六六・五八	—	—	一三六、七二七	一一・三八	二六四、九三三	二二・〇四	四二	—	一、二〇一、八五九
十四年	八一三、四九〇	六七・一四	—	—	一〇七、八六八	八・九〇	二九〇、二一三	二三・九五	六	—	一、二一一、五七七
昭和元年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二年	五四五、四一五	—	—	—	—	—	四八八、五五一	—	二八、四八四	—	一、〇六二、四五〇

備考 一、大正七年以降英國の分は其の他へ合算す。
二、海峽殖民地大正十年、同十一年は其の他へ合算す。

右表によれば、我國に對し最も多くの鐵鑛を供給するは、中華民國にして、滿洲に於ては、本溪湖及鞍山站、支那本土に於ては、夫の有名なる大冶である。而して支那以外より多くの輸入なきは、重量、容積及距離等の關係に、基因するものであらう。故に鐵鑛の供給を、圓滑ならしめやうとすれば、我國は支那と密接なる經濟關係に、立たなければならない。

第二項 鐵價の史的考察

今、これだけのことを念頭に於て、鐵價の變遷狀態を考察して見やう。

58
合
73

歐洲大戰以前の消長

鐵市場に就て、價格の消長を概說するに、日淸戰爭の際は、當時未だ國內に於ける鐵の需要微々たるもので、從て價格の如きも丸棒、角鐵、平鐵等の各中等十貫目建僅に二圓二三十錢、値幅も十錢乃至二十錢內外の相違にして、大波瀾を演ずるといふことはなかつた。然るに、同三十七年の二月より、一躍三圓二三十錢に上り、爾來四十年の上半期過ぎ迄、殆どこの高値を持續して、市場は近來稀なる景氣來となりしが、戰後の事業一巡と共に、同年末より四十一年一月にかけて、再び二圓七八十錢の戰前相場に戻り、これが四十四年十一月まで續けられた。而してその後年と共に、國內諸工業の發達に連れ、銑鐵、鋼材の需要益〻多きを加ふるに至り、大正元年より翌二年七月迄、一寸高値を往來して三圓以上を唱へたが、同年八月より又々不況に沈み、三年の七月まで殆ど下膠着の狀態であつた。

歐洲大戰中の消長

それが大正三年七月、歐洲の一端に戰雲動いて、瞬く間に歐洲の强大國が參戰し、何處まで戰禍が擴大するか、見當がつかなくなり、我邦工業界は早くも軍需品の需要を見越して、空前の活氣を帶び、生絲、綿糸の暴落に反し、鐵價は世界的の需給の大變調のため、暴騰を演じた。即ち、內地產額は殆ど增加せざるに、輸入高は大正二年に比し、同三年には二割五分減少、同四年には著しき激減を示し、市場に時ならざる、非常なる逼迫襲來して、未曾有の珍値を現出した。

大正四年に入ると共に、歐洲交戰國より、鐵製品の注文續々入り込み、殊に當時露國よりは、多量の註文殺到して、戰後その代金決濟殘りが、一問題となつた位である。其の他歐洲交戰國への、輸送量は可成りに多く、從て價格は漸次に昂

騰して止まなかつた。

斯く急激なる價格の騰貴が、各種の弊害を釀すこと、一方戰爭の永續する限り、國內の手持品はじ減て、價格の昂騰する一方であることに鑑みて、政府先づ自給自足の政策をとることゝなり、製鐵所を設立せしめたりして、價格の抑制に努めさしたのである。

斯くて反動は來た。さしも連騰の鐵價も、價格表に示す如く、大正五年より六年の初にかけて、一頓挫を來たし、大勢に逆行するやうな、低落を示すことゝなつた。この反動は結局小反動に止まつて、馳て又更に大なる反動が訪れた。

それは大正六年春、今迄中立國として、戰爭の利益を飽くまで吸收して、肥え太つた米國が、遂に戰爭の渦中に投じ、聯合國と共に宣戰を布告したことであつた。この米國の參戰は、聯合軍側に物質的、精神的に多大の勇氣を與へ、かくて紡績の活躍を皮切りとして、鐵價も再び投機的の、風潮が激しくなり、逐月騰貴の速度を速め、最高潮の極、同年八月には十八圓三十四錢といふ、空前の高値を現出した。

而して價格はその後、滔々として昂騰を續けて、その停止する所を知らず、且一方に於て奸商が、惡辣なる手段を弄して、騰貴の勢を助長せしむる傾向が少くなく、爲に時の寺內內閣は、法律の力を以て、不自然なる價格騰貴を除去せんと欲し、同年九月一日農商務省令として、鐵類（米穀類、石炭、綿糸と共に）の暴利取締令を發布した。然るに、この暴利取締令の效果は頗る微弱にして、一時低落したが、容易に下落することもなく、騰貴の大勢を阻止することが出來なかつた。

斯くて本事業の甚だ有利なる念、一般に起り、同種既設會社が擴張をなすもの、及新工場の目論まるゝもの、合計十數社に及び、空前の殷盛を極むるに至つた。今大正七年に於けるその工場數を見るに、

一　鑄鐵工場數

府縣	株式會社	合資會社	個人	合計
東京	—	六(二)	一三(四)	一九(六)
大阪	一(一)	四(一)	一	一六(二)
兵庫	—	—	五(二)	六(二)
埼玉	—	—	一四(一)	一四(一)
北海道其の他	二	三	一二(一)	一八(一)
計	三(一)	一四(三)	五五(八)	七三(一二)

二　鑄鋼工場數

東京	三(二)	—	—	三(二)
大阪	三	—	—	三
合計	六(二)	—	—	六(二)

備考　括弧内のものは時局以後設立したものである。

この結果、銑鐵及鋼鐵産高の如きも、官營製鐵所の擴張と相俟て、著しく増加した。大正三年以來の内地鐵産高左の如し。（單位佛噸）

	銑鐵	鋼材
大正三年	三〇一、七二六	二八二、五一六
四年	三五〇、五三六	三四二、八七〇
五年	四四〇、九一四	三八一、三二一
大正六年	五〇一、四〇二	五一三、四四五
七年	六九四、八三六	五三九、六三七

然るに、米國の金輸出禁止令の發布等ありて、反動の反動として旺盛を極めた製鐵界も、再び恐慌來を思はしめることゝなつた。斯くて七年末愈〻休戰條約が成立して、所謂戰時氣分である變態的の熱は、こゝに一段落を告ぐることゝなつたのである。

戰後の消長

戰亂終熄して、平和條約が締結されると共に、戰時中に突飛なる好況を呈したる產業、殊に鐵市場は、恐慌狀態に陷り鐵價は十月以降漸次降下の步調に轉じ、大正八年の春にかけて、慘憺たる悲況に沈淪し、大成金の心にも、凋落の秋が訪れて來た。

斯く鐵價が暴落した爲、製鐵會社は何れも多大の打擊を受け、戰時中至る處に簇出せる、小規模の工場や、基礎鞏固ならざるものは、作業を休止し、また大規模の會社にあつても、八年上半期に於て、莫大の缺損を暴露するに至つた。

然るに、この反動的不況も、永くは續かずして、同年の三月には早くも底を入れ、それから翌九年三月にかけて、未曾有の價格騰貴と、空景氣とを生み出すやうな、珍現象を現出するに至つたのである。殊に、八年暮より九年の三月にかけて僅か四ケ月足らずであるが、俄かに反騰したのである。三月はその熱狂が頂上に達した時で、平均價格十四圓九十一錢

を示した。

何故に斯くの如き現象が現出したかといふに、永年の戰爭が終結した爲に生じた、經濟的の變動が、割合に早く整理されて、不安裡にあつた戰時工業が、大した破綻をも暴露せずに、落付いたことゝ、鐵の需要が、戰後急に減少することはなく、早くも二三年後なることが、一般に考へられたゝめに、所謂戰後の大景氣來となつたのである。この大景氣は、沙汰の限りの變態的熱狂にして、最も危險を多く孕んだ時であるが、これを眞の景氣來と考へ、盛んに各地に製鐵所開始の計畫を樹て、再び黃金時代の現出するを想はしめたのである。

けれどもかゝる無理が、いつまでも永續する筈はなく、その思惑は見事に外づれて、歐洲列國は極度の緊縮政策に轉じ世界を擧げての整理恐慌風に吹き捲くられ、一葉は先づ株式市場から落ちて、反動的の大暴落となり、爾後釣瓶落しの慘落を演じ、鐵價は又々七、八圓に轉落した。試に七、八年と比較して見るに左の如し。

大正七年一月平均	十六圓二十六錢
八年〃	十三圓　四　錢
九年六月平均	八　圓五十五錢

この再度の暴落によつて、所謂戰時鐵成金は、脆くも槿花一朝の夢と消え、種々の悲喜劇を隨所に演出した。製鐵會社の成績はその後、期を逐うて不良化し、何れも莫大の缺損を、計上することゝなつたゝめ、各社は何れも減資を斷行し、缺損の切捨を行つた。

爾來經濟界は、一般的に悲觀氣分に囚はれたのであるが、恐慌後の反動一度整理濟みとなるや、忽ちにして人心は浮調子となり、下半期より同年終末まで、鐵價は又々騰り出して、所謂中間景氣の現出を見るに至つたのである。この中間景氣も、大正十一年の中頃より、政府の物價調節案により、多少效あらはれ、下向の傾向を辿りつゞけたのであるが、根本的に言へば、まだ〳〵戰前よりも好立場にあり、價格の如きも、戰前の二倍乃至三倍を維持してゐた。即ち左の如し。

大正二年平均	三圓　十二錢
三年	三圓　一　錢
四年	四　圓九十五錢
五年	八　圓七十七錢
六年	十三圓五十九錢
七年	十七圓　十二錢
八年	九　圓九十二錢
九年	九　圓七十四錢
十年	五　圓九十二錢

大震災前後の消長

大正十一年の下半期にかけて、中間景氣後の沈滯を來たし、鐵價も低落の氣運に向つたことは前述の如し。同十二年に入りては遂に、五圓臺割をさへ見るに至りたるが、同年春に至り、突如英佛の對獨關係が乖離して、佛國が單獨にルール地方を、軍事的に占領したるため、鐵價は石炭、石油等と共に上騰して、僅か二ケ月餘の中に、六圓臺へと躍進を見るに至つた。

その後、金融界は勿論當業者も、極く愼重なる態度を持し、歩一歩健實性を帶ぶるに至りたるが、不幸にして九月一日夫の關東大震火災により、需給關係は未曾有の混亂狀態に陷り、加ふるに取引機關の不能と相俟て、一時殆ど天井知らずの珍高値となり、何處まで上騰するか、殆ど想像も及ばない狀勢にあつた。こゝに於て時の山本内閣は、直に應急的處置として、暴利取締令或は物資供給令を發布して、需給調節のために全力を盡したる爲、年末には最早低落歩調に轉じた。

斯くて大正十二年は、混亂狀態の中に過ぎ行き、年改つて十三年となつた。この時既に鐵の供給は、充分飽滿狀態に達し、玆てその反動が訪れて來た。即ち連月輸入は巨額を以て世人を脅かし、海外への注文品多く入荷すると共に、他方震災地の漸次復興すると共に、市場は忽ち供給過剩となり、加ふるに海外市場著しく惡化し、同時に内地に於ける、貸借關係の整理急となつた爲に、鐵の如き復興の思惑に祟られたものは、最も著しく低落を演じた。これより鐵價は、眞に下落すべき氣運に向ひ、爾來大正十四年も續落狀態となり、辛うじて四圓掮みを維持するに止まり、賣行の如きも往年、好況時代の半にも及ばない閑散さであつた。

恐慌前後の消長

昭和元年に入りても、續落に次ぐに續落を以てし、政府の保護政策も、何等の效を奏せず、年末には四圓臺割さへ見るに至つた。

同二年に入りて、財界恐慌以來益〻人氣全く沈衰し、需要も著しく減退したので、相場は六月平均三圓六十錢まで反落し、爾後辛うじて、保合を續け得たに過ぎなかつた。

之を要するに、本年の鐵價不振の原因とも見るべきものは、鐵經濟界の人氣銷沈により、假需要減退したこと〻、企業に伴ふ前途不安の、人氣橫溢したゝめである。而して下半期鐵價の安定したる原因は、鐵材輸入減少し、加ふるに鐵の關稅引上が、實施せられんとしてゐる折柄とて、外國よりの注文は不安のため出來ぬ狀態にあり、且内地に於ては、關東三社の共同販賣が成立しかけ、關西もこれに做うとしてゐるため、玆に一先づ安定したものと思はれる。

第三項　鑛石價格の變動

前述の如く、鑛石は鐵の原料である。故に、鑛石の價格の變遷を一考するも、徒事ではなからうと思はれる。

鐵鑛は大正六年迄、四十年を除く外、殆ど上騰せず、むしろ漸落してゐるのを見る。これと平鐵價格とを比較するに、大正三、四、五年大戰開始の時は、既に平鐵價格はその指數九三、一五四、二七二に上つてゐるが、鐵鑛石は、尙九七九九、一〇一の邊に止つてゐる。これ、大戰時代に鐵成金の輩出した所以の一であらう。而して鐵鑛石價格下落の原因としては、技術の發達による採鑛費減少も考へられるが、鑛石運搬費の減少に、大部分存すると思はれる。アメリカに於ける鐵鑛石の生産費中、運搬費は三七%乃至四四%を占めてゐる。故に交通（特に鐵道）の發達による運搬費の減少が、鐵鑛石價格の低落を來たすことの、著しいこと〻思はれる。

我國の鐵鑛石の大部分は、支那から來るものであることは、前述の通りである。支那鑛石の下落が、運賃の低下によつて、起つたか否やを、統計的に立證することは得ないが、支那に於ける、鑛石運搬の狀況によつて、その然るを了解する

ことが出來やう。

註　「鐵及鋼」第三年一號西澤氏論文大治鑛山作業の今日及『鐵鋼業發達史論』小島精一論文に於て詳細に說明せられてゐる。

大正九年以後の事實を見るに、平鐵價格指數は、三〇二、一八三、一五九、一六六、一五四、一四三、一三一、一一四となつてゐるに拘らず、鑛石の方は三七九、二九五、一九四、一三八、一四二となり、下落率は平鐵よりも少ない。即ち狀態は明治三十三年頃より鐵鑛側に有利となつてゐる。鐵鋼石の價格の變動は景氣に遲れて起る。

平鐵及鐵鑛石價格比較（單位鐵鑛石錢、平鐵圓）

年次	鐵鑛石輸入單價	同上指數	平鐵價格	同上指數
大正元年	三五・六	一〇〇	三・二三	一〇〇
二年	三三・九	九五	三・一二	九七
三年	三四・六	九七	三・〇一	九三
四年	三五・一	九九	四・九九	一五四
五年	三五・八	一〇一	八・七七	二七二
六年	四九・六	一三九	一三・五九	四二一
七年	一六〇・八	四五二	一七・一二	五三〇
八年	一五五・九	四三八	九・九二	三〇七
九年	一三四・九	三七九	九・七四	三〇二

年次	鐵鑛石輸入單價	同上指數	平鐵價格	同上指數
十年	一〇四・九	二九五	五・九二	一八三
十一年	六九・〇	一九四	五・一二	一五九
十二年	四九・〇	一三八	五・三五	一六六
十三年	五〇・四	一四二	四・九八	一五四
十四年	五一・三	一四四	四・六二	一四三
昭和元年	五四・四	一五三	四・二四	一三一
二年	五八・一	一六三	三・六九	一一四

鑛石の安價は、產地が自國勢力範圍內にあること、及近距離にして、運搬賃のかゝらぬことを、最も必要とするが、この點に於て、朝鮮產を多額に有することは、我國の有利なる點である。事實に就て見るも、朝鮮鑛は最近を除く外、一般に安價である。

鐵鑛石輸入國別單價表（一噸當單位圓）

年次	支那	朝鮮	年次	支那	朝鮮
明治三十五年	七・一七	三・六〇	四十年	七・二二	八・三四
三十六年	六・九七	七・五二	四十一年	六・八五	七・三〇
三十七年	六・七三	四・八三	四十二年	六・六四	五・七四
三十八年	七・〇二	八・一八	四十三年	六・五〇	五・二七
三十九年	七・一四	七・四九	四十四年	五・八三	五・四三

大正元年	五・六〇			五・一五
二年	五・五三			五・〇八
三年	五・六二			五・一三
四年	五・七九			五・一七
五年	四・八九			五・三四
六年	八・〇五			七・〇〇
七年	二六・七四		昭和元年	二〇・六八
八年	二五・七六		二年	七・〇二
九年	二二・一一			一〇・一一
十年	一六・五四			八・九五
十一年	一〇・二三			八・六一
十二年	七・三四			七・〇六三
十三年	七・六三			七・二七
十四年	七・七四			八・五一
七年	七・九六			？
八年	八・四九			？

× ×

歐洲大戰後に於ける、鐵價低落の傾向は大體に於て、世界共通の現象であり、又一般物價に比して程度の甚こそあれ、二三の例外を除いては、より著しい低落を遂げてゐる點に於ても、普通である。今大正三年の鐵價及一般物價を基準とすれば、各國々内市場に於ける、最近の鐵價指數（日本は大阪市平鐵、佛國は工形鋼、其の他は棒鋼價格により算出（は左の通りである。

× ×

本邦及歐米各國に於ける物價指數對照表

	日本		英國		米國		獨乙		佛國	
	鐵價	一般物價	鐵價	一般物價	鐵價	一般物價	鐵價	一般物價	鐵價	一般物價
大正三年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
十一年	一七〇	一五七	二三九	一四二	一四〇	不明	不明	不明	二九三	三三六
十二年	一七九	一七〇	二三〇	一三九	一五四	不明	不明	不明	三七五	四二〇
十三年	二〇五	一八二	一九一	一四九	一五四	一三三	一二七	三七六	四九九	
十四年	一七五	一七五	一七六	一六一	一三九	一二四	三一六	五六一		
昭和元年	一六〇	一七四	一五〇	一四〇	一二九	四五一	七一二			
二年	一五五	一六〇	一四八	一四〇	一三一	四一六	六三〇			

即ち、最近に於ける鐵價及一般物價の、各國に於ける狀態を見んがために、大正三年の鐵價及物價を一〇〇とし、昭和二年の兩指數を比較すれば、日本は一般物價に對し、鐵價は五九となつて、右五ケ國中の最低となり、佛國は鐵價六六となつてこれに次ぎ、英國は七八となつて更にこれに次ぐ。何れも一般物價に比して、鐵價は著しく低落を告げて、各鐵鋼市場の現況を物語り、これに反してその鐵工業の、比較的好況である米國では、一般物價一〇〇に對して、鐵價一〇八となり、獨逸は一〇六を示してゐると言ひ得やう。

斯様の次第で、他の一般物價よりも、餘程の下位にあるので、更に一層苦しい立場にあるけれども、間斷なく努力を續けて行くならば、漸次需要も增加し、設備の完備と相俟つて、生産高も漸次增加し、更に生産費も下げ得る可能性あるを以て、敢て前途は悲觀すべきではない。

故に、今後その經營を合理化するに於ては、必ずしも悲觀すべき時期に際してゐることを、深く信じて疑はないのである。（熊　見）

第八節　セメント

第一項　セメントの需要

財界好況の時は、セメントの需要も亦旺盛となり、從て其の價格は昂騰するのである。セメントの消費は、如何なる事業に何程使用さるゝや、その確實なる消費統計を得難く、專門家の意見も區々であるがセメント聯合會の調査を示せば、次の如くである。

セメント消費割合（昭和三年自四月至九月）

鐵道用	一三・六%
電力用	一一・九
港灣用	三・〇
道路橋梁用	五・九
其の他土木用	九・一
建築用	二二・〇
鑛業用	一・二
小口需用	三〇・四
セメント製品用	一・九
雜用	一・〇
合計	一〇〇・〇

大阪市は、セメントの大消費地で、亦大供給地である、即ち昭和二年に於ける大阪市內の、セメント生產高百五萬樽で全國の六%に當り、消費は阪神地方に於て、全國消費の二〇%（京濱地方に於て同じく、三〇%）を消費されている。我國はセメント原料たる、石灰石及粘土が豐富に存在するので、從て工場も主として、原料生產地に集中されて、原料の豐富なる九洲地方の、セメント生產額は、全國の約四〇%に達するのである。

如斯我國に、原料の豐富なることは、綿糸紡績がその原料たる棉花を、印度及米國等に求めなければならない結果、我國の原料需要が、之等諸國の國內的事情に牽制せられると云ふ憂は、斯業には殆どないのである。而して大正年間に於ける、我國セメント消費高は、次の如くである。

セメント消費高（單位千樽）

年次	需要總數			需要增加率(%)	
	內地販賣高	輸出高	合計	內地需要	外國需要
大正元年	三、二三四	五一	三、三〇五	（一）一・三	（一）二六
二年	三、五二九	一四九	三、六七八	八・四	一九二
三年	三、四〇二	二五九	三、八六一	二・〇	七三
四年	三、二六六	六七七	三、九四三	（一）九・三	一六一
五年	四、一〇三	六四五	四、七四八	二五・六	（一）四

六年	四、九五〇	五三三	五、四八三	二〇・六	（一）一七
七年	五、八五四	九〇四	六、七五八	一八・二	六九
八年	五、二二八	一、〇三八	六、二六六	（一）一〇・六	一四
九年	六、六三七	一、一三〇	七、七六七	二六・九	八
十年	八、一一九	九七五	九、〇九四	二二・三	（一）一三
十一年	一〇、四三五	六一〇	一一、〇四五	二八・五	（一）三七
十二年	一一、六七四	三〇九	一一、九八三	一一・八	（一）四九
十三年	一二、六二二	四五〇	一三、〇七二	七・五	四五
十四年	一三、一三九	一、五七四	一四、七一三	四・一	二四九
昭和元年	一六、七七三	一、九三〇	一八、七〇三	二七・六	二二
二年	一八、八〇三	一、九四八	二〇、七五一	三・一	一

前表は假りに需要高を以て、消費高と看做したのであるが、嚴格に云へば、需要と消費とは、區別せらるべきである。即ち需要とは第一次的の購買數である、從て需要には直接消費に充てらるべき、第一義的のものと、然らざる第二義的のものとが含有されているので、消費とは直接消費に供せられたものを指すので、前表は第一次的購買數である。尙需要を消費と見做した爲に生ずる缺點は、需要の增加は必ずしも消費の增加を示すに限らない場合があるからである、即ちその價格が低落したために、需要が增加する場合があり、反面價格が騰貴した爲に供給が增加する場合もあるからである。

而して前表により外國需要は、著しく增減あるを見るが、その增加の原因は主として需要の增加、減少は主として船腹不足、運賃昂騰、需要減少等に由るのである。

內地の需要は大體遞增を示している、即ちセメントは、近代的必需品にして、その消費の遞增は必然的である。今セメント消費の、大體の傾向を知るため、東京市の建物に就き、材料別敷地坪數を見れば、次の如くである。尙大正十二年末の、木造建物が激減せるは、關東震災の結果である。

東京市材料別建物敷地坪數（單位千坪）

	コンクリント 坪數	コンクリント 百分比	木造 坪數	木造 百分比	其の他 坪數	其の他 百分比	コンクリート材建物增加率 %
大正四年	一〇	〇・一五	五、八一四	九二・〇三	四九四	七・八二	—
五年	一一	〇・一八	五、八六八	九一・五〇	五三三	八・三二	一六
六年	一三	〇・二〇	五、九三一	九一・三七	五四七	八・四三	一五
七年	一八	〇・二七	六、〇五八	九一・八二	五二二	七・九一	三五
八年	一八	〇・二八	六、〇五六	九一・八四	五二〇	七・八八	三
九年	二五	〇・三七	六、一六一	九一・八六	五二一	七・七七	三六
十年	三一	〇・四六	六、一五二	九一・七七	五二〇	七・七七	二五
十一年	四二	〇・六三	六、一四三	九一・六二	五二〇	七・七五	三六
十二年	七四	二・六六	二、五八九	九二・六四	一三〇	四・七〇	七七
十三年	一一四	二・三〇	四、六六〇	九四・五三	一五六	三・一七	五三
十四年	一五四	二・八四	五、〇九九	九三・六六	一九一	三・五〇	三六
昭和元年	一八六	三・〇八	五、七二七	九四・六七	一三六	二・二五	二一

第二項　セメントの供給

セメント原料が我國に潤澤であり、その生産工業が發達せる結果、その生産品は、内地需要を充たすに止まらず、外國の需要にまで應じている、從て之が外國よりの輸入は、明治時代には多少あつたが、大正時代に入りて殆ど皆無となつたのである、然るに大正十二年の關東震災後、復興材料として、多量のセメントが輸入さるゝに至り、而してその數量は、昭和元年以降に於てしか判明しないが、昭和元年の數量は九萬七千樽、昭和二年は六萬三千樽、昭和三年十八萬二千樽である。

因に我國の生産額、輸入額は次の通りで、昭和二年の生産額は、大正元年乃至大正四年の約五倍強に當る。

セメント供給高（千樽）

年	生産高	繰越高	計	輸入高	合計	增加率
	内地よりの供給高					
大正元年	三、八〇四	四八三	四、二八六	—	四、二八六	—
二年	三、七四三	九八一	四、七二三	—	四、七二三	一〇・一
三年	三、六二五	一、〇四四	四、六六九	—	四、六六九	（一）一・一
四年	三、九四三	八〇九	四、七五二	—	四、七五二	一・七
五年	四、四九五	八〇九	五、三〇四	—	五、三〇四	一一・六
六年	五、五〇三	五五七	六、〇五九	—	六、〇五九	（一）一四・二
七年	六、六四〇	五七七	七、二一六	—	七、二一六	一九・〇
八年	六、四四五	四五八	六、九〇三	—	六、九〇三	（一）四・三
九年	七、八五二	六三六	八、四八八	—	八、四八八	三一・九
十年	九、〇一九	七三一	九、七四一	—	九、七四一	一四・七
十一年	一〇、七九六	六四八	一一、四四四	—	一一、四四四	一七・四
十二年	一三、一〇八	三九九	一三、五〇七	—	一三、五〇七	一八・〇
十三年	一三、七四〇	一、四三五	一四、一七五	？	一四、一七五	四・九
十四年	一四、五九九	一、一〇三	一五、六六二	？	一五、六六二	一〇・四
昭和元年	一八、六一〇	七八七	一九、三九七	？	一九、四九四	二四・四
二年	二〇、七五三	七五九	二二、五一二	—	二二、五七五	一〇・六

第三項　セメント生産費

セメント價格を基礎的に決定すべき、生産費は種々の條件によりて左右されるが、その主要なる條件は、

一、原料及燃料の工場着原價

一、設備の差異による勞力費及動力費

の二者で、之等の好惡如何で、大きな差が生ずるのである、然し各セメント製造業者は、生産費を極秘に附しているので、詳細は不明であるが、昭和三年當時、セメント一樽を三圓五十錢位で供給することは、苦痛であると稱しているが假りに三圓五十錢を標準とすれば、樽代七十錢を差引いた、純セメントの生産費は二圓八十錢見當で、之れに樽代、運賃

利潤等が加算されて、消費價格となる譯である。

而してセメントの裸生產費割合は、凡そ次の如くである。

セメント生產費（百分比）

原料費	一八
動力費	一一
修繕費	九
營業費	一一
勞銀	一七
燃料費	二七
雜費	六
計	一〇〇

更に生產地方別生產費は、九州地方一〇〇に對し、中國及東北地方一二五、東京地方一三〇である。

生產費の中、最も伸縮性を有するものは、燃料費即ち石炭費で、原料費たる石灰石田等は、殆ど各工場の所有する所である。而して前記生產費の地理的差異、及運賃の地理的差異等によりて、各消費地に於ける價格に、多少の高低が生ずるので、大阪市と東京市を比較すれば、即ち次の如くである。

大阪及東京のセメント價格比較

	大阪	東京
	圓	圓
大正十年	六・五七	七・七八
十一年	七・七七	八・七三
十二年	七・三二	八・三二
十三年	五・一〇	六・六一
十四年	五・六六	六・二〇
昭和元年	五・六五	六・三〇

第四項　セメント價格及其の騰落

卷末附表によりて、大阪に於けるセメント價格及價格指數を、各月別に知り得るが、概括的にその變遷を見るため、毎半期の平均價格指數を示せば、次の通りである。

セメント價格指數（大正元年平均ヲ百トス）

	下半期	上半期
大正元年	一〇〇	一〇〇
二年	八二	九七
三年	六七	七三
四年	七四	七一
五年	一二七	八五